第6回 文化と歴史そして生態を重視した もう一つの草の根の農村開発に関する国際会議

―京都市美山町知井 2014年11月15日～17日―

報　告　書

2015年3月

安藤和雄・市川昌広　編

京都大学（東南アジア研究所実践型地域研究推進室、地域研究統合情報センター
地の拠点事業「ＫＹＯＴＯ未来創造拠点整備事業ー社会変革期を担う人材育成」）
高知大学自然科学系「中山間」プロジェクト、大豊町「ぬたたの会」

開会のあいさつ
Welcome　Address

弓削雅裕（南丹市美山支所長）
Masahiro Yuge,（Deputy Representative, Miyama Sub-Office, Nantan City-Corporation）

皆様、こんにちは。

皆様をお迎えした、ここ南丹市美山町は、木々の紅葉が進み、冬に向けた準備を始める季節となりました。

本日は、「第６回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議」が盛大に開催されますことをお喜び申し上げますとともに、アジア各国からお越しいただいた皆様を心から歓迎いたします。

南丹市美山町は、豊かな自然環境と美しい農村景観を有し、古き良き日本の原風景が色濃く残るまちです。数多くの茅葺き民家が残存する「かやぶきの里」や、手つかずの原生林が残る「芦生の森」などに多くの観光客が訪れます。しかしながら、基幹産業である農林業の低迷により、６５歳以上の高齢化率が４２％と、過疎化と少子高齢化が著しく進行したまちでもあります。

美山町の特徴の一つは、行政と住民の距離が近いことです。

住民と行政が共に考え、共に行動するための組織である「地域振興会」や「美山まちづくり委員会」などをつくり、その共働のもとに、豊かな自然と文化を守り、交流人口を増やして仕事と収入をつくり、定住人口の増加につなげる取り組みを進めています。

現在、京都府におきましては、京の奥山のすぐれた自然と古都を支えた歴史・文化を未来へ継承するため、「芦生の森」を中核とし、美山町全域を含むエリアの国定公園新規指定に向けた取り組みが進められています。私たちは、貴重な自然を守るとともに、森や川、里の魅力を活かして、地域の活性化や持続的な発展を目指していきたいと考えています。

今回の会議の目的は、日本やアジア各国の農山村の現状や課題について意見交換され、地域の将来のあり方について考えることであると伺っております。美山町の現状や課題につきましても十分ご理解いただき、皆様方から美山町の取り組みに対するご意見等をいただけましたら、誠に幸いに存じます。

最後になりましたが、美山での会議が有意義なものとなりますとともに、皆様がご健勝で、今後益々ご活躍されますことを祈念して、歓迎の言葉といたします。

基調講演「相互啓発という自覚」
Key Note Speech : Self- Awareness through Mutual Enlightenment

安藤和雄（京都大学東南アジア研究所）
Kazuo Ando (CSEAS, Kyoto University)

おはようございます。土曜日のお休みの日に、ご出席いただいた南丹市美山町支所長弓削雅裕様をはじめお集まりにいただいた美山町の皆さん、本国際会議の発表者、お世話いただいた皆さん、大変感謝致します。特に、遠方からおいでいただいた諸外国、京都ボランティア実践研究会、高知大学、山口大学、福岡大学、京都学園大学の関係者の皆さん、ありがとうございます。今日の国際会議そして本日「公開シンポ：アジアの村で何が起こっているのか！？」を開催できるのも知井振興会の会長高野紘様、事務局長河野賢司様のご尽力の賜物です。皆様に心から感謝致します。ありがとうございます。

本国際会議も今回で第 6 回目を迎えることができました。今回の国際会議の目的は第一に今日の公開シンポを開催し、インド、ミャンマー、ブータン、バングラデシュで、過疎あるいは住民の都市への移住や農業離れの状況に焦点をあてて、村の事情について知ってもらい日本の過疎や農業離れの状況をアジア的な視点の中で位置づけたいことと、第二に現在の日本では農村支援の大きな存在となった学生ボランティ活動を高知大学の大豊の怒田集落、京都ボランティア実習実践研究会の美山町での活動、山口大学の阿武町での活動事例をお互いが知ることによりそれぞれの活動の意義ややり方を再認識していただきたいこと、第三に本国際会議に海外、日本の他地域から参加していただいた方々に現場を見学していただき、美山町の知井振興会の参加での地域再生の取組について中心的に活動を担っておられる方の話をうかがいます。そして山口県阿武町、高知大豊怒田、京都亀岡の地域再生の取組との事例比較から地域再生の可能性についてお互いがお互いの事例を相対化することで現在の活動の意義やよい点、改良すべき点などを考えます。

すでに皆さんお気づきになれたことと思いますが、この草の根の農村開発に関する国際会議の大きな特徴は、日本の各地で地域再生に実際に活動しておられる方々、難しい言い方をすると当事者の方々が外国の事情と各地域の取組を知ることによりご自分の活動を相対化することにあります。人間は自分の姿を自分の目で見るためには、鏡、ガラス、波立たない静かな水面などに写すか、写真やビデオで撮ってもらった自分の姿を見るしか手段はありません。そして、自分で自分を知ることになります。おかしなもので人間は自分のよい点や、まずい点について実はそれほどよく分かっていません。他人のことはよく分かるのですが、まったく自分のこととなると見えてないことが多いのです。

私たちの国際会議の方法や目的の特徴を私は趣味でマラソンの話しを使って説明します。鴨川沿いにある大学の職場には、天気のよい朝は自転車で通います。マラソンブームなのでしょう、鴨川に設けられたウオーキング道路を走っている人が多いです。そのランニングフォームを見ていると、「歩幅が小さい脹脛（ふくらはぎ）の筋肉だけ使ったようなちょこちょこ走りじゃだめだ。もっと腰をいれて、腕をしっかりと振って、体全体をつかってダイナミックに柔らかく走らないと」と思わずアドバイスしたくなります。自分のランニングフォームは棚にあげて思っているのですから、いい気なものです。しかし、実際に他人のランニングフォームのコーチでもない私が突然助言したりすると、「そんなことはあなたに言われなくとも分かっている」と怒り出したり、露骨に厭な顔をする人がきっと多いことでしょう。私などはまったく怒り出すような部類の人間です。しかし、実は、他人の走る姿をみていて、私は、私が望んでいるランニングフォームをそれに重ねてイメージしているのです。したがって、ラニングフォームへの批判は、私のランニングフォームの改良すべき点でもあるのです。人に言葉で指摘されれば頭にくることも、人の姿を見れば自ずと自分のよい点、まずい点を理解し、改良への実践が、意識せずとも始まります。自分にあった効率的で美しいランニングフォームを獲得したいという目的のために、自らのフォームを理解し、改良への実践という行動が意識せずとも始まることを、フォーム改良を自覚した、あるいは、自覚が芽生えたと私たちはいいます。この事例で大切な点は、私もマラソン大会に出るランナーという当事者であるという点です。当事者が同じ目的をもって行動している人たちの姿を見たときには、無意識のうちに自らの姿を知り、直観的に自分が実践すべき内容をつかみ行動に移していけることが多いのです。人が走っている姿を見て心の中でそれを批評していることは、実は自分を分析しているのに他ならなかったのです。しかし、ここで大切な点は私が分析を加えているランニングをしている人も私も、実はランニングをする「共通の問題」をもって、日々ラニングをしている当事者と当事者の関係なのです。だから、当事者の姿をみることによって自覚が生まれるのです。もし、私がランナーで

もなければ、恐らく、まずランニングフォームに対する興味も湧くこともないだろうし、湧いたとしても、対象に対する批評する言葉だけで、私を変えていく動機にも、実践にも、まったく関係がありません。果たして、そんな人が実際に有効な助言ができるのか、というのもはなはだ疑問が残るのです。自分を変えていくためには、実践という行動が必要です。行動なくしては何も始まりません。こうした自覚をつくっていくことを相互啓発と私は言っています。

本国際会議に集まった大学研究者の方々は地域研究という研究活動に携わっています。私もそうです。私は自分の地域研究を「相互啓発による実践型地域研究」と呼んでいます。それは研究が、地域を知ることが鏡の役割をして、自らを理解させ、地域がもっている問題の克服をめざすための実践の契機となっていく自覚を研究者に生じさせていく研究です。そうですから、「相互啓発による実践型地域研究」にもっとも適した専門家は、地域に暮らす、あるいは、地域の人々が抱いている問題に具体的に関心がある人、すでに問題にむかってなんらかの行動をおこしている「地域に私もいる」という地域に暮らすことの当事者的な意識をもった人だと考えています。そういう方が、もっとも地域の真の姿を知ることで、地域が乗り越えていかなければならない問題への解決策を自らが考えだしていけるのだと思っています。

美山町に来る前に、海外から来られている方々を広島平和記念公園にお連れし、その夜は、蒲刈島に宿泊しました。翌日、呉市役所の蒲刈町支所を訪問し蒲刈町誌を求め、広島駅への帰りに呉市役所で平成25年呉市統計要覧を入手し、過疎の現状と耕作放棄地の現状を統計数字で知り、現場で実際に蒲刈の耕作放棄地をみてまわりました。その時に、強く印象にのこったコメントがあります。インドのアッサムのゴウハティ大学から来られたバガバティさんが「この現状を見ていたら、アッサムにもすでに過疎や離農の問題があることを思った」とか、ブータンのシェラブチェ大学から来られたソナムさんが「ブータンでは今一生懸命、村に道路をつくり、電気をひいて村のインフラ整備をしているが、その結果が蒲刈の現状だとすると、30年後のブータンもこうなるだろう」、ミャンマーのウインさん、バングラデシュのシシールさんも「こんな整備された農道は、私たちの街の道以上だ」とコメントしていました。「なんでこんなにインフラが整備されているのに、人がいなくなっているのか」、皆さんの率直な疑問なのです。しかし、確実であることは、4名の方々の中に芽生えた過疎と離農への問題関心が、単に経済問題だけが背景となって生まれて問題ではないことの強い印象と自覚です。過疎や離農という問題は、4名の方々が指摘しているように、もはやアジアのグローバルな問題です。しかし、この問題は、4名の方々がもう一つ指摘しているように、蒲刈の現場を見てはじめて自覚できることでもある、ということです。日本の過疎、離農の現場はアジアにとっては鏡の役割が大変大きく、アジアの人々は近い将来には過疎と離農の問題に、日本を手本として自ら取り組んでいかなければならないことになります。まさに、日本はその分野での先導的な役割が期待されているのです。日本では過疎、離農の問題を切り捨て、過疎地を整理することで問題を解決していこうという計画が一方でありますが、本当に、そんなことでよいのでしょうか？明らかに言えることは、これは「負の螺旋階段を登ること」になります。それはアジア諸国にとって誇れるような姿ではありません。特に、4名の方々が述べているように、日本の栽培放棄地化がすすむ耕地や過疎化がすすむ集落は、アジア的な視点からは最優良耕地であり、インフラがととのった住居空間です。私は4名の方にお願いしたのは、是非、この点から「日本は何をしているのだ」と強いお叱りの言葉を投げかけてもらいたいのです。日本人がやるべきことは自国の状況を棚にあげた経済発展ではないはずです。

知井振興会にお世話になり、昨年度からブータンの若い人たちを佐々里で滞在型の参加型農村学習と実践のプログラムを実施させてもらっています。来年度には京大の学部の全学講義のポケゼミでも実習の機会をつくっていただく予定です。山口大学や京都ボランティア学習実践研究会のような若い皆さんが積極的に過疎、離農の現場をボランティ実践や実習を通じて理解してもらうことが大変大切で、そこに、私は、確実な問題解決の糸口を感じています。そしてそれはアジア諸国への波及効果も高いことでしょう。

この3日間を美山町で過ごすことで、よりお互いの関係が深まり、実践への自覚をさらに強固にしていくことを願って、私のお話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

第6回　文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議
—京都市美山町知井 2014年11月15日～17日—
報告書 目次

開会のあいさつ：弓削雅裕(南丹市美山支所長) ・・・ i
基調講演「相互啓発という自覚」安藤和雄(京都大学東南アジア研究所) ・・・ iii
目次 ・・・ iv
著者一覧 ・・・ v

第1部　海外の事例紹介

「東部ブータンにおける人口移動と農村の過疎化及び農業活動への影響ータシガン県ラディ郡におけるケース・スタディ」ソナム・プンショ（ブータン王立シェラブッシェ大学、ブータン）・・・・・・・・・・・・ 1

「ミャンマーにおける都市化の影響」
ウイン・ミャット・アウン（セアメオ歴史・伝統地域センター、ミャンマー）・・・・・・・・・・ 6

「インド、アルナーチャル・プラデーシュ州、アパタニ盆地におけるエコフレンドリーな農法」
アバニ・クマール・バガバティ（ゴウハティ大学、インド）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

「バングラデシュ、チッタゴン丘陵の在来民族の人口減少」
チャクマ・シシール・ショポン（国連食糧農業機関、バングラディシュ）・安藤和雄（京都大学東南アジア研究所）・ルシャイ・タンズアラ（国連食糧農業機関、バングラディシュ）・・・・・・ 15

「タチャンパ村の定住と発展に関する活動報告」
ランプイ・ケーンソンバット（ラオス国立大学、ラオス）、ソンブン・ポンスワン（サイタニー郡タチャンパ村村長、ラオス）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

「ラオスの伝統文化･歴史の保存の実践ーラオス国立大学農学部との協働を通してー」
矢嶋吉司（京都大学・東南アジア研究所）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

第2部　学生ボランティアの活動と学び

「高知大学の学生の地域での活動」市川昌広（高知大学）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

「大豊町怒田での高知大学生の活動」高橋一弘（高知大学学生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

「知井と京都ボランティア学習実践研究会学生ボランティア」名賀亨（華頂短期大学）・・・・・・・・・・・ 43

「美山町知井での京都ボランティア学習実践研究会の活動と問題点」京都ボランティア学習実践研究会学生 ・ 45

「地域振興における学生ボランティアの役割～山口県阿武町での交流事業の事例に基づいて」
辻　多聞（山口大学）・・・ 50

「大学の地域貢献を考える」天野　原（山口大学地域連携推進センター）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

第3部　地域の活性プログラム

事例発表　山口県阿武町「集落点検を踏まえた女性の活動～文化伝承を目的とした紙芝居づくり」
辰巳佳寿子（福岡大学）・西村美和（山口県萩農林事務所）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61

事例発表　高知県大豊町「山村集落の現状と課題～高知県大豊町怒田集落から～」氏原　学（大豊町農家）・・ 65

事例発表　京都府亀岡市「すいたん農園に集う人々～農業体験塾がつくる農のある暮らし～」
大西信弘(京都学園大学)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67

事例発表　美山町知井1「有限会社　かやぶきの里」　勝山　直（㈲かやぶきの里）・・・・・・・・・・・・ 71

事例発表　美山町知井2「有限会社　芦生の里」今井　崇（㈲芦生の里）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74

事例発表　美山町知井3「エコツーリズムによる地域振興」高御堂　厚（美山ふるさと株式会社）・・・・・ 75

事例発表　「知井振興会の地域活性における役割」河野賢司（知井振興会）・・・・・・・・・・・・・・・・ 77

第4部　総括会議

総括討論のまとめ ・・・ 97

目次（英文）・・ 99

編集後記 ・・・ 100

著　者　一　覧
（五十音順）

氏　名 (Name)	所　属 (Affiliation)
アバニ・クマール・バガバティ (A.K. Bhagabati)	ゴウハティ大学地理学科 (Department of Geography Gauhati University)
天野 原 (Amano Gen)	山口大学地域連携推進センター (Yamaguchi University, The Center for Promotion Community Partnerships)
安藤 和雄 (Kazuo Ando)	京都大学東南アジア研究所 (Center for Southeast Asian Studies,Kyoto Univ.)
市川 昌広 (Masahiro Ichikawa)	高知大学農学部 (Faculty of Agriculture ,Kochi Univ.)
今井 崇 (Takashi Imai)	有限会社　芦生の里 (Ashu-no-sato Ltd.)
ウイン・ミャット・アウン (Win Myat Aung)	セアメオ　歴史・伝統地域センター (SEAMEO Regional Center for History and Traditional)
氏原 学 (Manabu Ujihara)	大豊町農家 (Farmer of Otoyo Town)
大西 信弘 (Nobuhiro Ohnishi)	京都学園大学 (Kyoto Gakuen University)
勝山 直 (Tadashi katsuyama)	有限会社　かやぶきの里 (Kayabuki-no-sato Ltd.)
京都ボランティア学習実践研究会 (Kyoto society of practical volunteer education)	京都ボランティア学習実践研究会 (Kyoto society of practical volunteer education)
河野 賢司 (Kenji Kouno)	知井振興会 (Chii promotion association)
ソナム・プンショ (Sonam Phuntsho)	ブータン王立シェラブッシェ大学 (Sherubtse College, Royal University of Bhutan)
ソンブン・ポンスワン Somboun PHOMSOUVANE	ビエンチャン特別市サイタニー郡タチャンパ村村長 (Village Chief, Thachampa village, Xaythany district, Vientiane capital, Lao PDR)
高橋 一弘 (kazuhiro Takahashi)	高知大学農学部学生 (Student, Faculty of Agriculture ,Kochi Univ.)
高御堂 厚 (Atsushi Takamido)	美山ふるさと株式会社 (Community development by eco-tourism)
辰己 佳寿子 (Kazuko Tatsumi)	福岡大学 (Fukuoka Univ.)
チャクマ・シシール・ショポン (Chakma Shishir Swapan)	国連食糧農業機関 (Food and Agriculture Organization of the United Nations)
辻 多聞 (Tamon Tsuji)	山口大学 (Yamaguchi Univ.)
名賀 亨 (Toru Naga)	華頂短期大学 (Kacho College)
西村 美和 (Miwa, Nishimura)	山口県萩農林事務所 (Yamaguchi Prefecture, Hagi Agriculture & Forestry Office)
ランプイ・ケーンソンバット (Lampheuy Kaensombath)	ラオス国立大学農学部研究部 (Research Division, Faculty of Agriculture, National University of Laos)
ルシャイ・タンズアラ (Lushai Thanzuala)	国連食糧農業機関 (Food and Agriculture Organization of the United Nations)
矢嶋 吉司 (Kichiji Yajima)	京都大学東南アジア研究所 (Center for Southeast Asian Studies, Kyoto Univ.)
弓削 雅裕 (Masahiro Yuge)	南丹市美山支所長 (Deputy Representative, Miyama Sub-Office, Nantan City-Corporation)
浅田 晴久 (Haruhisa Asada)	奈良女子大学 (Nara Women College)
内田 晴夫 (Haruo Uchida)	京都大学東南アジア研究所 (Center for Southeast Asian Studies, Kyoto Univ.)

第１部　海外からの事例紹介

ブータン・シェラブッシェ大学ソナム氏の発表

Migration and Rural-Depopulation in Eastern Bhutan and its effect on farming activities: A cae study of Radhi Gewog, Trashigang

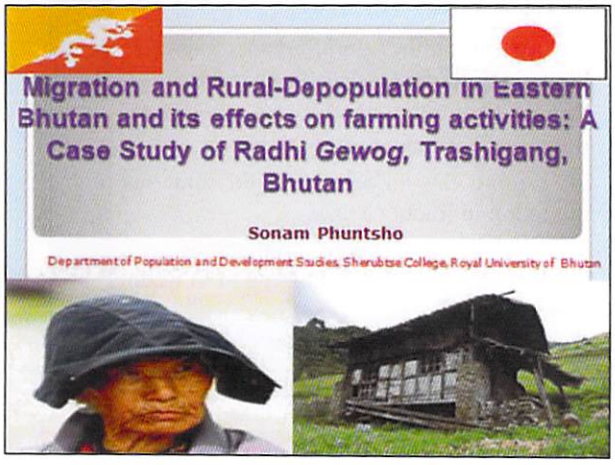
東部ブータンにおける人口移動と農村の過疎化及び農業活動への影響 ータシガン県ラディ郡におけるケース・スタディ

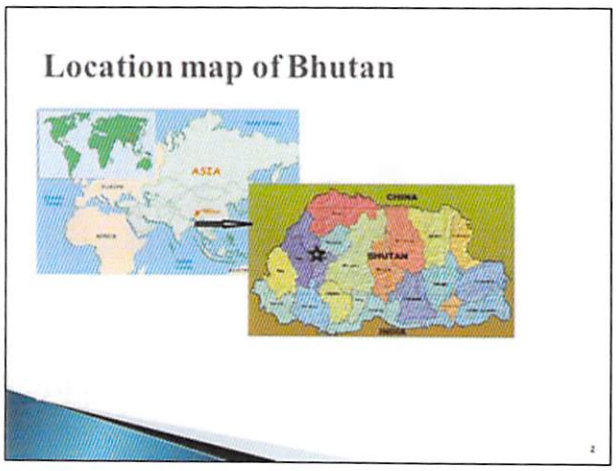
Sonam Phuntsho （Department of Population and Development Studies, Sherubtse College, Royal University of Bhutan）
ソナム・プンショ（ブータン王立シェラブッシェ大学、人口・開発研究学部）

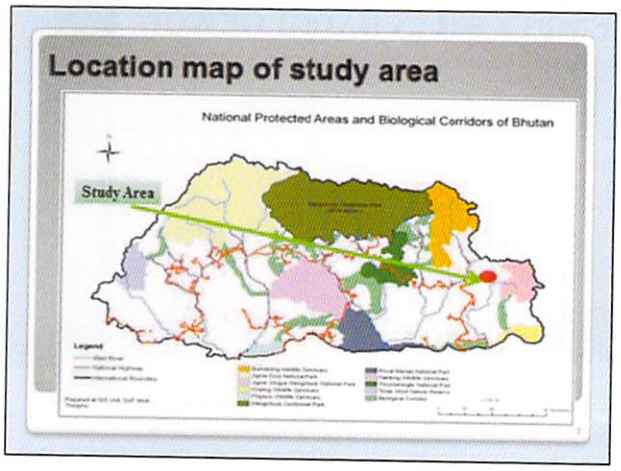
（日本語要約）

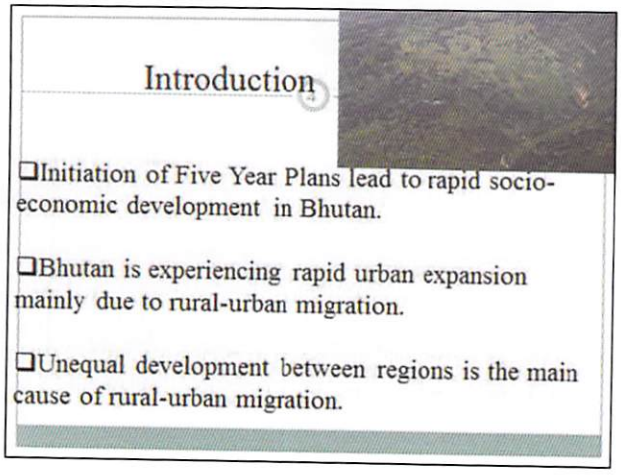
ブータンでは農村からの人口流入で都市が急速に拡大してきている。国内での農村から都市への人口移動は年率6%、首都のチンプーでは7%の人口流入がある。調査地のあるタシガン県では人口流出割合が国内で最も多く、2005年には16,700人の流出があったと報告されている。

本研究では、タシガン県ラディ郡における人口移動の実態を明らかにし、ラディ郡における人口の流出原因とその影響を明らかにした。その結果、ラディ郡では農村からの人口流出が大きな問題になっており、耕地の中には労働力不足のため耕作が放棄されているものも多く見られる。また、耕作されている農地で農業に従事する人々の高齢化が著しい。そのような状況を生み出した農村からの人口流出の最も大きな原因は、農村開発の程度に地域間格差が大きいことである。（要約：内田晴夫）







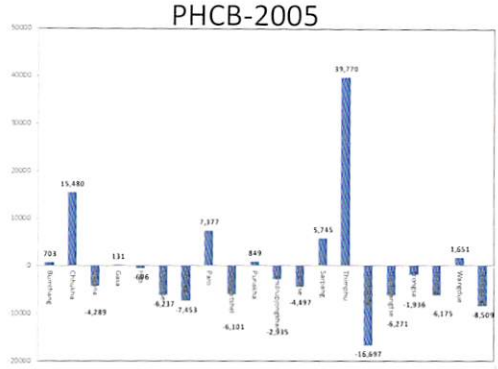


Introduction Contd...

1

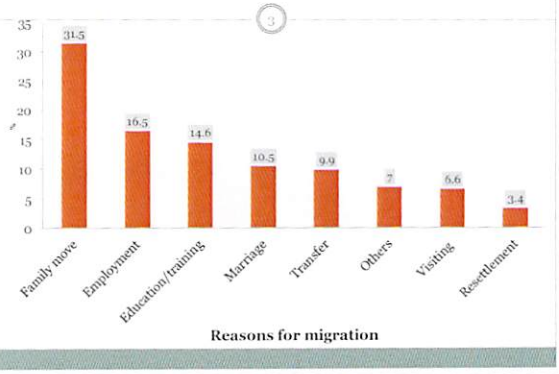
- UNHDR, 2009 reports that Bhutan has the highest internal migration rate of 6%.
- Thimphu (capital city) is growing at 7% per annum (MOA,2005).
- PHCB, 2005 reports that Trashigang District had highest out-migrants and it recorded the highest loss of 16700 persons.

District-wise Net migration in Bhutan, PHCB-2005



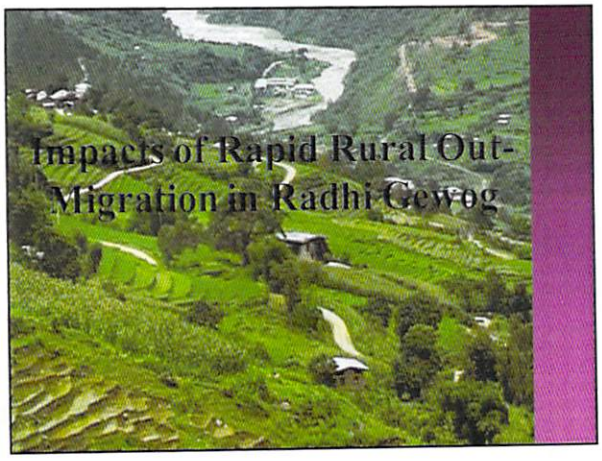
Reasons for migration in Bhutan(PHCB-2005)

3



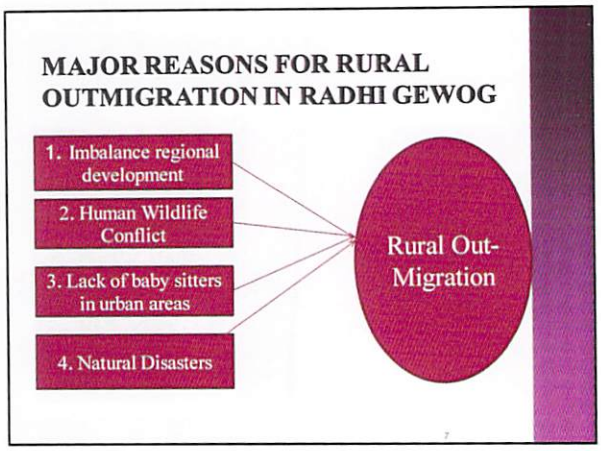
OBJECTIVES

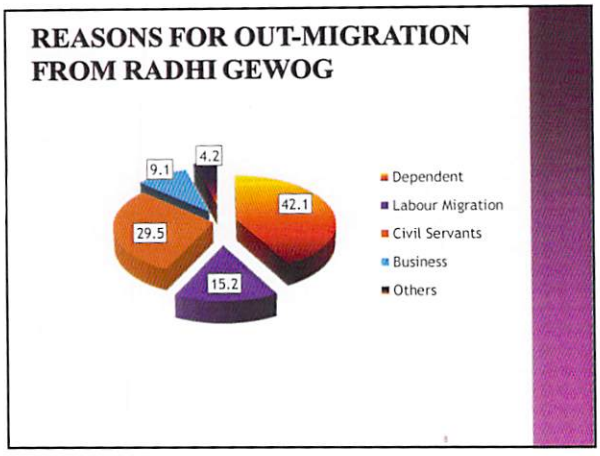
1. To examine the rural-urban migration scenario in Radhi *Gewog*, Trashigang.
2. To explore the reasons for rural out-migration in Radhi *Gewog*
3. To explore the impacts of rapid rural out migration in Radhi *Gewog*
4. To explore the future mitigations and impacts of rapid rural outmigration in Radhi *Gewog*.

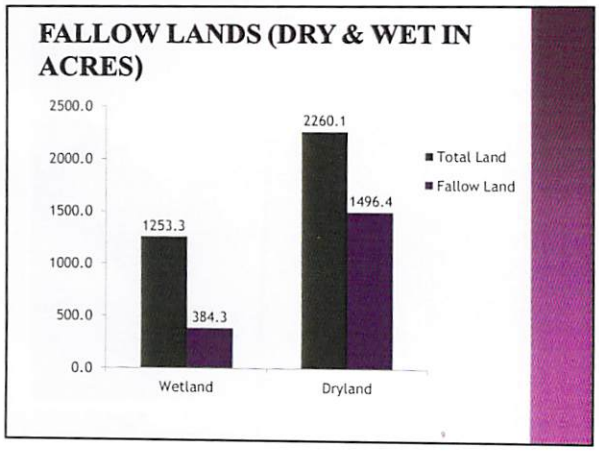


EMPTY HH IN RADHI GEWOG

Status of Households	No. of Households	%
No. of HHs empty	132	17.9
No. of HHs still occupied	605	82.1
Total HHs Registered	*737*	***100***

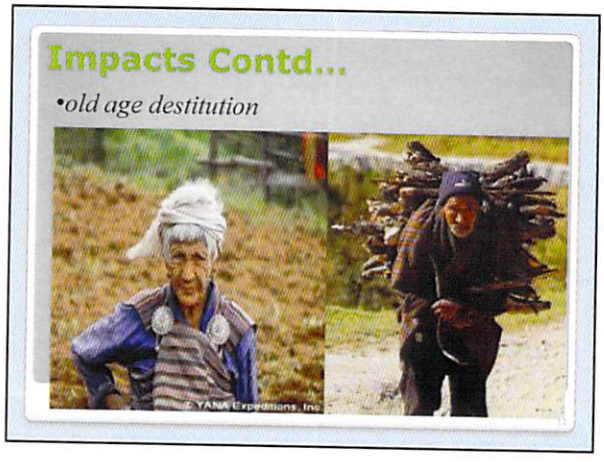

MAJOR REASONS FOR RURAL OUTMIGRATION IN RADHI GEWOG
1. Imbalance regional development
2. Human Wildlife Conflict
3. Lack of baby sitters in urban areas
4. Natural Disasters
Rural Out-Migration


REASONS FOR OUT-MIGRATION FROM RADHI GEWOG
9.1
4.2
42.1
29.5
15.2
Dependent
Labour Migration
Civil Servants
Business
Others


FALLOW LANDS (DRY & WET IN ACRES)
2500.0
2000.0
1500.0
1000.0
500.0
0.0
1253.3
384.3
2260.1
1496.4
Total Land
Fallow Land
Wetland
Dryland

Impacts
The most prominent effects of rural out-migration upon agriculture are labor shortages and fallow land

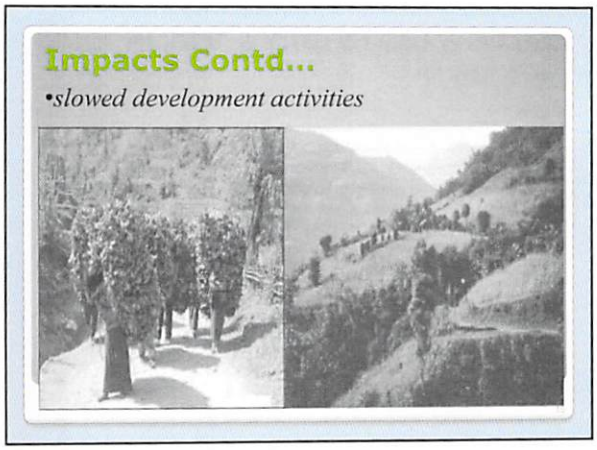
Impacts Contd...
•Vacated house


Impacts Contd...
•old age destitution

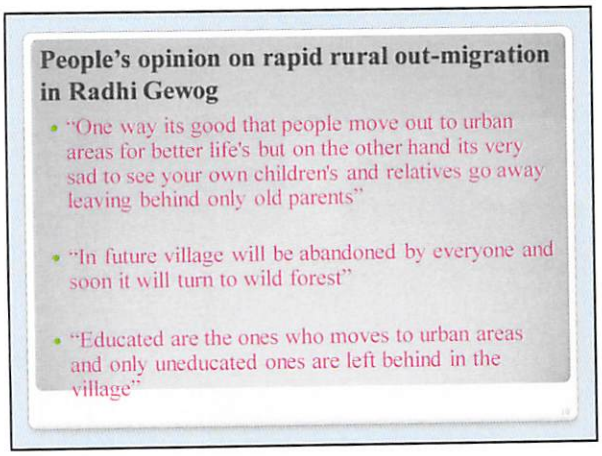
Impacts Contd...
•crop damage from wildlife

Impacts Contd...
•loss of cultural values and weakening family cohesion

Impacts Contd...
•A decrease in agricultural production from labor shortages


Impacts Contd...
•slowed development activities

Impacts Contd...
•expensive farm labor since farms are only kept by elderly people


People's opinion on rapid rural out-migration in Radhi Gewog
• "One way its good that people move out to urban areas for better life's but on the other hand its very sad to see your own children's and relatives go away leaving behind only old parents"
• "In future village will be abandoned by everyone and soon it will turn to wild forest"
• "Educated are the ones who moves to urban areas and only uneducated ones are left behind in the village"

Mitigation measures to reduce rural outmigration in Radhi Gewog

1. Development of Rangjung Town for neighboring 6 gewogs
2. Rural focused socio-economic development
3. Solving human wildlife conflict
4. Emphasis on SLM (Sustainable Land Management)
5. More scientific research on rural outmigration to shape better policies.
6. Promotion of rural enterprises
7. Improving rural amenities

19

Summary

- Rural out-migration is a major issues in Radhi Gewog
- Most of the cultivable lands are left fallow due to labor shortages
- Majority of the people who keep farming are elderly
- Main reason for rural out-migration in Radhi is due to imbalanced regional development

20

Thank you and Trashi-de-leck!!!

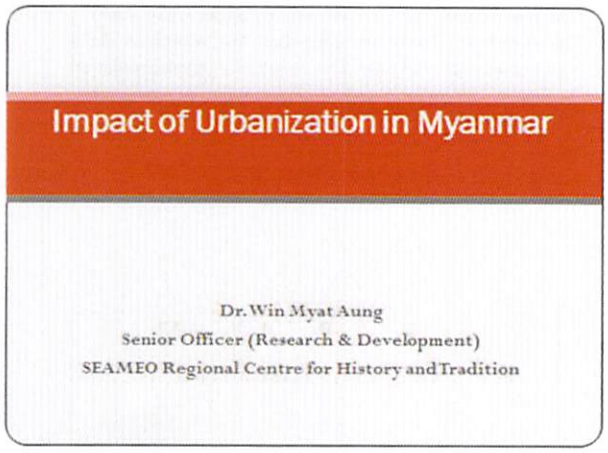
21

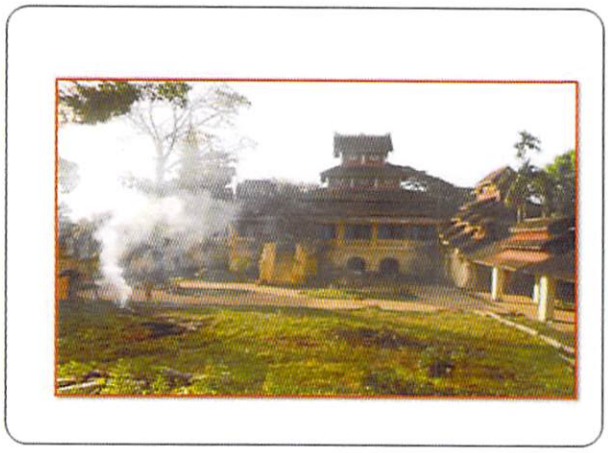
Depopulation Scenario of Indigenous Peoples in the Chittagong Hill Tracts, Bangladesh
ミャンマーにおける都市化の影響

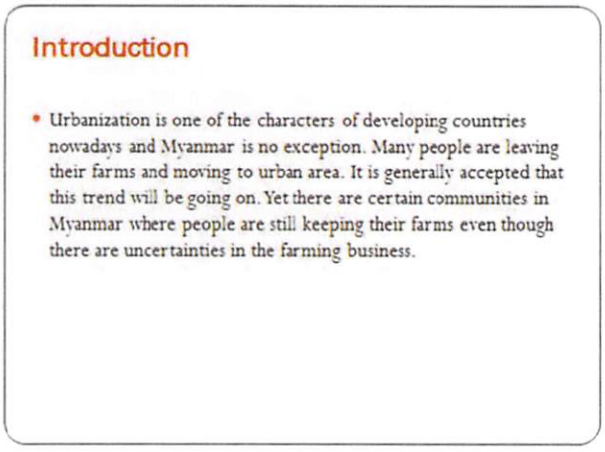
Win Myat Aung (Senior Officer Research and Development SEAMEO Regional Center for History and Traditional)
ウイン・ミャット・アウン（セアメオ歴史・伝統地域センター研究・開発部門上席研究員）

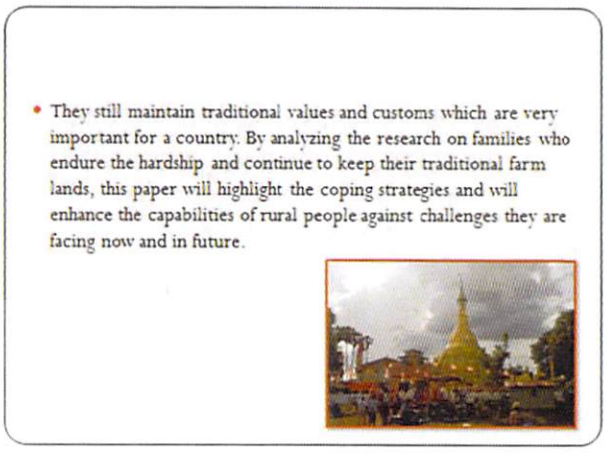
（日本語要約）

ミャンマーにおいても農村部から都市への人口流出が問題になっている。全国レベルでの人口増加が1.1%であるのに対し、都市部での人口増加が3.3%であることがその事実を明白に示している。都市部では様々な環境汚染や犯罪の増加が顕著に認められ、農村では伝統文化の衰退、耕作放棄地や空き家の増加に着面している。農村からの人口流出によって農業部門の衰退が見られるが、GDPの43%を占め、労働人口の70%が依然として農業に従事している。しかし現状のまま放置することは将来の農業部門のさらなる疲弊につながることは間違いない。収入の高い都市への人口集中と農村の過疎高齢化を阻止するには、農村における持続的農業を維持しながら、都市と都市周辺部の総合的な開発が必要である。そのためには政府及び関係省庁、地方行政機関、市民グループや互助共同体が連携していく必要がある。都市部や農村部における実践的な資源管理手法のトレーニングなどを通して、参加意識を呼び覚ます必要がある。（要約：内田晴夫）









Research Question

- Why do some farmer families endure the difficulties due to urbanization and decline of agricultural sector in Myanmar.

Background Information

- The rural-urban migration in Myanmar is on rise. People migrate to urban centres seeking jobs, better lives and facilities. The migration of the population gives rise to various problems likes increase in pollution, crime rates, loss of traditional and cultural practices, farmlands unattended and empty households.

- Due to rapid changes and economic development in Myanmar, people moved from rural to urban areas every year in search of work and education. Migration took place continuously up until now. This resulted in aged population in villages. The main reason of depopulation in rural areas is the income disparity between rural and urban.

- Lyonpo Zimba also pointed out that people are not only moving from one district to another, but also from villages to semi-urban areas. This trend of migration is usually associated with economic growth and literature. Hossain found in his study in Bangladesh that persons involved in the process of rural out-migration are adult and more educated. However, in case of Myanmar, people who migrate to the urban area are not only adult and educated but also children (age 9-14) and uneducated.

- The annual population growth rate in urban centre of Myanmar was estimated to be 3.3 % and total population rate is 1.1 % in 2014. (Ministry of Immigration and Manpower)

- Moreover, some Mega projects of government also cause the deteriorations of environment and cause danger to the livelihood of rural life. The government had set up strategies to make use of the natural resources for economical development of the country. Therefore, the mining, wood and hydro-power electricity industry are developed over the country which Myanmar has comparative advantage. Even though, the incomes from the exports of these resources are rise up the government revenues, it also make troubles for the people in the project areas.

Problem specification

- One of the most important factors that cause people to move urban is the decline of the agricultural sector in Myanmar. Agriculture is central to Myanmar' s poor economic performance which has benn in need of reforms. Even though represents 43 per cent of GDP employs 70 per cent of population, the performance of the agricultural sector has been deteriorating. The government is now trying to revitalize the industry but the results has not been come out yet.

- The decline in agricultural sector is related to the urban population growth too. According to the UNDP report, urban population growth is generally more rapid than total population growth, with about half of the urban growth accounted for by migrants from the rural areas. Developing country cities are growing far more rapidly than those in the developed countries. Many LDC urban areas have experienced dualistic development, where a modern formal sector exists alongside a large urban informal sector.

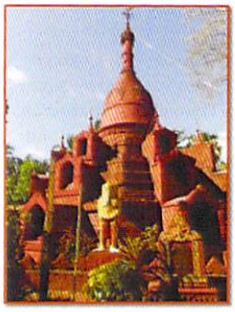
- Todaro migration model helps explain why it is rational for people to continue to move to crowded cities where unemployment is high and rising. The model is based on differences in expected income between the urban and rural sectors. High urban unemployment is inevitable giving the large expected income differentials between the rural and urban sectors which exist in many LDCs.

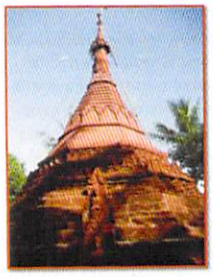
Finding

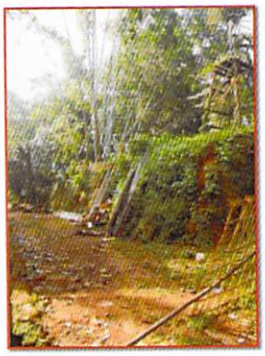
- Most of the families in rural Myanmar rely on the money sent back from their family members working in urban centre or abroad. In Mon State, most of the people go to Thailand and work there in low wages jobs such as construction workers, waiters, food stalkers, etc. Their daily wages vary according to the jobs but normally it is round about 300 Baths (equal to 10000 Kyats in Myanmar currency). In Myanmar, a daily paid labour in faming industry is round about 3000-4000 Kyats. So the difference is very high. For the farm owner, it is also not good for him in commercial aspect. Because, though the cost of labour and other inputs for the farming industry is high, the price is not high and it is not beneficial for him too.

- Another fact is the rise of the value of farming land due to the development projects. So farmers give up their farms for immediate benefits. They sell the farming land and move to urban area. It is also recently a popular trend in rural Myanmar area.

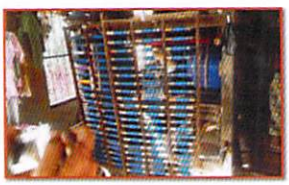
- Nevertheless, there are still families who still live in their farm lands. Even though they have to face the difficulties they are still working as farmers. In an interview with some farming families in Kyaik-Ka-Tha, Zin-Kyaike and Bhar-Oak villages in Mon State, they continue to work as farmer because they love their land. They only want to do farming because that is their ancestors' legacy. They don't want to give up these farms in their time.
- The estimated numbers of housholds in each villages are:Kyaik-Ka-Tha has 250-300 houses, Zin-Kyaik has 550-







- According to some families, they lost round about 500,000 Kyats (US$ 500)-to 15,00,000 (US$-1500). One particular family told me that, they lost 30,00,000 Kyats (US$ 3,000) last year but continue farming. One reason they can cope with the lost is that their children are working in Thailand who send the money to their parents. This is almost the common fact in the villages. Most of the families have only old age people. And younger people are either working in Thailand or in Mawlamyaing (State's Capital) or in Yangon. This trend can be seen almost everywhere in Myanmar now.
- Some families do traditional business like weaving local clothes and sell the products to other places.



- It is alarming as if this trend continues, Myanmar will face the shortage of labour in farming industry and it will cause Myanmar from a rice exporter to importer. Moreover, because of the moving of people to other places, the original traditions of their place are going to be lost gradually. The Government is trying to revitalize the farming industry nowadays, but formidable results have yet to come out.

Conclusion

- There is a need to access the extent to which urbanization is a cause of rural stagnation, as seen in much of Africa, and growing regional inequalities. In the light of such assessments, countries should develop integrated rural-urban strategies for sustainable agricultural development. This will require coordinated efforts at multiple levels, including at the levels of Government, relevant ministries, local authorities, communities, civil organizations, farmers and other concerned groups and individuals.

- We can also consider the suggestions from a report of UN. The report advices: strengthening capacity for land use planning in urban and peri-urban areas, designing and implementing regional development plans for integrated urban and rural development, strengthening extension and training services for urban, peri-urban and rural farmers in sustainable agricultural and resource management practices, strengthening the capacity of public administrations, farmers organizations and other organizations to respond to new agricultural opportunities and problems resulting from urbanization through coordinated and cooperative efforts.

Thank you

SOME ASPECTS OF ECO-FRIENDLY AGRICULTURAL PRACTICES IN THE APATANI VALLEY, ARUNACHAL PRADESH, INDIA

インド、アルナーチャル・プラデーシュ州、アパタニ盆地におけるエコフレンドリーな農法

A.K. Bhagabati (Department of Geography Gauhati University)
アバニ・クマール・バガバティ（ゴウハティ大学地理学科教授）

（日本語要約）

インドのアルナーチャル・プラデーシュ州の標高約 1700m にあるアパタニ盆地では、少数民族であるアパタニ族が過去数世紀にわたって水稲栽培を行ってきた。彼らの農法は水田の耕起から始まり、灌漑や施肥に至るまで、すべて人力で行われ、近代技術は用いられていない。盆地底だけでなく、盆地周囲の斜面に生えているマツやタケなどの植生も、土壌浸食の防止、薪炭材の供給地、野生動物の住処として、よく管理されてきた。彼らは森の一部を神聖なものとして保護し、人が入らないようにしてきた。その森の中で半野生の状態で飼われているミトゥン牛の数が豊かさの指標とされてきた。ミトゥン牛は彼らにとって自然、経済、精神的な意味合いを持っている。しかし、人口の増加とインフラの整備に伴い、野生動物が徐々に減少しつつある。アパタニ族の伝統的な自然観をいかに将来へと伝えるかは難しい課題である。（要約：浅田晴久）

（原文）

The Apatani Valley, at an altitude of about 5715 ft, covers an area of 26 km^2 around Ziro, the district headquarters of Lower Subansiri district of Arunachal Pradesh. The valley is occupied by a tribe of the same name (with a population of around 6000 as per 2001 census), which is the only tribal community practicing wet rice cultivation in the state for last several centuries, while others still practice shifting cultivation. They have curved out a unique landscape with a network of fields responding in an eco-friendly manner to the mountain environment. The agricultural practice followed by the Apatanis is traditional where right from land reparation, supplying water to crop harvesting, everything is done manually without applying any modern technology. All agricultural activities are generally performed by the women folk.

Designed in the form of terraces of different shape and sizes as per the topography of the area, the land is utilized to the maximum extent and a special system of irrigating the terraces is adopted. No chemical fertilizer is used, instead, they allow the paddy hey to decompose in the fields for fertilizing the land. Cattle dung, rice chaff, pig and chicken droppings, ashes are also used to fertilize the fields. Seedlings for rice cultivation are raised in the peripheries of the valley which are then transplanted in the prepared fields during the months of March-April. Along with paddy seedlings, vegetables are also raised in small fields to fulfill domestic requirements and also for selling in the periodic markets. The paddy fields are bounded by small earthen dams (*Agar*) with bamboo pipes fitted for inter-field water transfer. Harvested paddy is brought home and after separating from the hey the grains are stored in a granary constructed at some distance from the residence. The granaries are raised in small plots with water so that rats and other insects can not damage the grains. Often, several small granaries are constructed together forming a cluster. For measuring the quantity of paddy they use a Bamboo basket called *hora* with a maximum capacity of 15 Kg. Even the size of agricultural land is estimated by the amount of rice produced from the land weighed in terms of *Hora*.

The traditional management of water in the valley involves co-operation among the people and traditionally derived skills. The steps followed in this regard as described by Kani (2002) may be noted as:

1. The people first survey the irrigable streams and its perenniality of its source, and where dam to be constructed to tap the water.
2. Then they survey the alignment of the main channel with the help of a long rope and a peg is pitched into the soil at the end of stretched rope. This process is continued till the rope and peg reach to the dam side. The diggers dig the channel at the alignment marked by this rope and peg.
3. The depth and breadth of the channel is dug as per the volume of water to be tapped. If the volume of water to be tapped is up to the level of knee (medium tall), the breadth of the channel to be dug will be one meter and the depth will be the knee level from the water level of the channel. The height of the channel will also be raised up to the knee level.

4. The floor level of the channel is levelled with the headwater tapped from the dam. Before the use, the floor of the channel and its bound or embankment, both the inner and outer sides are carefully plastered with mud so that it can't percolate even a drop of water.
5. The deep George is bridged by long conduit of a hollowed log and the channel water is passed through this log
6. The main channel is always constructed above the rice field so that its water can be distributed to every plot of rice through the small rills and runnels or conduits of bamboo or wood. Each rills and runnel has a laden with drainage of a combed. The burden of the water of the main channel is diverted to the main river of the valley, Kiile to avoid the overflow of the rice-fields.

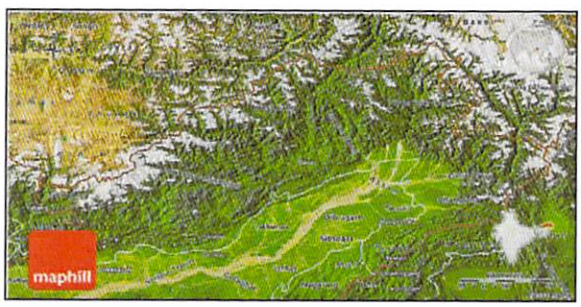
However, the sustainability of the agricultural practices in the valley not only depends on the management of the valley floor but also on the valley sides which are naturally covered by a variety of vegetations, prominently pine and some bamboo species. Interestingly, the Apatani community is traditionally committed to maintain green cover on the valley sides in order to-

(i) check soil erosion, (ii) procure necessary house building materials and fuel-woods and (iii) keep the habitat favourable for *mithoon* and other wild animals. They raise bamboo grooves (*Bige*), pines and *marooa* prominantly on the hill slopes. The grooves on the lower slopes close to the valley are systematically fenced (*narung*) by bamboos to protect them from the *mithoons*.

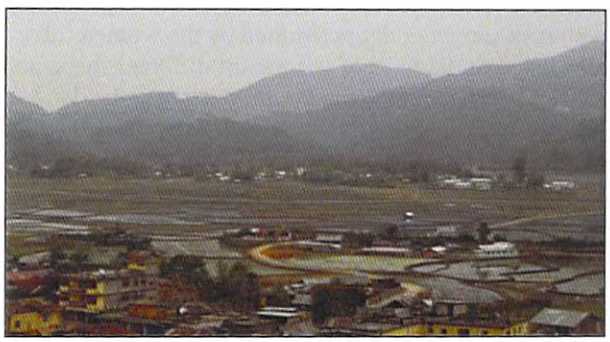
With the growth of population and associated infrastructural facilities including modern houses, the pressure on land and other natural resources in the valley has notably increased. The villages are now connected with surfaced roads. Market centers are also coming up. All these have resulted in shrinkage or gradual disappearance of wild habitats within the valley and its peripheries. As the community has traditionally intimate relation with nature and their belief systems are directly associated with nature, they have systematically protected certain small areas which may be called sacred grooves. These are secluded wild species where no human interference is allowed. There was a time (before 1947) when money value (currency) was unknown to the Apatanis. Their wealth was measured in terms of number of *mithoons* they possess. Thus *mithoon* as a semi-domesticated animal has great ecological, economic and spiritual significance. The core ecological values of the Apatanis will matter more than ever. Never leave fertile land fallow, fertilize soils only with wastes, harvest trees for firewood and construction of houses, plant a new one for each harvested tree- these are some of the Apatani traditional values. How these values will be passed on to carry forward for a future is a question really difficult to promptly answer.

References:

Kani, T. (2002): The Apatani : A Mastery of Nature, Paper presented in the IGNCA National Conference on Cultural Heritage and Traditional Knowledge Base of the Indigenous Communities of North East India held at Guwahati.



Location of Ziro valley in North-East India



The Apatani Valley landscape

Field pattern

Earthen cannel for irrigation

Folk house type

Conservation of hill slopes

Depopulation Scenario of Indigenous Peoples in the Chittagong Hill Tracts, Bangladesh
バングラデシュ、チッタゴン丘陵の在来民族の人口減少

*Chakma Shishir Swapan[1], Ando Kazuo[2] and Lushai Thanzuala[1] ([1]Food and Agriculture Organization of the United Nations (FAO), [2]Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University, and FAO[1])
チャクマ・シシール・ショポン（国連食糧農業機関）、安藤和雄（京都大学東南アジア研究所）
ルシャイ・タンズアラ（国連食糧農業機関）

（日本語要約）

バングラデシュの南東部にあるチッタゴン丘陵には焼畑を営む 11 の少数民族が暮らしている。少数民族の人口減少は 1947 年にパキスタンが独立した直後から始まった。イギリス植民地時代に制定された少数民族保護法は 1964 年に廃止され、政府の奨励で外部から非少数民族が移住してきた。政府により軍事施設が建設され、武力による弾圧のせいで 7 万人が隣国のインドへ避難した。カプタイ水力発電所の建設により約 10 万人が保障もないままに移住を余儀なくされた。残った少数民族は居住区に住まわされ、軍の監視下で生活することになった。政情が不安定で農業以外の収入源もないために、人口の 2 割は縫製工場など外へ働きに出ている。その結果、1947 年に 98.5%を占めた在来の少数民族は、1991 年には全人口の約半分（51%）にまで割合が低下した。住民がいなくなったことで、チッタゴン丘陵の高地では土地が放棄されている。あと数十年もすれば在来民族が少数派になることは確実である。（要約：浅田晴久）

（原文）

Abstract: This paper refers to declination of number indigenous peoples in the Chittagong Hill Tracts (CHT) of Bangladesh. Population decline is a term usually used to describe any great reduction in a human population. It shows the long-term demographic trends, that describes large reductions in population due to emigration, disease, and war. This article it clearly indicates the pros and cons of depopulation over time in Chittagong Hill Tracts population. There are 11 indigenous communities, collectively known as *Jhumma* live in the Chittagong Hill Tracts area. Depopulation of the indigenous peoples started after independence of sub-continent in 1947. Abolition of the special status of Chittagong Hill Tracts in 1964 opened up the area for the outsiders. Non-indigenous community from plain started settling there in numbers large enough to alarm the indigenous community. More than two decades of protected armed conflict in the form of insurgency and counter-insurgency operation occurred in the region and displaced more than 50% of indigenous communities population from their native land.

Keywords: Chittagong Hill Tracts, Depopulation, Indigenous Peoples, Kaptai Dam, Insurgency, Malaria, Family Planning

Introduction

The Chittagong Hill Tracts (CHT), the only extensive hill area in Bangladesh lies in southeastern part of the country (21°25′N to 23°45′N latitude and 91°54′E to 92°50′E longitude) bordering Myanmar on the southeast, the Indian state of Tripura on the north, Mizoram on the east and Chittagong district on the west. The area of the Chittagong Hill Tracts is about 13,295 km^2, which is approximately one-tenth of the total area of the country (Figure 1).

Figure 1 Map of Bangladesh and Chittagong Hill Tracts

Source: http://www.mochta.gov.bd/index.php/cht-issues/hill-tracts-region/95-work-location

The three largest indigenous communities are the Chakma, the Marma and the Tripura. The others communities are Pungkhua, Bawm, Khumi, Lushai, Tanchangya, Mro, Kheyang and Chak. Population distribution of the indigenous peoples of Chittagong Hill Tracts Population as per census of 1991 is given in the Table1 below.

Table 1 Distribution of population in the Chittagong Hill Tracts by Bengali and Indigenous Communities

Bengali and Indigenous Communities	1981 Census		1991 Census	
	Total population	%	Total population	%
Bengalis	309918	41.23	473301	48.57
Chakma	212577	28.28	239417	24.57
Marma	122755	16.55	142334	14.61
Tripura	54375	7.23	61129	6.27
Mrung	17811	2.37	22167	2.27
Tanchangya	17695	2.35	19211	1.97
Bawm	5733	0.76	6978	0.72
Pankho	2278	0.3	3227	0.33
Chak	909	0.12	2000	0.21
Khang	1422	0.19	1950	0.20
Khumi	11188	0.16	1241	0.13
Lushai	1041	0.14	662	0.07
Total	751692	100	974445	100

Source: Bangladesh Bureau of Statistics (BBS), 1991

Research Site and Methods

A substantial number of immigrants are observed living in the EPZ (Export Processing Zone) area and Chittagong Hill Tracts based urban areas of Bangladesh. To perform this research, a number of instruments and techniques have been applied: informal interviews taken in the month of September 2014. Information has gathered from here are mostly qualitative and secondary sources are from websites. A small number of respondents (eight) were purposively selected with the implementation of Snowballing to represent immigrants from various categories. The respondents are very small in number because the key notion for this research is to investigate each case from a very close-by situation to bring out unique characteristics rather than quantifying facts. Among eight research respondents, three are female and five are male. In addition to these eight respondents, four respondents from EPZ and Garments workers and other respondent from Rangamati town has been selected purposively as supplementary respondents.

Results and Discussion

Population Scenario in Chittagong Hill Tracts

Among 64 districts of Bangladesh, Chittagong Hill Tracts is the leading and fast population growing district in the country by outsiders. The total population of the Chittagong Hill Tracts in 1991 census was 974445 of which 51.43% were indigenous peoples and 48.57% were non-indigenous. At the time of the independence of India in 1947, only 9% of the population of the Chittagong Hill Tracts was non-indigenous (Figure 2). By now the ratio has been further aggravated with 51% indigenous peoples and 49% non-indigenous.

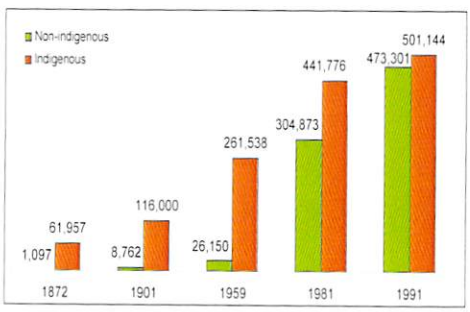


Figure 2 Population (1872-1991) of the Chittagong Hill Tracts
Source: Bangladesh Bureau of Statistics (BBS), 1991

Depopulation Scenario of Indigenous Peoples in the Chittagong Hill Tracts

Mainly, the population pattern in the hills underwent many changes since the independence of Bangladesh in 1971. In mid-1979, following a decision to settle non-indigenous families from the plains poured into the hills. Moreover, the non-indigenous settlers have been using as human shield and unofficial frontline civil force as ethnic cleansing measures. In addition, these settlers from plain land have been participating in many ethnocides, land grabbing activities and ethnic violence under direct or indirect support of the security forces with impunity. Still, 27,702 families of the transmigrated non-indigenous settlers have been getting free government rations and other facilities since 1979 who have made contributed rapid non-indigenous population growth in the region (Table 2).

Table 2 Indigenous and non-indigenous population ratio

Year	Indigenous peoples	Non-indigenous peoples
1941	98.5%	1.5%
1951	91%	9%
1961	88%	12%
1974	77%	33%
1981	58.6%	41.4%
1991	50.32%	49.68%

Source: B.H. Suhrawardy, Outline of the Chittagong Hill Tracts Economy: An Analysis (in Bengali) in Arunendu Tripura *et al.*, (eds.), 'Vision', Rangamati, 15 June (1995, P.38).

Root Causes of the Depopulation in Chittagong Hill Tracts

Over the past century, however, the Chittagong Hill Tracts has experienced rapid population growth due to immigration from the plain lands of the country. The main causes are given in the Table 3 below.

Table 3 Main causes of depopulation of indigenous peoples

Period	**Main causes of depopulation of indigenous peoples**
Pakistan	Negative natural change and emigration, malaria
Bangladesh	Armed conflict, non-indigenous population settlement, low birth rate of indigenous peoples and malaria

Armed Conflict

Rather immediately following the independence of Bangladesh in early 1972 the Chittagong Hill Tracts underwent militarization. Three cantonments were established in Dighinala, Ruma and Alikadam. The Chittagong Hill Tracts has been very heavily militarised under the 24th Infantry Division of Bangladesh Army after martial law in the country. Later, four brigade installations (at 3 district headquarters and Guimara), one Naval Base at Kaptai, several schools for jungle welfare, more than 500 base (temporary) camps of different security forces were set up under Operation Dabanol in Chittagong Hill Tracts. As a consequence, Chittagong Hill Tracts remained one of the highly militarised regions in the world. During the conflicting period at least twelve massacres upon the indigenous peoples were committed by the security forces. As a result, thousand of indigenous people were evicted from their own land. Of them about 70 thousands indigenous peoples (showed in the table below) took shelter in India as refugee and hundred thousands in deep forest of remote areas within the country.

Environmental Degradation and Emigration

In 1960, in the name of industrial development and hydro power generation the Pakistan government built the Kaptai hydroelectric project on the Karnafuli River in the heartland of the indigenous people which flooded 1,036 sq. km. of lands and submerged 54% (54,000 acre) of the best arable land. It has submerged 125 Mauzas, 18,000 families lost their homes and prime land; approximately one lakh of people displaced and migrated without any compensation and rehabilitation. Many of the displaced people had left the country, some estimates say, 40,000 of them went to the sparsely populated states of Mizoram, Tripura, Assam and Arunachal of India. Another 20,000 might have gone to the Burma (Myanmar).

The area affected by the Karnafuli project was the nucleus of Chittagong Hill Tracts. In a publication of the Far Eastern Economic the Kaptai Dam damaged the agro-based main economy of the Chittagong Hill Tracts and brought about a permanent disintegration of the indigenous people on one hand and led to the in road on non-indigenous population in the region in large number on the other. Besides, it created jobs

and business opportunities for non-indigenous peoples. In addition, those development projects uprooted indigenous people were neither compensated properly for their lands and homesteads nor provided land for their rehabilitation. Also, timber productivity from Chittagong Hill Tracts has huge demand in others parts of the country; as a result, illegal deforestation still sustaining

During Bangladesh regime, the Government established Chittagong Hill Tracts Development Board (CHTDB) in 1976 as a tool of the counter-insurgency platforms. Several roads were constructed for military movement. On the other hand, road development project benefited the non-indigenous settlers in two ways. Firstly, as they monopolized marketing sector, if benefited automatically accrued to them. Secondly, the improved road communication made it easier for settlers to migrate into the Chittagong Hill Tracts. The development initiatives undertook by the CHTDB produced counter-effect to the real economic well-being of the indigenous people. In 1982 the GOC of 24th Infantry Division of Bangladesh Army who was empowered to initiate operation in Chittagong Hill Tracts was made Chairman of the CHTDB.

In order to detach the indigenous people from the movement for self-determination as well as to smash normal life and livelihood of the indigenous peoples, the successive governments established cluster villages, namely, Adarshsgram, Shantigram, Baragram and Joutha Khamar for the indigenous people through the Chittagong Hill Tract Development Board (CHTDB). It is estimated that there were 205 cluster villages under this programme. The indigenous peoples were forcibly settled down in the cluster villages. The security forces kept vigilance over the indigenous people setting up camp and sentry post around cluster villages. They were compelled to maintain daily register where, when and why they went out and come back. Even they had to compel to deposit their big knives, axes, spades etc daily to the camps. The security forces used them as workers without wages and committed sexual harassment upon the women.

Non-indigenous Population Settlement in Chittagong Hill Tracts

What is more naked is that Pakistan government hit upon a surreptitious policy of depopulating the indigenous population in Chittagong Hill Tracts by encouraging the settlement of non-indigenous peoples in Chittagong Hill Tracts from other districts of East Pakistan. Consequently, Bengali settlers in thousands influx into Chittagong Hill Tracts and begun to grab the lands of the indigenous people in the middle and the last of sixties with direct support of the state. The reaction of the people of Chittagong Hill Tracts against the nefarious policy of Pakistan was alarming. As a result of repressive measures followed by Pakistan government, discontent and resentment was simmering throughout Chittagong Hill Tracts.

In August 1947, the British handed over the administration of Chittagong Hill Tracts to the government of Pakistan. In 1900 the British government enacted the Chittagong Hill Tracts Regulation 1 of 1900 and declared it as an Excluded Area. The Chittagong Hill Tracts Regulation 1 of 1900 for more than a century acted as bulwark against the encroachment of the non-indigenous peoples on the land of the indigenous people. In fact several provisions of the Regulation, 1900 functioned as a safeguard for the indigenous people and it prohibited land ownership and migrations of non-indigenous peoples into the Chittagong Hill Tracts. In the Section 34 of Chittagong Hill Tracts Regulation of 1900, a safeguard for the indigenous people which prohibited land ownership and migrations of non-indigenous peoples into the Chittagong Hill Tracts, it was clearly stated that:

> *"No person other than a Chakma, Mogh or a member of any tribe indigenous of Chittagong Hill Tracts, the Lushai Hills, the Arakan Hill Tracts or the State of Tripura shall enter or reside within CHT unless he is in possession of a permit granted by the Deputy Commissioner at his discretion."*

From the very outset, the Pakistani government looked upon the indigenous with an eye of suspicion for being anti-Pakistani. The government policy was clearly revealed by the repeal of the Chittagong Hill Tracts Frontier Police Regulation, 1881 disbanding the Indigenous Police Force in 1948. Side by side, the government actively encouraged the non-indigenous people's infiltration into the Chittagong Hill Tracts. To facilitate this, the government of Pakistan amended the Chittagong Hill Tracts Regulation of 1900 several times against the will of the indigenous people in order to find a legal excuse for transmigration of the non-indigenous people from the plains into the Chittagong Hill Tracts. To illustrate, the government had enacted the Chittagong Hill Tracts (Land Acquisition) Regulation, 1958 in order to grab Indigenous peoples' ancestral land. Moreover, the government snatched away the rights and privileges of the indigenous people by cancelling the Excluded Area Status of the Chittagong Hill Tracts in 1963. Further, the government had amended Section 34 of the Chittagong Hill Tracts

Regulation of 1900 in 1961 and later in 1971 in order to throw open the Chittagong Hill Tracts region for the non-indigenous settlers. It is relevant that Section 34 of the Regulation was.

In Bangladesh period, since 1979, the government officially started to settle non-indigenous population from the plain districts into Chittagong Hill Tracts to outnumbering the indigenous people and for using them (non-indigenous settlers) as human shield. The government of Bangladesh declared that each settler family would be given 7.5 acres of lands and ration for unlimited period. Indeed, no cultivable land was vacant for settlement, similarly the settlers was encouraged forcibly to occupy the land of indigenous people. This program was continued in secret, the international communities were not aware of this program till mid-1980s. At least four hundred thousands of non-indigenous peoples were transferred into Chittagong Hill Tracts. Initially, the non-indigenous families were kept back, set up in camps in a place near distant from the entrance passage to the army camps.

Just to avoid the conflict and atrocities some indigenous peoples silently moved toward the deep forest and compel to live a kind of nomadic existence. The internal displacement is originated from the aggressive policy of the country's rulers through giving settlement of the non-indigenous peoples on the land of the indigenous people of Chittagong Hill Tracts for making non-indigenous populated area and conducting atrocities, land dispossession, burning houses, torturing etc, uprooted the indigenous people from their land. Due to these many indigenous people had to leave their villages, mauzas, areas and go to the deep forest and live in a very intolerable condition. According to the Chittagong Hill Tracts Peace Accord of 1997, Section (D) Article (1), a Task Force has been formed for proper rehabilitation of the Refugees and Indigenous Internally Displace Persons of Chittagong Hill Tracts. The Task Force only made the assessment of the number of Inner Refugees. Now it transpires that a total number of 94,240 families' repatriated refugees and Inner Refugees are there in Chittagong Hill Tracts i.e. 471,200 peoples of indigenous communities are in the floating condition passing their uncertain lives.

Low Birth Rate and Malaria

In the 1980s, Bangladesh faced no greater problem than population growth. Census data compiled in 1901 indicated a total of 29 million in East Bengal, the region that became East Pakistan and eventually Bangladesh. By 1951, four years after partition from India, East Pakistan had 44 million people, a number that grew rapidly up to the first post independence census, taken in 1974, which

Year	CHT	Bangladesh	Growth Chittagong Hill Tracts %	Growth Bangladesh %
1981	7,51,692	8,71,20,000	5.7%	2.9%
1991	9,74,445	10,93,15,000	2.6%	2.0%

reported the national population at 71 million. The 1981 census reported a population of 87 million and a 2.3 percent annual growth rate. Thus, in just 80 years, the population had tripled. In July 1988 the population, by then the eighth largest in the world, stood at 109,963,551, and the average annual growth rate was 2.6 percent. According to official estimates, Bangladesh was expected to reach a population of more than 140 million by the year 2000. The crude birth rate per 1,000 populations was 34.6 in 1981. This rate remained unchanged in 1985, following a 20-year trend of decline since 1961, when it had stood at 47 per 1,000. The rural birth rate was higher than birth rates in urban areas; in 1985 there were 36.3 births per 1,000 in the countryside versus 28 per 1,000 in urban areas.

Until the 1980s, Bangladesh was the most rural nation in South Asia. In 1931 only 27 out of every 1,000 persons were urban dwellers in what is now Bangladesh. During the 1980s, industrial development began to have a small effect on urbanization. The 1974 census had put the urban population of Bangladesh at 8.8 percent of the total; by 1988 that proportion had reached 18 percent and was projected to rise to 30 percent by the year 2000.

Bangladesh's working-age population was increasing almost 1.5 million per year in the 1980s. This rate of population growth kept the people poor and the country dependent on foreign aid. Population control and family planning, therefore, were a top priority of the government and social workers. Population growth had declined from 3 percent to 2.3 percent between 1961 and 1981 (Table 4). Contraceptive practices increased from 12.7 percent of eligible couples in 1979 to 25 percent in mid-1985. In Chittagong Hill Tracts, the Government has launched Family Planning Programme as built in policy with counter-insurgency. In some cases, indigenous peoples were forced to take family planning. So the household size of indigenous peoples declined to 5.1 as per socio-economic survey of UNDP, 2009.

Table 4 Population growth rate comparison

Source: UNDP, 2009

The Chittagong Hill Tracts is one of the malaria-prone areas in the world. In terms of diseases in the

Chittagong Hill Tracts, malaria is the most common. Malaria is the number one deadly disease in the area. As per study of MRG (Malaria Research Group of Bangladesh Government) out of 4 types of Malaria 2 types are found in Bangladesh and of the total *Falciparum* Malarial cases in Bangladesh 80% are found in the Chittagong Hill Tracts and thus the Chittagong Hill Tracts have distinction in the global map on Malaria.

In the Socio-Economic Baseline Survey the reported average number of cases of malaria in a Chittagong Hill Tracts household during a twelve month period was calculated at 2.7. Malaria tests can be undertaken at Government clinics, Chittagong Hill Tracts Development Facility (CHTDF) Satellite Clinics, Non-government organization NGO supported clinics (including BRAC), and a number of private clinics. But in areas where access to the health facility is more than 3 hours walking distance, communities often self-diagnose and self-treat for symptoms of malaria.

The prevalence of malaria has declined to a significant extent in recent years in the Chittagong Hill Tract due to the initiatives taken by the government as well as the development organizations to check the disease. Since 2006, the hill district councils of Khagrachari, Rangamati and Bandarban, with support from the Chittagong Hill Tracts Development Facility-the United Nations Development Programme (CHTDF-UNDP), have set up community satellite clinics to provide health care among people in the hilly districts. Statistic of the CHTDF-UNDP health programme shows that till April this year, only 157 malaria patients took treatment from community clinics in Bandarban district, 54 in Rowangchari upazila, 5 in Rumma, 40 in Thanchi upazila, 16 in Lama upazila and 42 in Alikadam upazila. A total of 4,555 malaria patients received treatment from the satellite clinics in Bandarban in 2007, but the figure declined to 1,964 in 2013.

Depopulation in the Rural Chittagong Hill Tracts

The Bangladesh economy has grown an average of six percent a year over the last two decades and has a population increasing by an average of 1.6% a year. The export-oriented Bangladeshi garment manufacturing industry, the US$20 billion industry and the largest export earning sector of the country, accounted for almost 12% of Bangladeshi GDP in 2009 and 2010 and employs approximately four million people. The Bangladeshi textile and garment manufacturing sector is fuelled by young, urbanizing, workers many of whom are women and indigenous peoples. It is estimated that about 0.2 million people, one fifth of indigenous population of Chittagong Hill Tracts, have been living in the EPZ and garments oriented factories throughout the country particularly in Chittagong and Dhaka. Majority of them are from rural areas of Chittagong Hill Tracts and agricultural based farmers. When the indigenous garments workers are asked about the reason of the migration in to the industrialized areas, they have always answered the unrest political situation and economic problems particularly loss of the ancestral lands and no opportunity of the non-farming income-generation in the rural areas. The settled farming, forestry and fishery cannot give them the enough equivalent income compared to the urban non-farm opportunities. As a result many upland areas of Chittagong Hill Tracts are now abandoned due to shortage of laborer.

Conclusion

History shows that the Chittagong Hill Tracts region once a predominant indigenous peoples area is fast becoming a non-indigenous area. The influx of outsider non-indigenous settlers into the Chittagong Hill Tracts region had been started since the creation of Pakistan. Later on Bangladesh government's vigorous policies had made the situation worse than ever before. The entire region was thrown open for the waves of non-indigenous people's migration after independence of Bangladesh. An increased numbers of non-indigenous settlers have been coming into the Chittagong Hill Tracts since then. Meanwhile, the indigenous depopulation policy of the government has swiftly changed the demographic balance. The non-indigenous population, which was only 1.5% of the total population of the Chittagong Hill Tracts in 1947, has swung to a high 49% by 1991; whereas the indigenous population during the same period constituted 98.5% of the total population has now dwindled to a low 51%. It is crystal clear that the indigenous people are going to be a minority in their own homeland in next couple of decades.

References

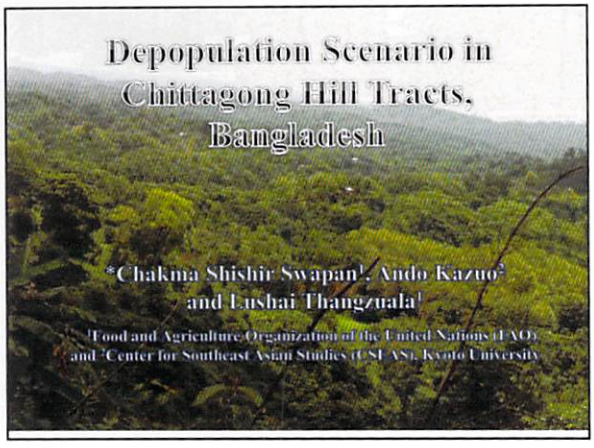
BBS (Bangladesh Bureau of Statistics), 2001. *Preliminary Report: Population Census 2001.* Statistics Division, Ministry of Planning, Government of the Peoples Republic of Bangladesh. Dhaka.

Suhrawardy, B. H., 1995. Outline of the Chittagong Hill Tracts Economy (in Bengali), In Tripura, A. *et al.*, (eds.) *Vision, Rangamati, 15 June*, pp. 34-37.

UNDP (United Nations Development Programme), 2009. Socio-economic Baseline Survey of Chittagong Hill Tracts, Bangladesh.

Wikipedia (http://en.wikipedia.org/wiki/Population_decline)

http://www.banglapedia.org/HT/C_0237.htm



Outline of the Presentation

- Introduction
- Research Objectives
- Study Location and Methodology
- Results and Discussion
- Conclusions

Introduction (i)

- Chittagong Hill Tracts occupied 10% of the total area of Bangladesh.
- In CHT, the indigenous peoples have had a majority position in a historical perspective, but this has changed dramatically over the past years. The relative proportion of indigenous to non-indigenous population in CHT. Until the 1980s, the non-indigenous population was very low.
- By 1991, the last sample of reliable demographic data, indigenous peoples held their majority position by only a very small margin. Twenty- years on, it is likely that non-indigenous people have assumed the majority position in CHT.
- There are twelve indigenous communities in this hilly region among which *Jhumma*, (swidden cultivators) means the people who cultivate *Jhum*.

Figure 1. Map of Bangladesh and CHT

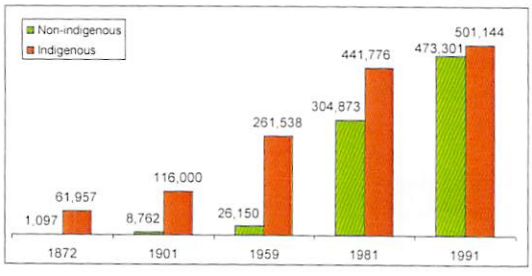


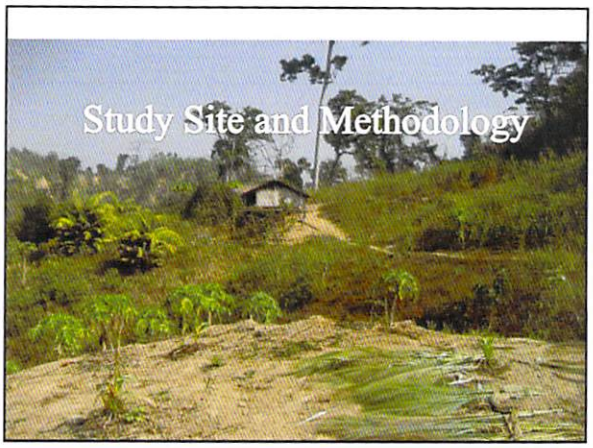
Figure 2. Population (1872-1991) of the CHT

Introduction (ii)

- This presentation refers to population decline in indigenous communities of the Chittagong Hill Tracts (CHT) of Bangladesh.
- Population decline is a term usually used to describe any great reduction in a human population. It shows the long-term demographic trends, that describes large reductions in population due to emigration, disease and war.
- In 1997 Peace Accord has been signed in between Bangladesh Government and Parbatya Chattagram Jana Sanghati Samiti (United People's Party of the Chittagong Hill Tracts). However, disappointly after 17 years Bangladesh Government failed to implement main clauses of Peace Accord. For example Land rights of Indigenous people, Demilitarization of CHT etc.

Research Objectives

- To highlight on some of the cause and effect factors of depopulation in CHT.
- To find out the main causes of migration from rural area of CHT to urban areas.



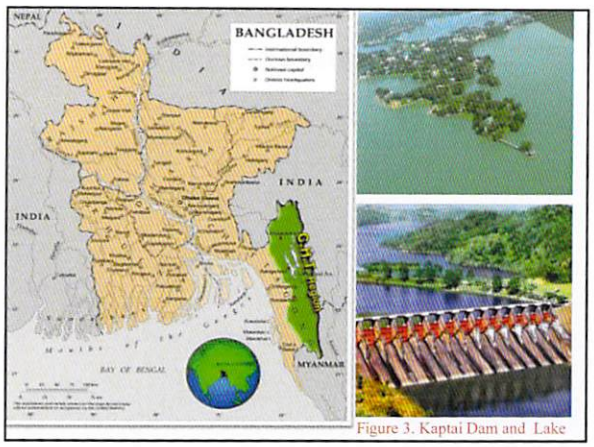


Figure 3. Kaptai Dam and Lake

Survey periods

- The field surveys was carried out on September, 2014

Methodology

- Informal interview
- Field observations

Results and Discussion

Root Causes of the Depopulation in Chittagong Hill Tracts

Armed Conflict

- The CHT has been heavily militarized under the Infantry Division of Bangladesh Army.
- Later four bridge installations (at 3 districts headquarter and Guimara), one Naval Base at Kaptai under Rangamati District.
- During the conflicting period at least twelve massacres upon the indigenous peoples were committed by the security forces and Bengali settler from plain land.
- During communal violence between Indigenous people and Bengali settlers. The Bangladesh Army and Govt. Administration always support/backed the Bengali settlers.

Negative Natural Changes and Emigration

- The Kaptai hydroelectric dam built in 1962 displaced about 100,000 people and submerged 22,000 ha of agricultural land.
- The Bangladesh Government established CHT Development Board in 1976 as a tool of the counter-insurgency platform.
- Several roads were constructed for military movement.
- On the other hand, road development project benefited the non-indigenous settlers in two ways. Firstly is the monopolized marketing, the benefits automatically accrue to them.
- Secondly, the improved road communication made it easier for the non-indigenous settlers to migrate into the CHT.

Non-indigenous Population Settlement in CHT

➢Since, 1979 the Bangladesh Government officially started to settle non-indigenous (Bengali) into CHT in order to achieve their political agenda.

➢The Government of Bangladesh declared that each settler family were given 7.5 acres of lands and other opportunities by accruing indigenous people cultivated land.

➢Indeed, no cultivable land was vacant for settlement so the settlers forcibly occupy the land of indigenous people backed by security forces and administrative agencies.

Causes of Low Birth Rate

➢ Government policy by family planning in order to reduce Indigenous population in the region.

➢ Due to conflict in the region.

➢Infants are born with low weight either because they are premature (<37 weeks gestation at birth) and/or because they suffered intrauterine growth retardation (IUGR).

Malaria

➢Other important causes of LBW due to malaria in endemic maternal infections that cause a loss of appetite, higher nutrient losses or requirements, abnormal placental blood flow or structure and fetal infections.

➢The CHT is one of the malaria-prone areas in the world. In terms of diseases in the CHT, malaria, is the most common.

➢As per study of Malaria Research group of Bangladesh Government out of 4 types of Malaria 2 types are found in Bangladesh.

➢The total Falciparum Malaria cases in Bangladesh 80% are found in the CHT and thus CHT have distinction in the global map on Malaria.

Other Major Causes of Depopulation in the Rural Chittagong Hill Tracts

➢The garments and other private sectors in urban area of Bangladesh, employs mostly young people. Since there is very limited scope of job opportunities in Chittagong Hill Tracts. The young generation from indigenous community they go to urban area for job opportunity.

➢It is estimated that about 0.2 million people, one fifth of indigenous population of CHT, have been living in the EPZ and garments oriented factories throughout the country particularly in Chittagong and Dhaka.

➢Majority of them are from rural areas of CHT and were agricultural based farmers.

Contd.

➢ They have always answered the unrest political situation and economic problems particularly loss of the ancestral lands and no opportunity of the non-farming income-generation in the rural areas.

➢The settled farming, forestry and fishery can not give them the enough equivalent income compared to the urban non-farm opportunities.

➢As a result many upland areas of CHT are now abandoned due to shortage of laborer.

Summary

- History shows that the CHT region once a predominant indigenous peoples region is fast becoming a non-indigenous region.
- The influx of outsider non-indigenous settlers into the CHT region had been started since the creation of Pakistan.
- Later ,Bangladesh Governments vigorous policies had made the situation worsen than ever before.
- Meanwhile, the indigenous depopulation policy of the government has swiftly changed the demographic balance.
- It is crystal clear that the indigenous peoples are going to be a minority in their own homeland in next few years.

Story of village settlement and development with concerning on livelihood activities in Thachampa village, Lao PDR
タチャンパ村の定住と発展に関する活動報告

Lampheuy KAENSOMBATH（Director, Research Division, Faculty of Agriculture, National University of Laos）
Somboun PHOMSOUVANE（Village Chief, Thachampa village, Xaythany district, Vientiane capital, Lao PDR）
ランプイ・ケーンソンバット（ラオス国立大学農学部研究部）
ソンブン・ポンスワン（ラオス　ビエンチャン特別市サイタニー郡タチャンパ村村長）

（日本語要約）

ラオスでは農村開発が最優先課題である。農村開発が成功するためには、政府機関、非政府機関、非営利機関、民間セクターや地域社会及び住民など関係者の協働連携が不可欠である。タチャンパ村は、村人の参加、リーダーシップ、関係機関及び関係者の協働、地域の資源の活用などが成功している事例である。

タチャンパ村は、現在、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室とラオス国立大学農学部と協働し村落開発を進めている。村はビエンチャン市から約 42km に位置し、97 世帯 561 名が住んでいる。水稲、スイカ、キュウリ、キャッサバ、トウモロコシ、大豆などの農作物栽培と牛、水牛、ブタなどの家畜飼育、機織りが主な生業となっており、2014 年の農業による総収入は約 4 億 9 千万キップ（約 700 万円）である。1988 年 10 家族が入植し開村されたタチャンパ村では、これまでに 157ha の水田の開墾、灌漑水路の建設、農村電化、小学校建設、文化資料館兼公民館建設などが、受益者負担による住民参加で整備された。村長たち村役で構成される村委員会が、計画を作り村の集会で提案承認されたのち、責任者や担当者の選出や受益者負担額を決定しこれらの事業を実施してきた。

以上に加え、農学部は、2000 年郡農林業事務所の依頼を受け、タチャンパ村など近隣 11 村で生活改善普及を始めており、現在でもタチャンパ村では小規模金融、生活改善、改良家畜飼育などが継続されている。農学部は普及事業を、①関係者の意向調査、②ベースライン調査、③優先順位の決定、④実施・監督・評価、の 4 段階の原則に従って実施している。

（原文）

Background

The Center for South East Asian Studies (CSEAS), Department of Practice- Oriented Area Studies, Kyoto University have been working with the Faculty of Agriculture, National University of Laos and Thachampa village, Xaythany district, Vientiane Capital sine nearly a decade. Thachampa is a small rural village where people are realize on farm activities for their livelihood. The total population is 561 people (270 female) with 97 households. The Thai Dam and Lao Loum are two main ethnics groups, then Kumue, Mong, Thai Daeng, respectively.

Total land area of village is 157 ha, including 87 ha of rice field, pond, and fallow. In the village there are irrigation system with a pump, primary school with 3 classrooms, a village or cultural hall, a temple. There are two main livelihood activities: agriculture and non-agriculture, which includes weaving and labor paid. In addition, this village also has two village saving banks (development and women group) and a group of silk weaving.

Currently, villager's main sources of income are from rice, watermelon, cucumber, bean, galangal, cassava, maize and domestic animal production (estimated of total annual income from crop products in 2014 is approximately 490 million Kip, from livestock is millions Kip).

Village site

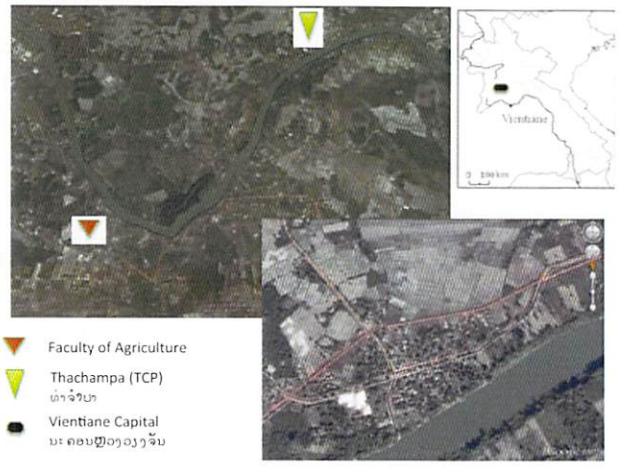


Figure 1. Village location

Thachampa village is located in the Hauychiem community, Xaythany district, Vientiane Capital, Lao PDR, about 42 Km from city. The distance between the Faculty of Agriculture and village is 8

Km. The village has border with Venten village in the west, Namgnum river in the south, and Natan village in the east and in the north.

Story of settlement in brief

Before the year 1988 few families were seeking

1988	It was less than 10 families migrated from Vientiane and Xiengkhuang province to Thachampa, then number of families was increased. The first village chief was requested with an assigned from the Government level without election process. The village organization was requested to own a 142 ha from Natan and 19 ha from Venten village due to the lack of land area for farming.
1989-1990	A total of 157 ha of land was cleared by village labor and tractor. In 1990, the land was divided to individual farmer
1995-96	There was a severe flooding in Thachampa village with affecting the 21 families moved back to their origin village in Vientiane province.
1997	All pieces of land were registered for a land right title.
1998-2001	Village irrigation was built which supported by Gov. Electricity network was settle in TCP (shared budget from Gov. of 70% and of 30% from villagers).
2005	A single classroom was also built for small children in the village
2006-2011	There were several activities happening: encourage production (cropping, animal raising, weaving) for increasing the HH income, irrigation pump fixation, village hall or cultural hall construction, school with three classrooms
2012-2014	Continue of cultural hall building (toilet, underground water), fixing such as change new roof with was damaged from the storm (Fig 2)

for the best area for the cultivation and settlement, these families found the best area in Thachampa village where had a lot of natural resources for their living.

The cultural hall or village hall was constructed in 2009 with the supporting from the TOYOTA foundation through CSEAS and Faculty of agriculture. The building was two floor without the toilet and water system. All expenditure for materials was covered by the foundation, and villagers were the main labors for the construction. The construction was taken for 30 days. The aims of having the hall is to use for the village meeting, office, collected traditional tools related to the livelihood activities, exhibition, and library for the primary school students in the village, and other village activities. In 2012, the toilet and underground water system were constructed with the supported by village fund. Unfortunately, in early of rainy season in year 2014, storm hit on the cultural hall, which was damaged the roof of the hall.

Livelihood activities in Thachampa village

Villagers in Thachampa are depending on the agricultural activities for their daily life. The main activities are crop-farming systems (rain fed rice, irrigated rice, horticulture [melon, cucumber, bean, galangal, vegetables, etc.] and cash crop (cassava and maize), and livestock production: buffalo, yellow cattle, goat, pig and poultry. Large and small ruminant animal production is based on free grazing system, while pig is penned system. Almost, poultry production is semi-scavenging system. The agricultural products are sold for household cash income and consume. These agricultural activities were developing and can improve the family economic time to time after the irrigation cannel is built.

Table 1. Comparative of livelihood activities before and after irrigation construction

Livelihood activities	Before	After
Rain fed rice	Only	Y
Irrigated rice	None	Y
Horticulture	For hh consumption	Y and for sale
Cash crop	Only small garden for hh	Y and for sale
Fishing	Y	Y
Non-timber product collection (bamboo shoot, mushroom)	Y	Y but with limited area and reducing in amount

Non-agriculture		
Weaving	Y for hh use	Y for both hh use and sale
Labor (weeding, rice transplanting, house making, workers)	No	Y in some occasional only
Hunting	Y	Rare
Livestock raising	Y	Y and increasing of number

Source: Land use mapping in the past and present year of Thachampa village (FoA and CSEAS team, on 26 July 2014)

Development and its steps in Thachampa village, Lao PDR

Village was officially established by 1988. People live in the village are mainly from Vientiane and Xiengkhuang provinces. There 2 major groups: Thai dam and Lao loum, then following by Thai Moi, Thai Deang, Khumu and Hmong ethnic groups. The first village chief was assigned from the provincial level without election (Mr. Bounyang [chief], Mr. Phommy and Mr. Houmphanh [vice chief]), then the first village chief election was held in year 1991 and Mr. Houmphanh was the first village from the election system. Each period of village organization had their strategy and plan for development.

At the period of Mr. of village organization there were many development activities such: irrigation cannel, road, land use and title right, priority of production development.

Table 2. Population characteristics in Thachampa village

No	Name of group	Total HH	Total pop	Sex	
				Female	Male
1	Thai Dam	43	267	122	
2	Lao loum	39	201	105	
3	Thai Moi	5	26	14	
4	Khummu	5	24	10	
5	Thai Deang	3	16	9	
6	Hmong	2	10	4	

How village organization working and developing the activities in Thachampa village:

The village committee always has a clear plan for village development activities for both short term and long term period. Each activity was discussed in the committee before opening the village meeting (meeting with whole villager to have the agreement). In the village meeting the representative of the village committee is usually present the rational and objective of the meeting before asking for the villager's agreement. There are two cases of success of village committee working process.

Example 1: Case on contribution and fixing of village cultural hall: The construction plan was included in the village master plan. Set up the special committee to respond on specific task (planning [design, budget plan, labor, and time], meeting, encouragement and rule enforcement).

Step 1: introduction on rational of having and not having the village cultural hall to all villagers

Step 2: Held consultation meeting with villagers. In this step, there are many agreement among villagers and organization on committee set, task of each member, specific plan related to activity, labor and financial required, rule setting, etc.

Step 3: carry out the activity

Step 4: Utilization plan (it is done when the construction or fixation is done): in this step also including all agreement from the villagers. Therefore, new committee also set up to respond on the hall, e.g.

1. Elderly and youth union respond on collection the tools and services
2. Teachers and students respond on library including cleaning of library
3. Women and youth union respond on cleaning
4. Villager organization is general responding

It was destroyed by storm	Removing destroy materials and fixing by villagers	Changing new roof with in a day by villagers

Table 3. List of contribution for TCP hall

Organization	Contribution in amount	Contribution in kind
Toyota foundation through FOA and CSEAS	6000 $	
Villagers labor		1200 $
Fixing change new roof	700 $	

Utilization of the cultural hall

Meeting	Village ceremony or festival	Village office

How Faculty of Agriculture (FAg) work with rural community-TCP (Thachampa village)

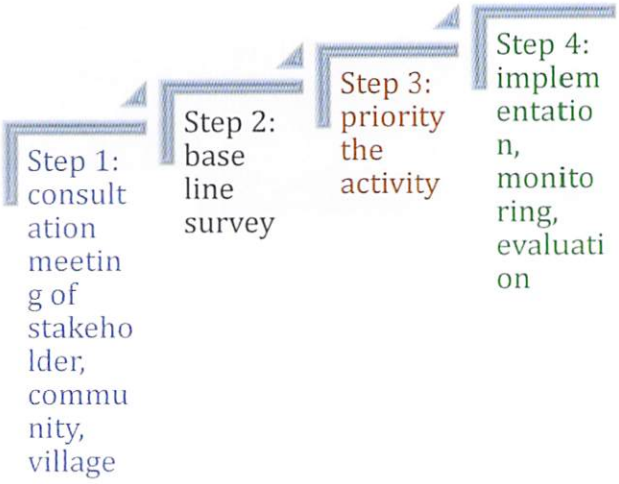


Figure 2. Steps on extension activity of FAg in community

om DAFO (District Agriculture and Forestry Office) since the year 2000 to respond on rural livelihood improvement in Huaychiem community (consist of 11 villages: Paksapmai, Palsapkao, Napok, Saenoudom, Somsamai, Hatviengkham, **Thachampa**, Venten, Palai, Dounien, Nakao). The faculty introduced and promoted many activities to theses villages. In Thachampa there are village animal health workers capacity building (three volunteers), animal revolving fund for poor farmers (goat production), poultry production, poultry vaccination modern village, animal health monitoring, etc. faculty provide training, equipment need with is not locally available.

Faculty team has a clear approach and step to work with community as well as TCP village. In the initial step is consultation meeting with different levels such as stakeholder, community leaders, and then villagers. The aim of the consultation meeting is to find out their need, cooperation, their resources and other weak and strong point of the activity need. Second step is baseline survey. Third step is prioritizing activity by villagers accordingly to the information from the previous consultation meeting and base line survey. Forth step is implementation activity and monitoring, and evaluation.

Conclusion

Village development activity is the most importance issue for Lao PDR, however helping from several stakeholders such as Government, NGOs, NPOs, Private sector and community themselves to work and collaborate for better success. Development in Thachampa was going on due to the collaboration of activate villagers, strong management of village leaders, supporting from stakeholders, and potential property resources in the village.

ラオスの伝統文化・歴史の保存の実践
ーラオス国立大学農学部との協働を通してー

Practice on Conservation of Traditional Culture and History in Rural Laos

矢嶋吉司（京都大学東南アジア研究所）
Kichiji Yajima（Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University）

Abstract

Thachampa village, which was founded by the migrants of Taidom ethnic from Xiengkhuang district in 1988, consists of two hamlets, namely Thachampa and Takay. 75% of residents of Thachampa hamlet is Taidom ethnic at present. The civil war in 1960s forced them to evacuate from home. Before settlement in Thachampa, they moved several times to seek safe place and stable living. Nowadays, demarcation of ethnic groups becomes unclear in the village. Taidom people get married to other ethnic. Most of them don't use the mother tongue anymore and very few people know traditional songs and dances. However, they still keep the tradition to honor their parents and ancestor. This tradition probably works for maintaining community in Thachampa.

はじめに

タチャンパ村では、2009年以来、伝統文化・歴史の保存に取り組んでいる。ラオス国立大学農学部とタチャンパ村の村人との協働で住民参加の活動が継続されている。タチャンパ村の活動と農学部の役割については、これまでに報告しているので詳しくは述べないが、ここでは村の定住の歴史と現在も行われている風習からタチャンパ村の地域社会について個人的な感想を述べてみる。

2003年に隣村ナタンからタッカイ集落がタチャンパ村に移行され、現在タチャンパ村はタチャンパとタッカイの二集落で構成されている。本報告は、タチャンパ集落についての報告である。

タチャンパ村の開村と現在の世帯構成

1988年、ビエンチャン県ヒンフープ郡ポントン村から10家族（V、H、Oの3家系とその親戚）が、当時ノンゴンと呼ばれていた場所に定住してタチャンパ村が開村された。同年ビエンチャン県バンビエン県ポンニャン村からも10家族が移住してきたが、後にこれらの家族はすべてポンニャン村に帰村した。これら20家族はすべて黒タイであった。ノンゴンには、近隣農村から入植していた3世帯が暮らしていたが、後に離村している。1989年には黒タイ族11家族、タイプアン族1家族、ラオ族2家族の14家族が移住しているが後に4家族が村を離れた。

1989年、北隣のナタン村と西のブンテン村から土地が割譲されタチャンパ村が開村され、約2年かけて160haほどの水田が政府によって開墾され分譲された。しかし、干害や水害が頻発し生活が成り立たず離村する世帯が続いた（図1）。1990年代の終わりころ灌漑設備が整備されたのを機に生活も安定し、ようやく村に転入転出する世帯数も落ち着いた。

表1 タチャンパの民族別の世帯数

	民族	言語グループ	世帯数	
1	黒タイ族	ラオ-タイ語グループ	41	6家系
2	ラオ-ルン族		29(13)*	4家系
3	プアン族		1	
4	赤タイ族		1	
	計		72**	

出所）2013年聞き取り世帯調査
*（ ）内の数はラオ族の男が黒タイ族の女性と結婚している世帯
** タチャンパ集落の世帯数

表

年度	1987年以前	1988年	1989年	1990年以降
年別転入世帯数	3世帯	20世帯	14世帯	
	ラオ族3世帯			離村
		ポントン村黒タイ族3家系10世帯		定住
		ポンニャン村黒タイ族10世帯		離村
			黒タイ族2家系11世帯（複数の村から移住）	8世帯定住 2世帯離村 1世帯不明
			タイプアン族1世帯	離村
			ラオ族2世帯	離村

出所）農地整備事業の作業記録に基づく村長ほかに行った聞き取りから筆者作成

タチャンパ集落の世帯数は、2013年行った聞き取り調査では、黒タイ族41世帯、ラオ族29世帯、プアン族赤タイ族各1世帯の72世帯である（表1）。村人は世帯の夫の民族により世帯の民族を認識している。ラオ族29世帯のうち13世帯が村の黒タイ女性と結婚して定着しており、黒タイ族の親族である。そのため黒タイ族に関係する世帯数は54となり、村の総世帯数の75%を占めている。これら54世帯を分類すると六家系に分かれる。六家系は、最初に定住した三家系（シェンクワン県ペーク（ポンサワン）郡シェンコン村からの二家系、現サイソンブン県ソン村周辺からの一家系）、その後シェンクワン県から直接または何度かの移動後に移住してきた三家系である。2013年の調査では、先駆け三家系に関係する世帯は24世帯となって

いる[1]。村人によると、以前は黒タイ族同士の結婚しか行われなかったので、これらの六家系も祖父母、曽祖父母の世代までさかのぼれば、すべてが親戚であった。

タチャンパ村は開村の歴史が浅く村人の記憶が鮮明であるということで、2011 年から 2013 年にかけて、黒タイ族五家系 8 世帯 10 名、ラオ族三家系 4 世帯 4 名から聞き取りを行った。ラオ族は 1940 年代から 1960 年代にかけて東北タイからビエンチャン平原に移住してきていたが、世代が交代しており詳細は不明であった。一方、黒タイ族は三家系 10 世帯が一緒に移動していたためか、比較的鮮明な記憶が残されていた。そのため、本報告は、先駆け三家系の足取りを振りかえる。

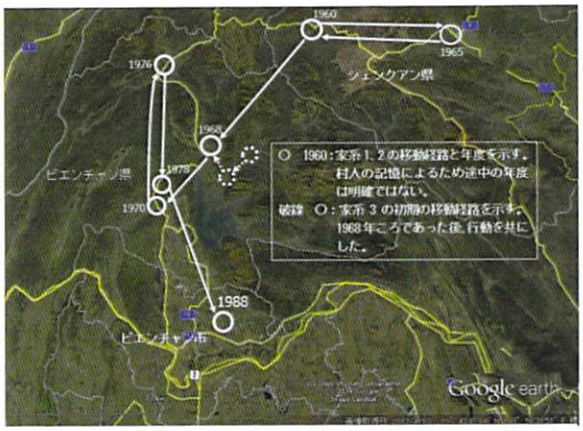
タチャンパへの道

図 2 では三家系の移住年度を時系列にまとめている。家系 1 と家系 2（以後、1，2 とする）の最初の移動は、1960 年ペーク郡シェンコン村付近で戦争が勃発したため、シェンコン村からカム郡ホック村の親戚を頼って 1（7 人家族）とその兄弟及び 2（5 人家族）の計三世帯が避難した。1965 年、アメリカ軍による空爆が開始されホック村が危険になったため、ペーク郡ムアン村（シェンコン村から 2-3km 離れた）に移動した。1968 年、アメリカ空軍に支援された政府軍によってビエンチャン県バンビエン郡ナモン（カーン）村に移住させられた。そこに 2 年ほど暮らした後、1970 年、政府軍によってヒンフープ郡ポンソン村に強制的に移動させられ 1975 年の戦争終結を迎えた。一方、3 の村は政府の軍隊がビエンチャンからシェンクワンに進撃する経路にあったため、村人はそれぞれ双方を支持して分裂した。3 の家族はビエンチャン県ムアンスム村（ナムグムダムの北岸近く）

西暦	1の家系	2の家系	3の家系	生業・食糧
1936	1936 ムックナドン村，シェンクワン県カム郡			水田耕作
1950	シェンコン村，シェンクワン県ペーク郡	1953 シェンコン村，シェンクワン県ペーク郡	54 ソン村，ヒエンチャン県サイソンブン郡	
1960	ムック村，シェンクワン県カム郡	ムック村，シェンクワン県カム郡		
64			ムアンスム村，ヒエンチャン県サイソンブン郡	
65	ムアン村，シェンクワン県ペーク郡	ムアン村，シェンクワン県ペーク郡		焼畑耕作、政府軍による投下食糧
67			ナモン ヌア村，ビエンチャン県バンビエン郡	
68	ナモン カーン村，ビエンチャン県バンビエン郡	ナモン カーン村，ビエンチャン県バンビエン郡		
69				
1970	ポンソン村，ビエンチャン県ヒンフープ郡	ポンソン村，ビエンチャン県ヒンフープ郡	ポンソン村，ビエンチャン県ヒンフープ郡	
76		ファイコム村，ビエンチャン県カシ郡	ファイコム村，ビエンチャン県カシ郡	焼畑耕作
78	ポントン村，ビエンチャン県ヒンフープ郡	ポントン村，ビエンチャン県ヒンフープ郡	ポントン村，ビエンチャン県ヒンフープ郡	
88	タチャンパ村，ビエンチャン市サイタニー郡	タチャンパ村，ビエンチャン市サイタニー郡	タチャンパ村，ビエンチャン市サイタニー郡	
2010				水田耕作

出所）聞き取り調査から筆者作成
1. 村人の記憶をたどっての情報であり実際の年度とずれが生じる可能性あり。
2. 塗りつぶしたところは確実であると考えられる。

図 2　タチャンパ定住先駆け 3 家系の移住経過



出所）聞き取りから筆者作成

図 3　タチャンパ定住先駆け 3 家系の移動経路

を経てバンビエン郡ナモン（ヌア）村に移動した。ナモン村で、1、2、3 の家系がはじめて出会い、タチャンパ定住まで行動を共にすることになった。

戦争が終結し食糧支給も終わり、政府による焼畑の制限が始まり水田適作地を探す機運が高まった。1976 年（または 78 年）、水田を求め、2 と 3 を中心とするグループがカシ郡フアイコム村に移動した。2 年ほど暮らしたが、ビエンチャンへ続く国道の治安が悪かったのと結局水田が得られなかったため、ヒンフープ郡ポントン村に移った。そこでも、焼畑を取り巻く状況は悪化していた[2]。そして、1988 年初めころ現在のタチャンパ村辺りの情報を入手し、移住した（図 3）。

戦争中に軍によって強制的に移住させられた場合を除き、移動の途中に生活が成りたち定着した者も各地にいる。例えば、フアイコム村とポントン村には子供や兄弟など親戚が定着しており、現在も時々行き来する[3]。上記の三家系では、内戦中移動を率いた親の世代の多くが亡くなり、現在は親を助けて移住を進めたいわば 1.5 世代が家系のリーダーとなっているが、彼らも既に 50 代後半となっている。

---

1 聞き取りによる各世帯の血縁関係から筆者が集計。本文でも触れているが、祖父母、曽祖父母までさかのぼると、タチャンパの黒タイ族の世帯はほとんどが親戚であった。

2 3 の男性とポントン村を訪問した際、村の東側の険しい山を指さして、「今は緑の山だが、ここで暮らしていたころは山の斜面は赤茶けた土がむき出しで、あの山を越えていった向こう側で焼き畑をやっていたが、以前ほどの収量はもはや得られなかった」と話した。

3 ポンソン村は黒タイ族によって開村されたが、現在、黒タイは 3 の親戚 1 家族だけで、残りはタイプアン族である。ナモン村は、戦争中から現在までモン族が多く住む。

黒タイ族は、シェンクワン県では、小川から引いた小規模な灌漑水路による水田稲作をしていた。タチャンパに定住した人々も、内戦が始まったころは水田耕作をしていた。爆撃が始まり水田耕作ができなくなり、余儀なく焼き畑を始めた。戦争中、不足食糧は政府軍が飛行機から投下した。戦争が終了した後は、焼き畑に適する土地の減少に加え、焼き畑が禁止されたことなどから、水田を探すことが急がれていた。

タチャンパ村では、女性たちから水田を探していたころの話を聞くことができる。1970年代に結婚したある女性は、「焼き畑をやっていたころは大変だった。夫は遠くの焼畑に出かけ何日も家を留守にした。子供が生まれたころで、自分一人で家に残り、こどもの世話から家の仕事（たぶん機織りなどもしていたのだろう）まで全部こなさなければならなかった。今、タチャンパでは家族全員一緒に暮らし、夫も家の仕事を手伝ってくれる。水田があることは本当にいい」。このように、タチャンパ定住第1世代と1.5世代からは、今も水田に対する熱い思いが伝わってくる。

タチャンパ村における黒タイの伝統

以上のような経過を経てタチャンパの黒タイ族は新しい村を作った。今では、集落に黒タイ語の読み書きはもとより、話せる人は殆んどいない[4]。当然、黒タイの歌や踊りなども見ることはない。昔は黒タイ族と他民族との通婚は殆んど無かったが、今では他民族との通婚が普通となった。戦争によって繰り返された移動の影響もあるのだろうか、タチャンパでは他民族と結婚した黒タイ族も多くなった。10年程前、集落に仏教のお寺が建てられ[5]、お寺の行事に出かける黒タイ族の人も多く、村ではいくつかの風習を除いてラオ族と黒タイ族の区別は殆んどつかない。

タチャンパ村で伝統的な黒タイ族の風習が見られるのは、葬式（ロー）と埋葬、家霊への敬い（カムセン）[6]である。

黒タイ語で葬式は「ロー」と呼ばれモー・ムット（霊に祈る人）が、死者の霊が死体から離れるように、「ソンピー・ソンビニアン」を2時間ほど祈る。そして、村の不浄の森（下流側の村外れ）に土葬する。女性と男性では墓のデコレーションが異なる（図4、図5）。特に両親が死去した時の葬式は大切である。若くして死亡した場合、祈りは短く省略されるというが詳細は不明である。

埋葬されて3日後に、家の霊が宿る場所（ホーピーフゥン、図6）に死者の霊を招くための儀式（ヘットヘウ）を行う。家の経済状況によって、水牛または牛が殺され村人にふるまわれる。

毎年9月10日頃の黒タイの正月には、両親の霊を慰労するカムセンの儀礼が行われる。黒タイ族は、死者の霊、特に両親の霊が年中家にとどまり、四六時中繁栄と家内安全を見守っていると考えている。カムセンは両親の霊が年に一度正月の時、一晩だけ家から出かけ休息を与えられる。家では朝からカムセンの菓子を作る。夕方には霊が持っていく食事を主婦が準備する。ニワトリや野菜をゆで魚を焼き、それぞれバナナの葉にくるみ（図7）、小さなかごに詰める。しかし、酔っぱらって戻れなくなると困るので、アルコールは入れない。主人が霊の荷物を準備する（傘、鞄など家によってさまざまである）（図8）。これらをホーピーフゥンの近くに置き、暗くなってからモーが両親の霊が無事に出かけまた戻ってこられるように祈りをささげ送り出す[7]（図9）。

図4　黒タイ族の女性の墓の飾り

図5 黒タイ族の男性の墓の飾り

図6ホーピーフゥン（霊が住む）

図7　カムセンの食べ物の準備

---

4 筆者は村人とともに彼らの移動してきた村を訪問したことがあるが、ほとんどの人は黒タイ語を知らない。一部の高齢者が話すほか、歌集から黒タイの民謡を覚えた人が黒タイ語を読むことができだけであった。北部のルアンナムター県には、黒タイ語の歌集などが編集され残されているとのことである。

5 ラオスでよく見られる光り輝くお寺ではなく、トタンの建物が集落からグム川の上流ある林の中にひっそりと建っている。

6 カムセンは、黒タイの正月でもあり各家では正月を祝っているが、本報告ではその時行われる家の霊を送り迎えする儀礼に焦点を当てた。

7 タチャンパでは村にいる3人のモーが家々を回り祈るとのことである。

図 8　霊が持っていく手荷物

図 9　霊の無事を祈り送り出す

図 10　翌朝、霊を再び招く

図 11　カムセンのご馳走

翌 朝、朝日が昇ってからモーが祈り、霊を家のホーピーファンに招く（図 10）。家によってこの儀式を外で行ったり家の中で行ったりと異なっている。丸いちゃぶ台（パーカオ）には、ご馳走やお菓子、酒（ラオラオ、もち米で作った焼酎）が並べられる（図 11）。祈りが終わり、霊が無事に元の場所に収まると、これらのご馳走を訪ねてきた近所の人と一緒に食べるのである。村のすべての黒タイ族の世帯でカムセンを行うのではない。両親が亡くなっている家だけで行う。両親が高齢でも健在であると存命の両親がカムセンを行う。このようにカムセンを行うのは世帯主であり、そのこども（霊の孫にあたる）は全く関わらない。タチャンパ村では、前述の家系 1 では、父母が健在でカムセンを仕切っているため、こども達が既に分家し新しい世帯を構えているがカムセンは行っていない。一方、家系 2 では、両親が亡くなっているため分家した兄弟はそれぞれの家でカムセンを行っている。

これ以外にも、黒タイの人々は、両親の幸福を祈るセンファン（1 月～6 月）、2～3 月花の咲くころ音楽を楽しむキンバーン、村の安全や平穏な生活を祈願するセンバーン／リャンピーバーン（7 月）を行っているとの話を聞くが、まだ実際に見ていないので今回は触れずにおく。

まとめ

タチャンパでは、今でも先駆け 3 家系の 1.5 世代が村の活動の中心を担っている。定住の経過で述べたように、安定した生活を求めて移動した記憶を鮮明に持つ世代である。しかし、新しい住民に加えビエンチャンなどに住む不在地主も増えており、将来村の結束がどのように保たれるのか目も離せなくなっている。人々が移動をくりかえしてきたラオスでは、土地に固執するというより、むしろ、祖父母や父母を敬う家族のきずなと、家系や親族のネットワークが強く機能する地域社会や村社会が保たれてきたことがタチャンパの人々からは感じられる。

黒タイ族の人々は既に母語の読み書きや会話はほとんどできなくなっている。伝統的な踊りや歌の継承も途切れているのが現状である。しかし、シェンクアン県やビエンチャン県の村々では、両親の霊を大切に敬うカムセンなどの風習を人々が継承している。以上から、黒タイ族における伝統文化の保存とは、両親と家の霊を敬う「カムセン」などを中心とする風習を次世代に伝えていくことだと筆者は考える。その試みとして、現在、タチャンパでは村の出来事や行事、風習などを村人たちが書き残す活動を農学部カウンターパートと協力して進めている。

謝辞

本報告は、現在進めている科研費補助金基盤 B（H25~H27、代表矢嶋）の実践型地域研究の成果を基にしている。調査結果は多くの村人の忍耐強い協力と参加に全面的に依存しながら、現在も継続中である。カウンターパートであるラオス国立大学農学部ラオ農民伝統農具博物館関係者と協働で実施しており、彼らに負うところが大きい。以上本研究関係者に感謝の意を表したい。なお、本報告は筆者の個人的な感想を述べたものでありすべての責任は筆者にある。

第２部　学生ボランティアの活動と学び

高知大学の学生が地域特産の豆を使った甘納豆作りの活動について発表中

高知大学の学生の地域での活動
Activities in Rural Communities by students of Kochi University

市川昌広（高知大学農学部）
Masahiro Ichikawa (Faculty of Agriculture ,Kochi Univ.)

Abstract

In Kochi University, in order to learn actual social issues students have gone out from the classroom to rural areas where social issues to be resolved are actually observed in theses 10 years. The faculty of agriculture has been developing curriculum for the students to learn continuously from first year until their graduation. The first -year students of faculty of agriculture, for example visiting a rural community, have experience of farming practices. The second and third year students can have internship and practice programs in rural communities. The forth year students can deepen doing graduate research.

1. はじめに

高知大学は文科省の「地（知）の拠点」事業に採択され、県内4か所の出張所に教員を送り地域との関わりを深めようとしている（図1）。学生を地域に送り、住民の方々といっしょに活動させる「えんむすび隊」といったプログラムもある（図2）。授業等で学生を地域に連れ出すようになったのは2000年ぐらいからのことである。おもに人文学部の実習や卒業研究等で地域に出て行くようになった。農学部でも、これまで、さまざまなかたちで地域と関わってきたが、学生が中山間地域の集落をさかんに訪ねるようになったのは2008年ころからである。

ここでは、ひとつの事例として高知県大豊町怒田での学生活動について紹介する。

2. 怒田集落での学生活動

大豊町は四国のほぼ中央に位置し、町の東寄りに怒田集落は位置する（図3）。大豊町の人口は4千人余りと1960年当時の5分の1程度まで減少し、高齢化率は5割を超えている。県内でも有数の過疎・高齢化が進んだ自治体である（図4）。集落は山岳地形の斜面中腹のやや緩傾斜地に広がる（図5）。そこで人々は田畑で作物を生産し、集落の文化・社会的な生活を引き継いできた（図6-8）。

怒田集落には氏原学さんという元高知大学の事務職員の方がいる。大学に40年ほど勤めており、学生や教員のあつかいはお手のものである。学生への教育とはどうあるべきかについても自身のきっちりした考え方を持っている。学生に農作業をやらせる場合でも、その作業が集落の人々にとってどのような意味を持つのかなど説明をする（図9）。ときには学生自身に作業の進め方や意味まで考えさせる。教員とも対等に議論し、教員がどのように学生指導し、学生がどのように学べばいいのかをはっきり意見してくれる。

教員は研究と教育の場として怒田集落を訪れている。図10、11は、焼畑による土がどのように変化するのかを土壌学の教員や学生が研究をしている。一方で、採れた野菜をどう売れば収入になるのかも学生が考えている。図12では省力稲作の実験をしている。

図13は怒田の社会の変化やその背景について、学生とともに聞き取りをしている様子である。学生の教育の場としても大きな役割を果たしている。学生は1年生のころから怒田へ通い、田植え（図14）や収穫（図15）などを体験している。2、3年生になると例えば農学部では「中山間地域実習」や「農業インターン演習」といった授業によって、畑の準備から作物栽培、収穫、加工、販売までの一連を体験する（図16、17）。それを通じて怒田のような村での暮らしの苦労や楽しさを学んでいる。農作業ばかりでなく、集落の共同作業（図18、19）や行事に参加させていただき、集落の人々との話しから様々なことを学ぶ。図20の上は神社の神祭が、下は観音様のお祭りが終わったあとの席に参加させていただいている様子である。怒田での作業は、夏の暑さの中、冬の寒さの中、ときに農作業に慣れている学生には厳しいが、学生にとってのひとつの楽しみは皆でいっしょに食べる昼食にあるようだ（図21）。汗を流し、腹が空いたときに仲間とともに食べる食事は格別であるようだ。

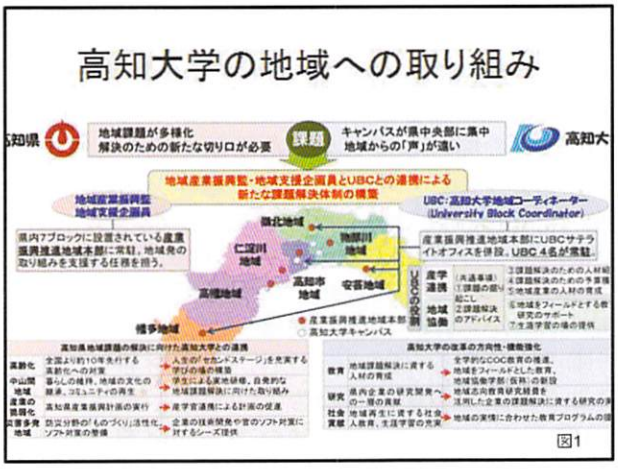
以上のように農学部での怒田を教育の場とした例では、図22に示すように学生は1年生から怒田に入り、地域になじみ、2年、3年生でさらに実習を通して深く学んでいく。4年生になると卒業研究でさらに専門的に理解を深める。中には大学の授業以外でも学生団体を作り、自主的に様々な活動を始めだす学生もいる。こういった現場での活動を通じて学びを深めていくしくみを構築しているところである。

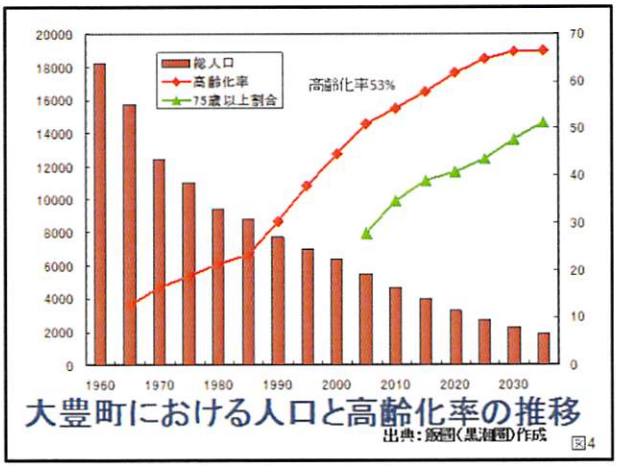
3. 地域と大学との関係（図23）

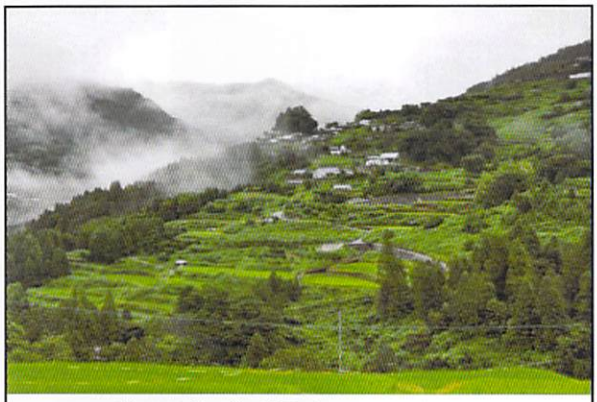
これまでは大学の学生や教員にとっての集落の視点でみてきたが、もう少し集落よりの視点から

見てみよう。例えていえば、集落はぬか床に当たるかもしれない。そこには集落社会が長い歴史の中で培ってきた技や知識・知恵が溶け込むようにつまっている。そこにつける野菜が学生、教員を含めて集落に関係ある外部の人々である。外部の人々はキウリ、ナス、ダイコンといったように様々な個性をもつ。それらがぬか床（集落社会）につけられ、様々なエキス（集落社会の知識や知恵）を吸収しおしいい漬物になっていく。野菜の方からも何らかのエキスがぬか床にしみ出していく。ときどきぬか床をかきまわし、新鮮な空気を送り込むのも外部の人々の役割だろう。野菜がつけ込まれるにつれ、次第にぬか床も成熟してくる。

ときにはＩターンのような新しいぬかを足しながら常に元気のあるぬか床を維持し、継いでいく。このような大学の教員・学生を含めた外部の人々と集落との関係が作れればと考える。

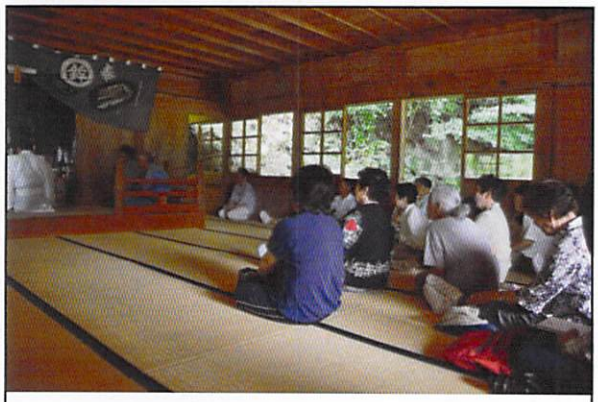






怒田集落（標高400mぐらい） 図5

図6



お宮のお祭り(2010. 8. 2)30人ぐらい集まる 図7

お堂のお祭り(かつては盆踊りも)

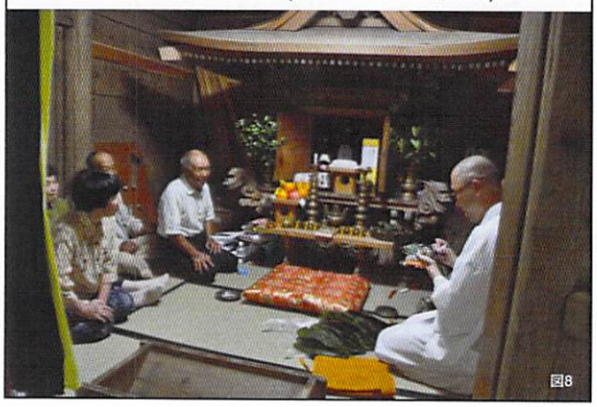


図8

図9

図10

休耕田を焼き、そばを播く 図11

図12

図13

図14

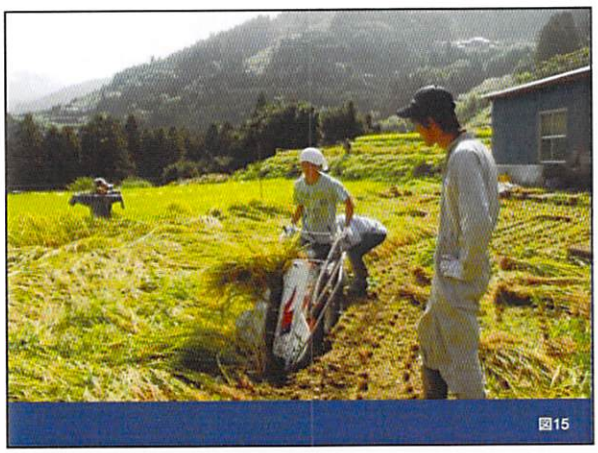


図15

図16

農産物の商品化と販売
↑日曜市での販売
パッケージ作業中→
図17

道役(2010. 7.4)
図18

道役 (2011)
図19

真の教育の場？
図20

みんなで食べると楽しい
図21

中山間地を舞台にした学生のフィールドワークを通した連携
ー現場で感じ、考える教育ー
市川昌広（高知大学）
今日の中山間地域がかかえる過疎・高齢化やそれに伴う課題について、大学生が感じ、理解し、どうすればいいのかを自ら考えてもらうために、現場での教育を重視しています。
1年生から4年生まで、継続的・体系的に現場での経験を積めるカリキュラムの構築を目指しています。
ここでは大豊町怒田集落での実習や活動の例を発表します。
1年生
「地域協働入門」など
2年生
「中山間地実習」など
3年生
「農業インターン実習」など
4年生
卒業研究など
3，4年生
自主的な活動へ
図22

野菜＝教員、学生、Iターンなどさまざまな個性を持つ外部の人々
よいぬか床につかり、よい漬物に。
野菜からのエキスで、熟成したぬかどこに。

図23

大豊町怒田での高知大学生の活動

Kochi University student activities and issue in Otoyo , Nuta

高橋一弘（高知大学農学部学生）
Kazuhiro Takahashi（Student, Faculty of Agriculture ,Kochi Univ.t）

Abstract

Students of Kochi University have done activities in Nuta village to sustain the society and culture. An example of farming experience is harvest of Yuzu. In product development and selling experience of the products, students develop agricultural products and sell them at the Sunday Market in Kochi city and the Japan Food Festa in Tokyo organized by the Ministry of Agriculture. Students also sometimes participate to community activities, such as road cleaning and village meeting.

1 はじめに

大豊町怒田集落は、過疎高齢化の進む集落の 1 つである。集落は耕作放棄地の増加や福祉サービスの低下、人口減少など様々な問題を抱えている。その一方で、近年では学生達の学習の場として農山村が利用されることも多い。この怒田集落も 9 年前から高知大学などの学生たちと交流を深め、学習の場を提供している。

これまで怒田集落で行われてきた高知大学の学生による活動を、「農作業」、「販売」、「商品開発」、「地域との関り」の四点から簡単に見ていく。

2 大豊町怒田での高知大学生の活動

それぞれの活動を紹介する前に、怒田に関わる学生について少し補則をしておく。怒田に関わる学生には、大きく分けて 5 つのパターンがある。大学で組まれる「授業」の中で怒田に来て活動をする学生。授業よりさらに学生の主体性を高めた「インターンシップ」や「卒業論文研究」を通して関わる学生。中山間地域の活性化などを目的とする「学生団体」。そして、少数であるが、「個人的」に怒田に関わる学生もいる。

地域との関係の深さや活動の幅、目的は学生によって様々である。そんな学生が毎年代わる代わる地域に入っている。学生には学生の、地域には地域の、大学には大学の、それぞれの目的があり、長い目で見てその全てを達成するのはとても難しい。地域と学生と大学の三者に価値のある学生活動、その難しさを心にとめて、以下の活動を見て欲しい。

2-1 農作業

「農作業」と一口に言っても農業における作業全般を農作業と言うわけだから、「農作業」だけでは学生が何をしているのかは伝わらない。また、

紹介しようにも多種多様で全部は無理であるため、本項では学生が行っている作業とはどんなものなのかとその具体例を挙げて述べていく。

怒田で学生が行っている農作業の多くは、怒田で暮らしている地域の方々の普段行う農作業へ参加させてもらうことを基本としている。種類によっては学生が行いたいこともできる。具体例としては、秋にはユズの収穫が地域では恒例になっており、地域の方と一緒に行うが、柚子で商品開発を行いたい学生は収穫だけでなく開発もすることができる。

先述のように怒田で農作業を行う学生たちは様々な背景の中で怒田へとやってきて作業を行うわけだが、どの学生の場合にも言えることは、どの立場の学生であっても地域の方のご厚意の上に成り立っていることを忘れてはいけないということだ。

2-2 販売

高知県の有名な観光地の 1 つに、日曜市がある。高知市追手筋で毎週日曜日に開かれる街路市であり、全長は 1.3km に及ぶ。300 年以上の歴史を持つこの市では、新鮮な野菜や果物はもちろん、金物、打ち刃物、植木なども売られている。

その日曜市の一角に、怒田の商品を取り扱う「ぬたたの恵み直販所」がある。朝の七時半ごろに開店し、販売状況にもよるが午後三時には閉店する。学生は道行く人に声掛けをしながら商品の販売を行う。商品を売るにはまず商品のことを知らなければならず、店舗に初めて来た学生は、まず商品の説明を受ける。商品について知ると、その商品ができるまでの様々な工程（加工、集荷、袋詰め、パーッケージの開発 etc）に目が向く学生もいる。一つの商品を売るということの難しさを学ぶとともに、どうすればさらに売れるかも考え始める。そこで、学生ならではの工夫が出てくる。より商品を売るために、日曜市でできることを考えて実践する。幸いにして怒田店舗では思いついたアイデアをすぐに実行に移すことができ、実際に、看板の設置や商品ポップは学生のアイデアから生まれたものである。

販売についてもう一つ事例として、JAPAN

FOOD FESTA（以下、JFF）を紹介する。JFFとは農林水産省主催で毎年 11 月に開かれている食の祭典で、東京丸の内仲通りを中心に二日間にわたって行われる。JFF のブースの 1 つに、「農林漁業学園」という食に関心のある大学生が集まる場所があり、怒田に関わる学生もこれまでに計 3 回、出店している。販売する商品は日曜市での商品に加えて、学生が企画開発した商品（2-3 商品開発参照）も販売する。怒田の産品を紹介すると共に、パンフレット作成や店頭での声掛けによる情報発信、他団体との交流を行った。

2-3 商品開発

本項では今年度に新たに商品開発をされた「ゆずベリー」について紹介する。ゆずベリーとは、怒田で採れたユズとブルーベリーを使って作られたシロップのことである。

ゆずベリーを開発した動機は２つある。１つ目は怒田の商品を加工してできる付加価値のある商品を開発したかったからである。ブルーベリーは生もので季節性があるため、保存するには冷凍するのが一般的である。冷凍したブルーベリーでも煮詰めるだけで簡単に製作できることから、シロップを作ることにした。動機の二つ目は、そこに「ブルーベリーを使った商品開発」という課題が怒田にあったからだ。大学と連携した試みによって、数年前に怒田にブルーベリーが植えられたが、生食用として売るにとどまっていた。これを何かにできないかという課題があったというのも、ゆずベリーの開発の動機の１つと言える。また、怒田にただ通うだけの学生ではなく、怒田のためになにかをしたかったという思いもあった。

ゆずベリーは前述された JAPAN FOOD FESTA で販売され、好評につき完売した。今後の目標としては日曜市でも売り出し、お客さんの声を聞いて改良を重ね、怒田の目玉商品にしていくことである。

2-4 地域との関り

怒田に訪れる学生は農作業だけでなく地域の行事等に参加し、地域との関りを結んでいる。年に二度の地区の道路清掃である道役への参加や、毎月１回東豊永地区の人々が集まって今後の地区の方向性や各地区の現状報告等が行われる東豊永会議への出席を行っている。

また、今年度はＩターン者で高知大学の卒業生でもあるＴ夫妻が怒田に移住し、結婚披露宴を怒田で行い、そこでも多数の学生が参加した。T さんのように卒業後も関わっていけるような関係作りをしたいものだ。

3　今後の課題と展望

今後の学生の課題としては自分のやりたいことばかりを地域に押し付けるのではなく、地域の方の生活等に合わせていくことである。学ばせてもらうとは言っても、そこは地域の方の生活の場であり、そこにはお互いに考慮しなければならない一線がある。地域の方の生活や要望に合わせて、誰かの手伝いではなく、自分に出来ることを探していくという意識でやっていくべきであると考える。

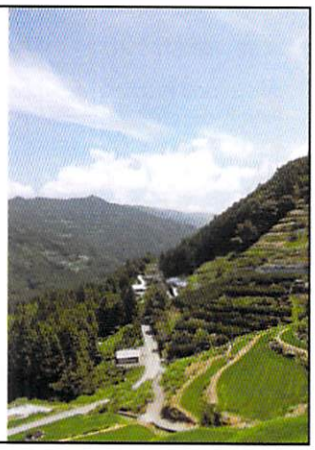
大豊町怒田での高知大学生の活動
Activity reports in Nuta

怒田(Nuta)

所在:高知県長岡郡大豊町

- 標高:elevation
  約500m
- 人口:population
  90人(男46人/女44人)
- 65歳以上の人:over65
  54人(男24人/女30人)
- 世帯数:the number of households
  45世帯

※人口、65歳以上の人、世帯数は
平成22年度国勢調査より抜粋



田植え!
Rice Planting

農業
Agriculture

販売 Selling

販売:日曜市(Sunday Market)

日曜市とは、高知市追手筋で毎週日曜日に開かれる街路市。全長1.3kmに及ぶ。
新鮮な野菜や果物はもちろん、金物、打ち刃物、植木なども売られている。
元禄3年(1960年)以来、300年以上の歴史がある。

商品販売の手伝い
⇒商品販売の難しさ
⇒学生ならではの工夫

下写真:高知市ホームページより

販売：JAPAN FOOD FESTA「農林漁業学園」

JAPAN FOOD FESTA 2014

JAPAN FOOD FESTAとは、東京丸の内仲通りを中心に二日間行われる食の祭典。

農林漁業学園とは、日本全国の「食」や「農林漁業」に関する自主的な取組を行っている大学生グループが、大学生自ら収穫した農産物や民間企業との連携等により開発した加工食品などを販売するエリア。

- ●怒田の産品の紹介
  - ・商品販売 説明
- ●情報発信
  - ・パンフレットの作成
  - ・店頭での声掛け
- ●他団体との交流

商品開発
Product development

柚子（YUZU）

ゆずベリー(シロップ)

ブルーベリー
Blueberry

地域との関わり
Relationship with *Nuta*

東豊永会議
Meeting with some residents

道役
Cleaning up

結婚披露宴
A wedding reception

知井と京都ボランティア学習実践研究会

Chii and student volunteers in Kyoto society of practical volunteer education

名賀亨（華頂短期大学）
Toru Naga（Kacho College）

第6回 文化と歴史 そして生態を重視した
もう一つの京の根農村開発に関する国際会議 in 美山
2014.11.15

**『ワークキャンプ in 美山』を題材として考える
地域貢献、そしてボランティア学習**

名賀 亨
京都華頂大学・華頂短期大学
京都ボランティア学習実践研究会

1．ワークキャンプについて

1）そもそもワークキャンプとは…

"NICE"（日本の国内外で多様なワークキャンプ展開）
⇒「世界の若者が2～3週間一緒に暮らし、住民達と、環境・文化保護、福祉、農村開発などに取り組む、国際ボランティアプロジェクト」

"FIWC"（1957年から日本の国内外でハンセン病回復者への支援ワークキャンプを展開。Friends International Work Camps）
⇒「社会的な矛盾を抱えたり不利益を被っている人々や地域を訪ねて現地の人々と交流を深めながら、自分たちの労働を通してその解決に取り組む活動で」

"good!"（ワークキャンプを通して若者のきっかけ作りを体験）
⇒「日常を離れて、共同生活やホームステイをしながら、その場所が必要としている、作業をボランティアで行うキャンプで、参加者の人間的な成長を目指す」

"京都ボランティア学習実践研究会"（熱心なワークキャンプの主催）
⇒「宿泊を伴った共同生活を通して、地域にある生活課題に関わるボランティア活動実践」

2．美山でのワークキャンプ実践の経緯

- 1985年～大阪ボランティア協会 「ボランティアセミナー」
- 1973年～大阪ボランティア協会 「高校生ワークキャンプ」
- 2006年～山口松陽学校
- 2007年8月～神戸大学「ぼらばん 色久光明園 WC」

- 2007年9月 京都ボランティア学習実践研究会立上げ
- 2008年1月 京都市左京区「雪かきボランティア」
- 2008年2月～7月 各地で研究会としてのワークキャンプ実践の模索
- 2008年7月 美山知井振興会で ワークキャンプの試験的受け入れが決定
- 2008年9月『第1回 ワークキャンプ in 美山』開催

3．ワークキャンプの普遍的価値

ボランティア活動としてのワークキャンプに内在する二つの価値

⇒「 ワークキャンプ受入れ先の、さまざまな課題への関わり 」
課題解決性 ＝ 地域貢献

⇒「 若者のボランティア活動実践を通した学びと変化 」
学習性 ＝ ボランティア学習

★予定する学び　★期待する学び　★偶発的な学び

※「ワークキャンプ in 美山」では、こうした二つの価値を意識し実践を続けてきた

4．地域貢献とボランティア学習

1）社会の問題に主体的に関わっていく ＝ ボランティアの基本
2）ボランティア活動の中には様々な出会いと発見がある
3）出会いと発見が学びへとつながっていく。　ワークキャンプはこの学びに注目し、
●課題の現場での「実践」を大前提に、●学びを抽出できるように仕掛けてきた

根本にある考え方

「ボランティア自身が学習する意味は、主体を形成すること」

市民が主体的に社会に参加すること、民主主義的な社会の創出のためには、モノやカネ ではなく、人間そのものの成長こそが重要である。
民主主義的な社会づくりは、単なる善意活動という観点だけでは達成できない。個の主体性を問い、あるべき社会や新しいボランティア像を描いていかなければならない。
（大阪ボランティア協会の考え方）

↑ 美山ワーキャンの根底にあるのは大阪ボランティア協会の基本姿勢

5．大阪ボランティア協会について…　＜参考＞

1）1965年（昭和40年）に、市民の力が結集して、市民の手によって創出された民間のボランティアセンター
1948年＝大阪社会事業ボランティア協会　1957年＝学生ボランティアセンター
1962年＝港島善意銀行

2）設立当初から一貫してボランティア育成（人育て）に注力してきた
●日本で最初にボランティアスクールを開催
・初級ボランティアスクール・ゲームソングセミナー・婦人ボランティアスクール…
・高校生ワークキャンプ・サマーボランティア・パリ天・日韓青少年V交流…

3）名賀⇒1973年に大阪ボランティア協会と出会い、様々な人と出会う
堂田善寺先生、岡本栄一先生を始めとして、多くの人との出会いは、名賀がボランティア活動の理念やボランティア学習の基本的な考え方、そして実践姿勢を考えさせる大きな機会となった…

4）美山ワークキャンプは、
「名賀という媒体」を通して、大阪ボランティア協会の"想い"が注入されている

現代の世界では、個人の力はあまりにも乏しく、個人では何もできない、という無力感をあたえます。　しかし、この個人である私たちがやらなければだれが世界を動かすのでしょうか。小さな個人ですが、誠にも満する現代と感情を持っています。個人の力はやがて大きな力になると、私は信じていますが、それは単なる夢でしょうか。もしこれが夢で終わるならば、人類はおしまいだという気がします。ボランティアは、その動機機に強む人だと思っています。それゆえに、ボランティアは誇りと愛を持って行動する人たちだと思っています。
1969年　堂田 善寺

6．“美山”という地域にとっての価値 ＝ 地域貢献 ＝

※ 地域の人たちから寄せられた声 ※

◆◆ 外部の力を活用した
1）地域域福祉実践 、2）地域開発・地域活性化 ・・・

●高齢者の多い所で人手不足のため大変助かった
●高齢者が多い地域で、多くの若者とワークキャンプを通して交流ができることが刺激になる
●高齢化が極度の集落で若い方の元気な力が大変地域の活力になると考える
●高齢者が若い人との交流が出来る
●集落の環境維持にとても役立っている 人とのつながりが人生の励みとなっている
●高齢者の人たちに元気を与えてくださっていると思っています
●若者の少ない地域なので、多くの若い人たちが来てくれ話しをすること、一緒に食事ができること、老人には一番楽しく若返る気分になれる、良い事ばかりである
●若い人との交流が地域の人々の心を和ませ、現実的には労働力の確保と経済的要件の助けとなっている
●当地区ではアマゴ釣り場などで他所の人を少しでも歓迎しているが、このような目的をもつ人ではなく若い皆さんこそ地域活力になると考える

7．参加する若者にとっての価値 ＝ボランティア学習＝

●美山で生活することの大変さを知った。
●人は他者からの愛を感じて再び生きる元気を与えられると感じた。
●継続して美山でワークキャンプをすることの意味を知ることができた。
●感謝されることだけじゃなくて、集落に入り活動することで得られた信頼と絆があることを改めて知らされた。そして、私たちのことを待っていてくれる人たちがいることで、私たちもエネルギーになるし、地域の人もワークキャンプに生きがい感じてくれていることがすごく意味のあることだと思った。美山の人と出会うことができて、幸せでいっぱいになった。
●私たちが日々、いかにあいまいに妥協して生きているか、「人間関係」「ワーク」「地域の問題」「ボランティアとは」などなど、日々の生活の中で避けてきたことと嫌でも向き合わされるのがワークキャンプだと思った。
●ワークキャンプは勉強では学ぶことができないことが学べるところだった。
●美山について少しだが知ることができた。
●協働することの難しさ・つながることの喜びを痛感した。
●みんなが助け合って協力して働くことの楽しさ、仲間の大切さ
●みんなの違いを認め合うことの楽しさ

8．ワークキャンプの記録（1）

●第1回 08年9月4日～7日 （3泊4日） 参加者21名
佐々里＝溝掃除、 知井＝自然文化園前河原ゴミ拾い、学校裏広場（現グランドゴルフ場）草刈り

●第2回 08年11月14日～16日 （2泊3日）参加者13名
田歌＝電柵撤去 知見＝河原植栽

●第3回 09年2月15日～21日（6泊7日）参加者18名
河内谷＝倒木撤去、雪かき、側溝内雪どろだし 佐々里＝雪かき、交流会、雪遊び 知見＝倒木撤去

●第4回 09年8月4日～10日（6泊7日）参加者11名
知見＝側溝掃除 佐々里＝仏具磨き、草刈り、交流会 河内谷＝草刈り 知井＝川遊び 振興会＝鮎祭り応援

●第5回 09年10月23日～25日（2泊3日） 参加者18名
河内谷＝側溝掃除 佐々里＝ゴミ拾い

●第6回 10年2月7日～13日（6泊7日） 参加者23名
知見＝雪かき、餅つき交流 河内谷＝餅つき交流 佐々里＝間伐材整理、餅つき交流

●第7回 10年7月9日～11日（2泊3日） 参加者15名
河内谷＝側溝掃除 佐々里＝側溝掃除

●第8回 10年9月6日～13日（7泊8日） 参加者30名
北村＝稲刈り、草刈り、側溝掃除、脱穀、稲木移動 知見＝草刈り 振興会＝倉庫片付け（会館裏・グランド横）、川遊び 佐々里＝稲刈り、草刈り 河内谷＝側溝掃除、稲刈り

●第9回 10年11月13日～15日（2泊3日） 参加者22名
知見＝道路脇水仙球根植え 河内谷＝用水路泥だし 佐々里＝神社・お寺落ち葉拾い

●第10回 11年2月4日～9日（5泊6日） 参加者24名
河内谷＝雪かき 知見＝雪かき 佐々里＝雪かき

8．ワークキャンプの記録（2）

第11回11年7月15日～17日（2泊3日） 参加者8名 知見＝溝掃除

第12回11年8月27日～9月2日（6泊7日） 参加者15名
知井＝グランド草刈り 南＝竹伐り 佐々里＝ゴミ拾い 知見＝溝掃除 河内谷＝草刈り、ネット撤去

第13回11年12月9日～11日（2泊3日）参加者9名 南＝竹伐り 佐々里＝神社落ち葉拾い、お寺雪囲い、餅つき

第14回12年2月6日～11日（5泊6日）参加者23名 河内谷＝雪かき 佐々里＝雪かき、昼食交流 知見＝雪かき

第15回12年8月25日～31日（6泊7日）参加者20名
知井＝グランド草刈り 知見＝側溝掃除 北村＝独居老人宅個別支援草刈り、茅つる草切り、獣除けネットつる草切り、茅葺の里勉強会 佐々里＝独居老人交流会 河内谷＝側溝掃除

第16回13年2月04日～10日（6泊7日） 参加者20名
河内谷＝個人宅・公民館雪かき 知見＝個人宅雪かき 佐々里＝お寺雪かき、餅つき交流、滝見学 北村＝用水路泥だし

第17回13年8月26日～9月1日 参加者18名
南＝竹伐り 北村＝茅つる草刈 佐々里＝桜修繕、プレート作成・取り付け 知井＝グランド草刈り

第18回13年11月22日～24日（2泊3日） 参加者14名
知見＝かえで植樹、用水路泥だし 河内谷＝用水路泥だし （台風大雨で詰まった泥）

第19回14年2月4日～10日（6泊7日） 参加者25名
大雪のため各所で雪かき 田歌、芦生、河内谷、中、佐々里、知見、江和

第20回14年8月4日～10日 台風のため9日まで （5泊6日） 参加者14名
河内谷＝桜枝切り 佐々里＝お寺清掃・交流会 知見＝側溝掃除 北＝茅つる草切り

9．美山ワークキャンプの可能性

1）いま、若者たちの周りでは・・・
⇒物質的に豊かな社会の中で、
★人間関係がますます希薄化し、他者とのつながりや共生の意味が見えにくい・・・
★自分自身が見えにくい、夢が描けない、社会との関係性が見えない・・・
などの現象が起こっている

2）いま、大切なことは・・・
⇒異質な他者との主体的協働を通した、共生社会の構築
★異質な他者と出会い、交わり、コミュニケーションし、多彩な生きざまを身体で感じ、一人ひとりの違いを認め合い、共生することの意味と大切さを実感すること

3）ワークキャンプの可能性・・・
⇒地域の人たちと共働し、時間を共有し、話し、笑い、喜び、感動し、悩み、苦しみ、涙する事で、
★自らの身体をもって地域で暮らす人たちのいのちを感じ、自分のいのちとの関係性を感じる
★多彩な体験を通して、当事者にはなれないが、当事者に近づくことはできる
自身の生活場面に帰った時に、「新たな活動を生み出していく」パワーを生み出す

4）限界集落という社会課題の現場の中から・・・
これからの社会で主人公となる若者たちが、自分のいのちと他者のいのちの関係性を考え、主体的にそのいのちを大切にしていくための行動を起こしていくきっかけをつかむ意味で、このワークキャンプは継続していく大きな意味がある。

「ワークキャンプ in 美山」は、これからも成長を続けていきます。

ご清聴ありがとうございました

美山町知井での京都ボランティア学習実践研究会の活動と問題点

Activity in Chii, Miyama town and its problems

京都ボランティア学習実践研究会
Kyoto society of practical volunteer education

第６回　文化と歴史そして整体を重視した
もうひとつの草の根の農村開発に関する国際会議　in　美山

ワークキャンプ　in　美山
現状と課題

京都ボランティア学習実践研究会
ワークキャンプ　in　美山　参加者
カピゴン、ぷちょん、ぽーい、ちゃこ
アーレン、ちげこ、咲

2014.11.15

1．これまでの活動
2008年9月に第1回を実施　2013年8月まで18回
実施　123名　延べ315名が参加

2．活動場所
南丹市美山町知井地区を拠点として、同地区内にある佐々里、知見、河内谷、南、北の5つの支援集落(限界集落)を対象に活動

3．美山ワークキャンプのミッション
「地域支援」と「ボランティア学習」

4．参加者の所属大学
・華頂短期大学・同志社大学・神戸大学・花園大学・京都橘華大学・龍谷大学・立命館大学・近畿大学・光華女子大学・種智院大学・佛教大学・京都大学・関西学院大学・京都建築大学・京都華頂大学・京都教育大学・日本福祉大学・名古屋学芸大学短大・釜鹿大学・神戸女子大学

美山町の位 置
京都府のほぼ中央に位置し、かやぶき民家と、のどかな田園風景が残る中山間地

美山町は京都府のほぼ中央部
平成１８年１月１日に４町が合併

佐々里・河内谷・知見・北・南の
五集落で活動

5．地域から期待される活動(支援集落のニーズ)

高齢化の進行に伴って集落機能を維持することがますます困難になりつつある支援集落の中で生まれる多様なニーズへの直接的な対応と、地元住民と参加者の交流を通した地域の活性化と住民の心身の活性化(村おこしや住民のエンパワメント)

・田畑や家屋　・山林等の維持や管理（草刈り等）
・用水路清掃　・獣除け防護ネット張り
・植林　・河原の清掃
・雪かき　・竹刈り
・地域住民との交流など

6．期待する学び:(ボランティア学習)

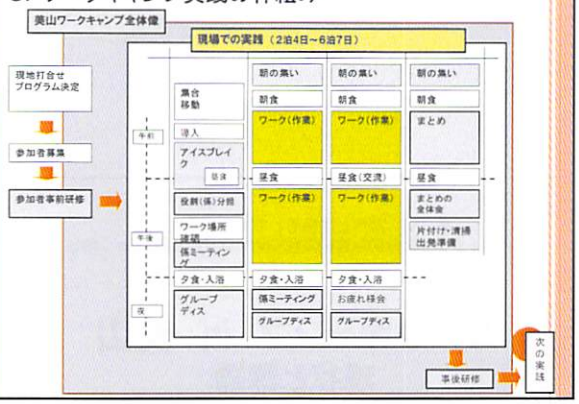
限界集落の現実を理解し、そこで暮らす人たちの暮らしを支援するために自分ができることを考える。ワークキャンプで理解した限界集落への関わりの必要性を普遍的なものとして捉え、自分が暮らす周辺地域あるいはもっと広い社会の中で、全ての人が暮らしやすい社会にするために主体的に社会参加する意識の醸成。他者との交わりを通した自分自身の再発見(セルフエスティーム・エンパワメント)

7.「期待される活動」を充実させるため

1）課題の現場での実践活動（ワーク）
　　地域の人たちとの協働
2）支援集落での昼食サロンの実施
3）夕食交流会の実施

4）主体的参加の具現化としての役割分担と協働
5）日々のリフレクションを通した気づきの共有化
　①役割ごとの振り返り
　②役割を超えた振り返り

8. ワークキャンプ実践の枠組み



導入・意識作り

事前研修
アイスブレイク

ワーク　草刈り

ワーク　用水路泥上げ

ワーク　竹伐り

ワーク 獣除けネット張り

ワーク 雪かき

ワーク 雪かき

交流

交流

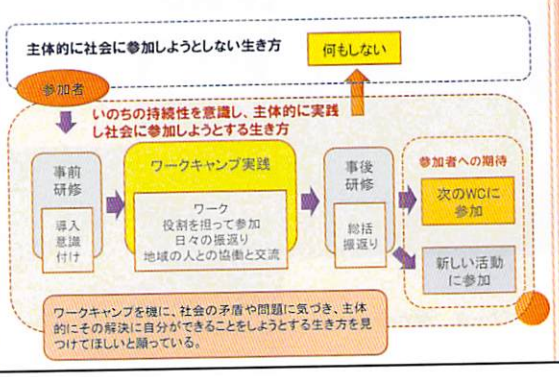
役割分担

9. 地域にとっての意味 ～期待される活動に対して～

※※ 地域の人たちから寄せられた声 ※※

- 高齢者の多い所で人手不足のため大変助かった
- 高齢者が多い地域で、多くの若者とワークキャンプを通して交流ができることが刺激になる
- 高齢化が極度の集落で若い方の元気な力が大変地域の活力になると考える
- 高齢者が若い人との交流が出来る
- 集落の環境維持にとても役立っている　人とのつながりが人生の励みとなっている
- 高齢者の人たちに元気を与えてくださっていると思っています
- 若者の少ない地域なので、多くの若い人たちが来てくれ話しをすること、一緒に食事ができること、老人には一番楽しく若返る気分になれる、良い事ばかりである
- 若い人との交流が地域の人々の心を和ませ、現実的には労働力の確保と経済的要件の助けとなっている
- 当地区ではアマゴ釣り場などで他所の人を少しでも歓迎しているが、このような目的をもつ人ではなく若い皆さんこそ地域活力になると考える

10. 参加者にとっての意味



11. 参加者は何を感じ、何を学ぶのか　①

- 地域でのつながりがあって、決して一人ではないけれど、年金だけで美山で生活する大変さを学んだ。
- 地域の人たちとつながっていくにはWCだけでなく、もっともっと交流していかないといけないと思った。また、そうしてほしいと地域の人たちが願っていることを知った。
- 美山の緑や空はやっぱり美しい。自然が素敵だということを学んだ。
- 人は他者からの愛を感じて再び生きる元気を与えられるのだと感じた。
- 毎日毎日一緒に生活して、しんどさや楽しさを共有できることって素敵。これがWCの魅力で、はまってしまうところなのかもしれない。やっぱり好きだな～と思った。

13. 参加者は何を感じ、何を学ぶのか　②

- 今あるこの生活を不便と思うか、恵まれていると思うかで生き方は変化する。利便性の追求だけが豊かな暮らしと言えるだろうか…。個々の気持ち次第だと思うけど、今の生活に満足できない、感謝できないことは本当の幸せになるだろうか。もっと、今の私たちの生活に感謝するべきではないか。しかし、それにはたくさんの課題があると思う…。幸せって何だろうか。と考えた一日でした。
- 継続して美山のワークキャンプをすることの意味を知れたかな・・・？　感謝されることだけじゃなくて、集落に入り活動することで得られた信頼と絆があることを改めて知らされました。そして、私たちのことを待っていてくれる人たちがいることで、私たちもエネルギーになるし、地域の人もWCに生きがい感じてくれていることがすごく意味のあることだなと思った。美山の人と出会うことができて、幸せでいっぱいの一日でした。
- 言葉に表すコミュニケーションも大切だが、笑顔やスキンシップなど非言語のコミュニケーションも大切だということ。

14. 参加者は何を感じ、何を学ぶのか ③

●今日の活動では人の為に行動することの重要性がわかった気がします。佐々里の人のために桜のガードをつくったり、交流会をしたことによって、佐々里の人たちは本当に喜んでくれてました。今まで人のために何かをするなんてあんまりやってこなかったけど、人のために何かをすることは自分も成長できるし、相手も喜んでくれる、ということが実感できました。

●村の皆さんが村おこしの為に本当にいろんなことを考えて活動しているんだなあと思いました。

●私にとってWC＝勉強では学ぶことができないことが学べるところでした。ワークを通して人と協力することの大切さを、係を通して仕事をすることの難しさを、地域の方々との交流を通して人の温かさや人の為に何かをすることへの喜びを感じた。

●美山について少し知ることができた。自分がどんな場所で活動しているかを知って、今後どのように向きあっていくか、考えがはっきりしていくだろうかと思う。

15. 参加者は何を感じ、何を学ぶのか ④

●協働することの難しさ・つながることの喜びを痛感した

●他者との協働の難しさ、限界集落の問題点

●私たちが日々、いかにあいまいに妥協して生きているか。 「人間関係」「ワーク」「地域の問題」「ボランティアとは」・・・日々の生活の中で楽をし、避けてきたことと嫌でも向き合わされるのがWCだと思った。

●人のために色々なことをする楽しさや面白さを学ぶことができました。

●ただ誰かのために働けるだけで幸せだな。自己満足なところもあるかもしれないけれど、ちょっとしたお互いに助け合うことができることが大切。

●人は一人じゃ生きてはいけない、つながりの中で生きるのが人であり、たとえ、そのつながりが小さくても、それは自分だけのかけがえのない人生を歩むために必要。

●ボランティアって難しいことじゃないんだな。がんばること、みんなとやることで楽しさ倍増！！

地域振興における学生ボランティアの役割
－山口県阿武町での交流事業の事例に基づいて－

Role of the student volunteer in the local promotion:
based on an example of the exchange activity in Abu-cho, Yamaguchi prefecture, Japan

辻　多聞（山口大学）
Tsuji Tamon (Yamaguchi University)

Abstract

There is community interaction between Ubuga, Abu-cho, Yamaguchi prefecture and Yamaguchi University students. It began in 2012. Based on this interaction, it was reviewed about the role of the student volunteer in the regional development. The satisfactory results occurred for the program contents that the clear needs from the community residents were shown in. However, the students was not able to bring about the sufficient results when it was not so. It is supposed that the student volunteer is only support, and a community should advance its regional development on its own initiative. "Win-win relationship", that community residents get their invigorating local communities and students obtain their career advance, will be important on a regional development.

1．はじめに

産業の衰退・経済的衰退・雇用の減少・人口の流出・人口の減少・地域文化の伝統の途絶など地方衰退が進んでいる。特に農山漁村という地域はその衰退が著しく、農林水産省（2014）に示されるように、農山漁村を国民の共通財産として、その衰退は国民全体の問題として考えなければならない。一方、文部科学省（2000）には、大学での自主的活動をはじめとする正課外教育の積極的な捉え直しが示された。こうした流れのなか、全国で多くの地域振興に携わっている。

例えば氏原（2013）は、高知県大豊町の一集落である怒田（ぬた）において、高知大学生がその集落での農産物の商品化に取り組んでいる事例を紹介している。また京都府亀岡市の地域振興の一環であるすいたん農園では農業体験塾が開設されている（大西 2014）。その塾における竹炭を用いた土壌改良剤は「亀岡カーボンマイナスプロジェクト」として京都学園大学、立命館大学、龍谷大学の学生たちが研究・実践に大いに関与している（亀岡市）。2013 年度より文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」が実施されている（文部科学省 2014）。ここでは大学による地域課題の解決および地域振興策の立案・実施をその目的の一つとして掲げている。このことから、地域振興に携わる学生ボランティアが今後ますます増加していくことが予想される。

山口大学における大学生が関わる地域振興の一つに、2012 年より始まった山口県阿武郡阿武町宇生賀との交流事業がある。本論文ではこの事例をもとに、地域振興における学生ボランティアの役割に関して、交流プログラムの内容と成果から今一度見直すとともに、学生ボランティアのあり方および地域と学生との関係について考え直すことを目的とする。

2．　対象地域

2.1　山口県阿武郡阿武町宇生賀

阿武郡阿武町は山口県の北部に位置する(図 1)。阿武町は大きく、海岸部の奈古地区と宇田郷地区、そして内陸部の福賀地区の 3 地区に分類される。その 3 地区の福賀地区に宇生賀は含まれている。標高約 400m の宇生賀盆地にその主な集落が形成されている。2010 年度国勢調査では、宇生賀の人

図 1　山口県における阿武郡阿武町宇生賀の位置とその外観写真

口は264人（世帯数119戸）と発表されている（総務省 2014）。65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合である高齢化率は44.7%であり、同時期調査結果である日本全体での高齢化率23.0%と比べて非常に高いことがわかる（図2）。宇生賀の主な産業は農業である。

2.2 宇生賀の挑戦

図3は宇生賀における宇生賀中央とされる4つの集落、伊豆・三和・上万・黒川の合計人口の推移である。1970年において363人であったのに対し1990年には250人となり、著しく減少しているのがわかる。人口の減少に伴い高齢化も進んでいった。こうした状況に対し、1990年には宇生賀中央において「明日の宇生賀を考える会」が発足され、その見直しと再生の方向の検討を始められた。1996年圃場整備の話が進む中、組合的な組織の必要を認識し任意組合「宇生賀農業生産組合」が設立された。さらに翌年の1997年には、地域営農体制の検討が進められ、農事組合法人「うもれ木の郷」（以下、うもれ木の郷）が設立、登記された。法人の設立と同時に、組合員世帯の女性で組織するグループ「四つ葉サークル」も結成された。このグループは法人事業への協力を行うとともに、野菜や花等の生産、特産品の加工、地域の環境整備、及び消費者との交流業務を担っている。

宇生賀に活力をもたらす他の施策として、うもれ木の郷のブランド米消費者との交流会である「収穫祭」が1999年から2009年まで開催されている。しかしそのイベントへの参加人数は年々減少していった。さらにイベントの準備・実施など運営側の負担は大きい割に、地域振興に関する実感を地域は得ることができず、イベントに対する疲弊感ばかりが進行し、「収穫祭」は以降開催されていない。この「収穫祭」に代わる地域振興施策の一つとして大学生との交流方法を模索することとなった。

2.3 山口大学生との草引き交流会

2010年に山口大学教員であった辰己は、山口県阿武町において国際協力事業による交流が受入側である阿武町の地域の振興に与える影響を検討する（辰己 2009）など、これまでに阿武町や宇生賀中央（うもれ木の郷）と深い関係を築いていた。

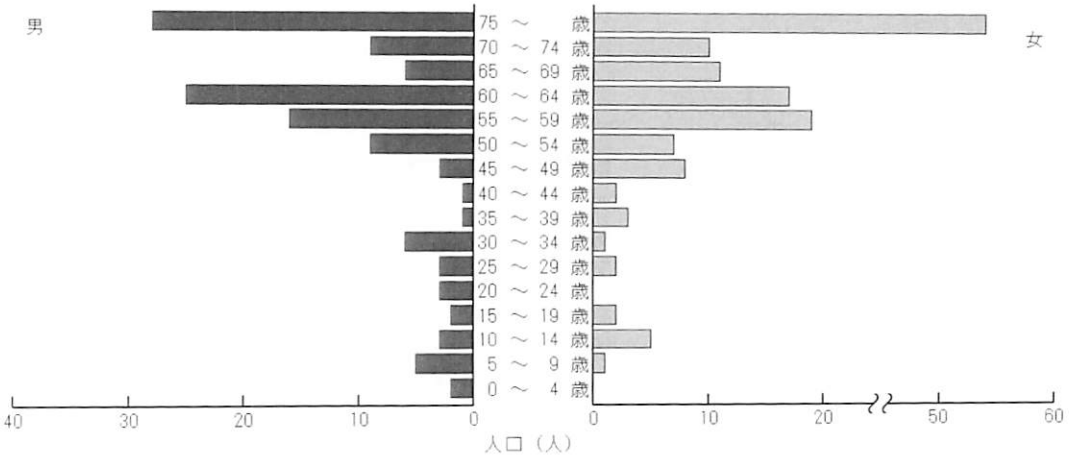


図2 2010年度山口県阿武郡阿武町宇生賀の人口ピラミッド（総務省 2014）

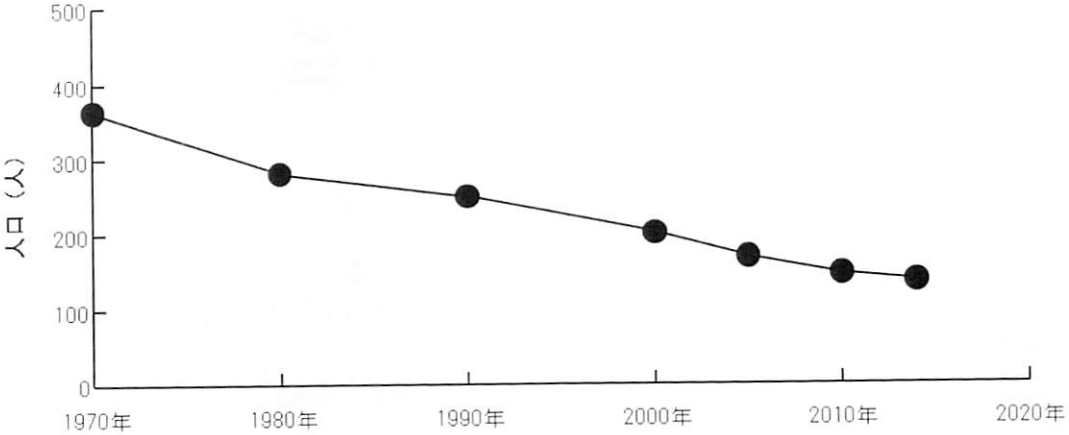


図3 宇生賀中央における人口推移（阿武町役場調べ）

この関係の中からうもれ木の郷より山口大学生との交流に関する相談を受けていた。辻は山口大学の学生の課外活動支援部署である自主活動ルームに深く関与するとともに(辰己ら 2006、辻 2010)、阿武町で開催される農業祭である「福賀大農業祭り」に数年にわたり学生を引率・参加していた。さらに辻は山口大学剣道部の部長も行っていることもあり、辰己・辻を通じてうもれ木の郷と山口大学剣道部との接続が始まった。

地域(うもれ木の郷)、大学(山口大学)、学生(剣道部)の3者による打ち合わせが何度も行われる中、うもれ木の郷の労働力不足および宇生賀活性というニーズ、剣道部の部活動費および学生の地域振興に対する興味というニーズの両者を大学がマッチングし(辻 2014)、2012年より6月に「うもれ木の郷と山口大学剣道部との草引き交流会(以下、交流会)」が実施されることとなった。

交流会の特徴は、水田内のヒエをはじめとする雑草を素手により除草する「農作業」が計8時間あること、地域住民と学生との「懇親会」が催されること、うもれ木の郷組合員宅へ「民泊」することの3点である。この3点は打ち合わせを通じて地域からの明確になっていた要望であった。また2013年の交流会の開催より、「うもれ木の郷(宇生賀)の活性につながる学生企画」の立案・実施が地域より学生に求められた。その要望に対して、2013年には「地域散策」と「豆腐レシピ作成」、2014年には「宇生賀活性プラン発表と検討会」が行われた。

3. 交流会の活動内容と成果

3.1 地域からの明確なニーズが示されたとき

●農作業(除草作業)

うもれ木の郷は、法人運営の維持・発展に対する主要商品の一つとして「エコやまぐち 100」で認証を受けるブランド米「うもれ木の郷コシヒカリ」を栽培・販売している。「エコやまぐち 100」とは、「県内で生産される農産物のうち、化学農薬や化学肥料を全く使用しないで生産された農産物及びそれらを主原料とした農産加工品を認証する山口県独自の制度」である。すなわち、このブランド米を育成する水田では、農薬による除草を行うことができない。一方で上述のようにうもれ木の郷は高齢化がすすんでおり、労働力不足が問題となっている。この労働力を補うことが剣道部に求められたニーズである。

剣道部員は、大学生であるから当然若く、また日頃の部活動を通じて体力の増進を図っている。これまでに交流会に参加した剣道部員は本格的な農作業を経験した者はおらず、個人の除草作業効率は、地域の熟練者と比べて明らかに低い。しかし、約30名という人数が除草作業の未熟度を補い、8時間の農作業時間で、「エコやまぐち 100」の米を栽培している水田の半分以上の除草を毎年終了させている。すなわち地域からのニーズに十分応えていると言ってよいだろう。

●懇親会

宇生賀中央における人口減少および高齢化に伴い、例えば、地域において若く大きな声が飛び交う機会はほとんどない。大学生が持つ「若さ」の雰囲気は、地域に波及しその地域における「生きる活力」に影響を及ぼすことが期待できる。また宇生賀中央は四方を山に囲まれる閉鎖された空間であり、自分達が栽培・販売している農産物消費者としての若者の感想を直接的に聞く機会はほとんどない。こうした若者の「活力」や「感想」に触れることが懇親会開催の目的である。

懇親会場は毎年常に大きな声と笑いに包まれている。大きな声を出しているのは、大学生だけでなく、うもれ木の郷の人達もそうである。懇親会の終了時には山口大学剣道部の歌を全員で肩を組み歌うことになっている。当然、うもれ木の郷の人達はその歌詞やメロディーを知っているわけではないが、非常に楽しげである。また大学生の食欲は圧巻である。運動部であることもその要因であろうが、配膳されている食材はほとんどすべて

図4 交流会における農作業風景

図5 交流会での懇親会会場風景

食べつくしてしまう。男子部員同士の会話の中では、「料理が美味しい！おむすびが特に美味しい！10 個食べたぞ！」、「俺は 15 個だ」と味の感想に加えて、食べる量を競う内容が飛び交い、うもれ木の郷の人達を喜ばせている。こうした懇親会の状況は、うもれ木の郷が望んでいた光景であることは、その会場の住民の雰囲気からだけでも十分にくみ取ることができる。

●民泊

宇生賀中央に宿泊施設が無いことも民泊を実施する理由の一つではあるが、最も大きな目的は、家族と剣道部員数名という小さなコミュニティーを形成して、より深い親睦をとることにある。

交流会終了後の帰学用バスに乗り込む学生を涙しながら送る家族があったり、翌年度の交流会で「久しぶり、1 年見ないうちに大人になったね」と声をかける家族もあったりした。家族と剣道部員との間でかなり親密な関係が、民泊を通して築かれている証であろう。

図 6　学生との別れを惜しむ家族

3.2　地域からの漠然とした要望のとき

●地域散策

2012 年の交流会では、剣道部員は水田と懇親会場と自身の民泊先だけしか訪れることはなかった。もう少し地域全体を見てみたいという学生の要望と、学生目線による地域の魅力の発掘という目的から 2013 年にこの学生企画がたてられた。

民泊先グループを基本として剣道部員を 6 グループに分け、民泊先のホストファミリーが道案内する形式で約 1 時間地域を散策した。剣道部員はそれぞれがメモ帳と携帯電話のデジタルカメラを持って訪れた場所の気づきを記録し、散策終了後に全体会にて発表を行った。

この散策はホストファミリーによる宇生賀紹介となってしまったようである。全体会における発表においても、地域住民が気付かなかった等という魅力は特に見当たらず、地域住民からすると自分たちの知っている宇生賀の再確認であったようである。結果として、うもれ木の郷（宇生賀）の活性につながる企画とはならなかった。

●豆腐レシピ作成

ブランド米以外のうもれ木の郷の主要商品に、「うもれ木の郷のとうふ」がある。法人で栽培する大豆「サチユタカ」と天然にがりを使った「四つ葉サークル」による手づくり豆腐である。この豆腐の美味しくなる調理方法を考え、その豆腐料理を通して宇生賀の魅力を多くの人に伝えようという企画である。

交流会の開催前に 8 つのグループがそれぞれにレシピを考え、図 7 のような作り方イラストを作成した。発表されたレシピは、ロールキャベツや豆腐コロッケなどであった。発表は地域散策結果発表後の全体会において、プロジェクターでイラストを投影しながら行われた。

学生らしい可愛いらしいイラストが入った手書きのプレゼンテーションに対して、発表会は和やかな雰囲気に包まれていた。しかしレシピは非常に一般的なもので、「うもれ木の郷のとうふ」を使わなくてもできるものであった。ここで紹介されたロールキャベツは 2014 年の懇親会のメニューに採用されたが、すべてのメニューは地域外に対して発表されてはいない。結果として、うもれ木の郷（宇生賀）の活性に直接的につながる企画とはならなかった。

図 7　紹介された豆腐レシピの一例

●宇生賀活性プラン発表と検討会

2014 年の交流会の学生企画では、学生が宇生賀活性に関するプランニングを行い、その発表と地域住民との検討・討論会が開催された。プランニングには特徴がでるように、剣道部員は所属学部でグループ分けを行った。交流会の開催前に、それぞれのグループでは宇生賀の現状把握、課題抽出を通じて課題解決方法について検討し、プレゼンテーションファイルを作成した。交流会 2 日目の午後に、各グループがそれぞれ 10 分程度で発表を行い、発表を聞いた地域住民は自身の興味のあ

るグループを決め、剣道部員と地域住民によるグループディスカッションが開催された。

発表されたプランは、交流プログラムの開発、ブランド商品の開発、IT 活用など 5 つであった。現状分析には具体的な数値や事例が用いられるなど十分に説得力のある内容であり、5 つのグループディスカッションは活発になっていた。しかし学生から出された具体的プランは、すでにある程度宇生賀において検討・実施されているものであったり、実現するにあたっての障害が大きいものであったりした。これらの問題点はグループディスカッションで地域住民より厳しく指摘されていた。宇生賀中央の活性化を地域住民が考える良い機会とはなったが、この学生プランが宇生賀の活性化に直接的につながるものではなかった。

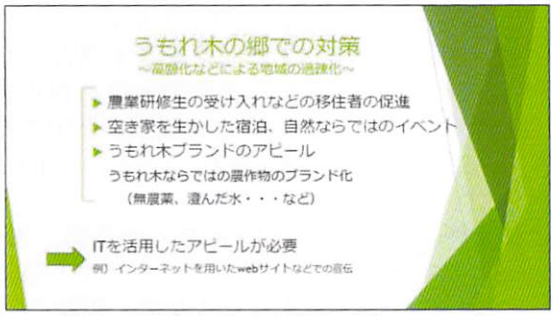


図 8　紹介された活性プランの一例

4．まとめ

上記に示すように、本交流会では地域からの明確なニーズが示されたプログラム内容に対しては十分な成果があがり、地域として満足のいく結果が生じている。一方で、漠然とした要望に対しては、地域が十分に満足いくような成果を学生は出すことは出来なかったと言える。その地域に何度も訪問し、地域住民から直接的に聞き取り調査をしながら具体的な課題を発見し、地域と協働しながら課題解決方法を模索していれば、漠然とした要望に対してもより高度な課題解決プランを提示できていたかもしれない。実際にそのようにして地域振興に深く携わっている学生が全国には多数存在する。しかし本交流会の剣道部員は学業に加えて部活動を行っているため、そこまで深く地域振興に携わっていなかった。

課題解決は、課題の発見も含め、それにどれくらいの時間をかけるかが最も大事である。地域にとってその地域の振興は、自身の生活の場であるから非常に大事な事項の一つである。一方で学生にとって最も大事な事項は、自身が学生であること、言い換えれば卒業に向けた単位を定められた年限において取得することであろう。すなわち、地域住民からすれば地域振興には十分な時間をかける必要があると考える一方で、学生からすれば卒業に向けての単位履修に最も時間を利用すべきと考えるということになる。この時間利用の概念において地域振興を望む地域住民と学生との間にギャップがある。

山口大学のボランティア情報提供も担っている学生自主活動ルームには、毎年様々な情報が寄せられる。その中には、地域振興に関するかなり漠然とした要望によるボランティア募集の依頼もある。「地域を活性化させたいので学生ボランティアを募って欲しい、ボランティア業務内容はその学生自身に考えてもらいたい」といった具合である。このような漠然としたボランティア業務内容に関する依頼は山口大学では受け付けないこととしている。こうした募集依頼の背景には、上記の時間利用概念のギャップに加えて、メディアによる情報も関係していることが考えられる。学生による地域振興に関する事例が数多く取り上げられ、さも学生の自由な発想力が地域を変革させるように報道されている。仮に学生の発想力で地域が大きく変わるならば、学生は社会で通用する有能な、例えばイベントプランナーであり、そうした副業を持つ学生も数多くいてもおかしくないだろう。しかし学生には社会人基礎力の向上が求められ、奨学金の貸与者は全体の約 30%という状況である（平成 19 年度学生数 2,828,708 人、同年度奨学生数 857,295 人、総務省 2007、日本学生支援機構 2008）。学生の能力に関しても、地域住民のイメージと学生の実態との間にギャップが生じているように思われる。

こうしたギャップを地域が認識し、まず地域が十分に時間をかけ、社会人が地域振興策について十分に検討する必要があるだろう。その検討結果による明確な地域のニーズの一部を学生に委ね、そこに学生のアイデアが少し加味されることで地域振興は前進すると思われる。漠然としたニーズ全てを学生に委ねても本事例のように地域住民が十分満足いくような成果が出ないという可能性を十分に含んでいる。それだけでなく「地域が学生を利用している」と判断されかねない危険性も生じるであろう。

バブル景気以降、大学生の就職状況は「就職氷河期」と呼ばれ、2006 年から数年間一時的に雇用の回復はみられたものの、リーマンショック以降また就職が厳しい状況である。厳選採用の流れは現在も変わらず、いわゆる「社会人基礎力（経済産業省 2006）」の高さが大学生に求められている。この社会人基礎力の高さを、ボランティア活動や社会貢献活動への参加と誤解している学生が少なくない。例えば東京工芸大学（2013）によると、調査対象学生の 4 年生 200 名のうち 24.5%が「ボ

ランティア活動に注力した」と回答している。さらにボランティア活動を始めた動機として3割が「就職活動に役立ちそう」と回答している。この数字をすべての大学生に当てはめることには無理があるが、「就職活動のためにボランティアをする」という傾向が全国の大学生にあることは否定できない。社会人基礎力の向上はキャリア形成であり、それは計画・実行・振り返り・発見といった繰り返し、いわゆるPDCAサイクルのスパイラルアップによる成果である。企業が採用面接においてボランティア活動や社会貢献活動に関する質問に対して求める回答も、どのようなスパイラルを描いたのかであって、決して活動に関する経験談ではない。社会貢献活動として地域振興に携わったのならば、地域がどのようなニーズを持っているのかを感じ、そのニーズへの回答を模索していかなければ、その活動は学生にとってほとんどキャリア形成にはつながらないだろう。ただ参加しているだけでは「学生が地域を利用している」と地域（住民）から判断されるとともに、地域としては「招かざる客」以外の何者でもない。

2014年9月、内閣官房に「まち・ひと・しごと創生本部」が設立されたことからもわかるように、地域振興は国の重要な課題の一つである。地域自身による努力と学生の助力が相互作用し、互いが利用するのではなく、地域活性と学生のキャリア形成という「Win－Win関係」の構築により地域振興はすすんでいくものと思われる。

謝辞：

交流会の実施に関して、農事組合法人「うもれ木の郷」の山本勉生組合長、田中敏雄事務局長、黒川恵子事務局員、および「四つ葉サークル」の原スミ子代表をはじめ、宇生賀在住の皆様にはご理解およびご協力いただきました。また、中村秀明町長をはじめとする阿武町役場、JAあぶらんど萩、山口県萩農林事務所、山口大学地域連携センターからも多大なご協力を頂きました。本稿に示される宇生賀中央の人口データの収集に関しては、阿武町役場総務課の石田雄一様をはじめとした阿武町役場の皆様に大変お世話になりました。皆様に感謝の意を表します。

参考文献：

亀岡市，「亀岡カーボンマイナスプロジェクト」，http://www.6minus.jp/（2015年1月12日閲覧）.

経済産業省，2006，「社会人基礎力に関する研究会～中間とりまとめ～」.

文部科学省，2000，「大学における学生生活の充実方策について（報告）～学生の立場に立った大学づくりを目指して～」.

文部科学省，2014，「平成25年度地（知）の拠点整備事業」.

日本学生支援機構，2008，「平成19年度奨学事業に関する実態調査の結果」.

農林水産省，2014，「魅力ある農山漁村づくりに向けて～都市と農山漁村を人々が行き交う「田園回帰」の実現～（活力ある農山漁村づくり検討会中間取りまとめ）」.

総務省，2007，「平成19年度学校基本調査」.

総務省，2014，「平成22年国勢調査最終報告書」.

辰己佳寿子，2009，「山口県の地域振興と国際協力(2)－阿武町の国際協力…いなかを知る－」，『大学教育』6，157–176.

辰己佳寿子・吉田香奈・門脇薫・辻多聞，2006，「学生の「ボランティア」に関する意識と大学の支援体制－山口大学の現状と課題－」，『大学教育』3，209-219.

東京工芸大学，2013，「イマドキのキャンパスライフに関する調査」.

辻多聞，2010，「学生の自主的な活動支援部署の設立時の考慮事項－山口大学学生自主活動ルーム設立の事例をもとに－」，『大学教育』7，47-56.

辻多聞，2014，「世代をこえた相互啓発による地域社会への影響」，『第5回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議報告書』5，14-20.

氏原学，2013，「中山間地域の商品化の試みとその狙い－高知県大豊町の事例－」，『第4回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議報告書』4，18-21.

YAMAGUCHI UNIVERSITY ①

第6回文化と歴史そして生態を重視した
もうひとつの草の根の農村開発に関する国際会議in美山町
2014年11月15日

地域振興における学生ボランティアの役割

—山口県阿武町での交流事業の事例に基づいて—

Role of the student volunteer in the local promotion

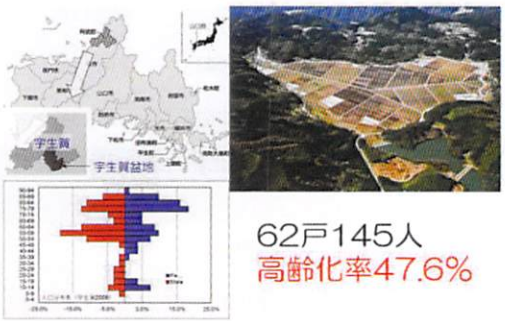
based on an example of the exchange activity in Abu-cho, Yamaguchi prefecture, Japan

辻　多聞 Tsuji Tamon・天野　原 Amano Gen
（山口大学 Yamaguchi University）

YAMAGUCHI UNIVERSITY

●山口県阿武町宇生賀 ②

Ubuga Abu-cho, Yamaguchi prefecture, Japan



62戸145人
高齢化率47.6%

●宇生賀の挑戦 ③

Challenge in Ubuga

1997
農事組合法人「うもれ木の郷」設立
四つ葉サークル結成（女性組織）

1999-2009
「収穫祭」（うもれ木米の消費者対象とした交流事業）
参加者が減少と住民のイベント疲れ

2012
剣道部との草引き交流会

●草引き交流会概要 ④

Outline of the Exchange Activity

- 2012年6月に第1回目を実施
  毎年1回6月に実施，2014年に第3回目を実施
- 基本プログラム
  除草作業一計約8時間（初日午前と午後，2日目午前）
  地域住民との懇親会（初日の夕食）
  地域住民宅での民泊（1家庭に4名程度）
- 年度固有プログラム
  地域活性を議題とした集団討論会
  地域活性のための学生によるアイデア発表会
- その他交流
  うもれ木の郷からのスイカ差し入れ，
  剣道試合結果報告，福賀農業祭ボランティアなど

●草引き交流会関係団体 ⑤

Organization of the Exchange Activity

- 農事組合法人「うもれ木の郷」
  1997年設立（1990年検討開始，1996年任意組合設立）
  農家数73戸，組合員数115名（2001年）
  経営面積85ha（水稲64.4ha(75.8%)，ダイズ・スイカ・ホウレンソウ等）
- 山口大学剣道部
  1949年設立
  部員数50名（男子39名，女子11名，2014年）
- その他
  阿武町役場，山口県萩農林事務所，
  山口大学地域連携推進センター

●草引き交流会 ⑥

Pictures of the Exchange Activity

●活動内容と成果 ⑦

Contents of the Exchange Activity and Results

- 除草作業
  対象地域8ha中5ha終了
- 懇親会
  会話が途切れない，剣道部歌合唱
- 民泊
  交流会終了時に涙

地域の明確なニーズがあるとき「成功」

●活動内容と成果 ⑧

Contents of the Exchange Activity and Results

①地域散策（2013実施）

②豆腐レシピ作成（2013実施）

③活性プラン発表（2014実施）

⑨

●活動内容と成果
Contents of the Exchange Activity and Results

①地域散策（2013実施）

目的：学生目線で宇生賀地域の
観光地としての
新たな魅力を発見する

結果：住民による地域案内に終わる

紙芝居の作成へ？

⑩

●活動内容と成果
Contents of the Exchange Activity and Results

②豆腐レシピ作成（2013実施）

目的：「うもれ木の郷」豆腐を用いた
レシピを作成して
他に発信できるような
宇生賀の魅力を考える

⑪

●活動内容と成果
Contents of the Exchange Activity and Results

②豆腐レシピ作成（2013実施）

結果：豆腐の良さを引き出せてない

紹介されたレシピはなし

2014の夕食のメニュー

⑫

●活動内容と成果
Contents of the Exchange Activity and Results

③活性プラン発表（2014実施）

目的：「うもれ木の郷」（宇生賀）の
課題を発見して，それを解決
する具体的な案を提示する

⑬

●活動内容と成果
Contents of the Exchange Activity and Results

③活性プラン発表（2014実施）

結果：驚くようなアイデアは少ない

十分に練れていない

具体性に乏しい

⑭

●活動内容と成果
Contents of the Exchange Activity and Results

①地域散策（2013実施）　いまいち

②豆腐レシピ作成（2013実施）　いまいち

③活性プラン発表（2014実施）　いまいち

地域の明確なニーズがないとき
「成功とはいえない」

学生への期待だけでは大きな変化はない

⑮

●情勢
State of Affairs for Student Volunteer

- 課外活動によるキャリア形成
  溝上慎一，2009，「『大学生活の過ごし方』から見た学生の学びと成長の検討」『京都大学高等教育研究』15.
  辻多聞，2009，「おもしろプロジェクトによる学びの成果と今後の課題」『大学教育』6.
- 学生参画による地域活性
  辻多聞，2014，「世代をこえた相互啓発による地域社会への影響」『第5回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議報告書』5.
  氏原学，2013，「中山間地域の商品化の試みとその狙い－高知県大豊町の事例」『第4回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議報告書』4.

⑯

●課題
Issues for Student Volunteer

①課外活動に地域が利用される可能性
お客様の学生，地域での学生対応疲れ（イベント疲れ）

②学生が地域振興に利用される可能性
山口大学自主活動ルームにて学生労働力の要求

形骸化のおそれ

Ｗｉｎ－Ｗｉｎ関係の構築に向けて
地域はニーズを学生に対して明確に示す

大学の社会貢献を考える
A University's Contribution to its Local Society

天野　原（山口大学地域連携推進センター）
Amano Gen (Yamaguchi University, The Center for Promotion Community Partnerships)

Abstract
A description of findings from various case studies by local government officer who participated in "The 6th International Meeting on an Alternative Grass-root Rural Development with Thinking as Important in Culture and History and Ecology in Miyama." Also, it is a study in the way people relate to their regional universities and college students, charting the emphasis on aspects of education, research and planning proposals and auxiliary supplement. I want to assess how contributions to society is one of the responsibilities of the university.

1．はじめに

私は、山口市役所（以下「山口市」）から国立大学法人山口大学（以下「山口大学」）地域連携推進センターに研修派遣職員として出向している。山口大学と県内自治体の連携を進展させることを目標に、2014 年 4 月から 2016 年 3 月末までの間、地域連携コーディネーターとして勤務することになっている。行政職員としての経験が、大学の中でどのように活かせるかを模索しながら、まずは、包括的連携自治体と一緒に、山口大学が教育研究活動で培ったシーズを地域のニーズと連結させ、地域課題の解決につなげる具体的な仕組みづくりを進めたいと思っている。

このたび、JSPS 科研費(26301028)の支援を受け、2014 年 11 月 15 日から 17 日に開催された『第 6 回　文化と歴史そして生態を重視したもうひとつの草の根の農村開発に関する国際会議 in 美山町』に参加した。第 2 章では国際会議の事例発表に対する所見を述べ、第 3 章では、それらを踏まえたうえでの、大学の社会貢献パターンについて私なりの考えを整理した。

山口大学の風景(写真提供:山口大学地域連携センター)

山口市内を走る SL やまぐち号（写真提供：山口大学地域連携センター）

2．国際会議の事例発表に対する所見

途中参加となったセッション 1「海外の事例紹介」では、ラオスの事例発表を聞くことが出来た。京都大学東南アジア研究所の「文化資料館設立プロジェクト」の対象地域は、1988 年に 10 世帯で森林を切り開き始まった村（人口規模は 561 人：97 世帯）で、大多数を占める 2 つの民族とその他の少数民族が一緒に居住している。文化資料館設立の目的は「文化を通じた村の振興」との発表であったが、丁寧なコンサルティングによる村づくりへの支援が印象的であった。文化資料館には、農機具及び生活に関するものを展示予定であったが、戦争から逃れ、水田を求めながら転々と村を移してきた経緯もあり、収集するべき資料を村人は持っていなかった。国民の置かれている立場が日本とは大きく異なることを認識させられたが、森を切り開き、田を広げ、ルールを決め、自分たちで地域の自治システムを 1 から作り上げる過程が、地域自治の原点をみるようで大変興味深かった。その後の総合討論では、外国の方から「日本人の考える田舎と都市の違いは何なのか？」との問いが提起された。この問いが東南アジアと日本の原状を結びつけるキーワードとなり、視点を切り替えた議論を行うことができた。東南アジアの田舎では、教育・福祉は最低限補償されているが道路、上下水道、電気などインフラが未整備。一方でインフラが隅々まで整備された日本は一見し

て田舎には見えないが、人口減少により病院や小学校などの教育・福祉施設が消滅することで少子化が更に深刻になっている原状を再認識することができた。

セッション2「学生ボランティアの活動と学び」では、高知大学、京都ボランティア学習実践研究会、山口大学の順に農村におけるボランティア活動や交流事業の事例発表が行われた。事業に関わっている学生からの発表もあり、農村との関わりの中で学生が感じている思いが伝わってきた。高知大学は文科省ＣＯＣにも採択され、県内4地区

山口大学と阿武町の草引き交流（筆者撮影）

山口大学生とホームステイ先の皆さん（筆者撮影）

にコーディネーターを配置し、地域課題を吸い上げるシステムを作られていた。更に、平成27年4月からは新学部として「地域協働学部」を設けるなど、地域連携を大学として本気で取り組もうとする状況を確認できた。京都ボランティア学習実践研究会は、ワークキャンプという名称で京阪神19大学から学生が参加し、美山町で活動を行っているとの報告があった。また、作業の中どのような学びがあったかを学生同士で振り返る時間をしっかりとっており、理想的な学びの場を確立していると感じた。

山口大学と阿武町の草引き交流の発表では、過去3回の中でオプションとして行われたフィールドワーク、特産品を使ったレシピづくり、地域振興アイデア発表の事例を紹介し、取り立てて成果は得られなかったとの見解を示した。山口大学と他大学を比較して感じたのは、学生の学びの場として適切な設定がされていれば、学生自身がイキイキと活動するのだということであった。大学が教育・研究を通じた地域貢献を行う中で、教員は研究対象として、学生は学びの場として中山間地域の農村に入っていくスタイルは、今後も増えていくと思われる。

セッション3「美山町知井地区の現状と活動・見学」では、美山町知井地区（芦生→佐々里→北）を回り、関連施設見学と事業概要の説明を受けた。歴史を感じる森林、地元産の食材を使った加工品の数々、国指定の茅葺き屋根の集落群など美山町の豊かな地域資源をうらやましく感じた。美山町は、平成18年に周辺4町と合併して南丹市となっているが、町時代にグリーンツーリズムや6次産業化にいち早く取り組まれており、都市との交流を推進するための布石を打っていたことが分かった。

セッション4「地域の活性プログラム」では、山口県阿武町宇生賀、高知県大豊町怒田、京都府亀岡市保津町の順に事例発表があった。阿武町宇生賀では、農事法人「うもれ木の郷」女性グループが山口県農林事務所と作成した「地域資源お宝マップ」と「将来構想夢マップ」にある「七不思議」について、紙芝居を作成する取り組みが報告された。また、この取り組みを通じた世代交代を意識されているなどグループの積極性を感じるものであった。大豊町怒田では、集落における居住者の年齢構成、水田耕作状況、高齢化率、近隣集落との関係性をグラフで示された。地域の将来を考える上では、具体的な数字をあげ、数年後にはどのようなことが想定されるかを考えることが大切であるが、住民自ら数値化を行えることは素晴らしいと感じた。また、これらの数値化や地域分析作業を担うことも、大学生の地域貢献の一つになり得るのではと思った。亀岡市保津町では、地域の地理的特性を活かしたプランが作成されており、その中で行われている市民農園について報告があった。自治会と大学が密接に関わった地域づくりが印象的で、都市型農業の可能性を感じることが出来た。休憩の後、美山町知井地区にある有限会社かやぶきの里、芦生なめこ生産組合、自然文化村、知井振興会の順に事例発表があった。ひとつの地域にこれだけの関連団体があることが稀であり、それぞれが地域振興のために知恵を絞っていることが分かった。特に知井振興会が行っている取り組みは、山口市が行っている「協働によるまちづくり」の中で地域が対応している課題と

同様であった。自然文化村の方が「人口を 1,000 人増やすために 35 億円の経済活動を考えたい。」と発言されたが、人口増に課題解決策を見出すのは、すでに日本全国で破綻している従来型の振興施策であるため、知井地区の将来計画を住民が共有しながら各事業を見直す「合意形成の場」が必要であると感じた。

様々な事例を聞き、意見交換を行えるこの会議に参加できたことは、非常に有意義であった。特に、中山間地域で大学や学生が与える効果について、イメージを変えることが出来た。この度の参加に対してご尽力を賜った福岡大学経済学部辰己佳寿子教授に改めて感謝申し上げると共に、多く方から頂いた知見を今後の業務に活かしていきたいと思う。次の章では、「大学の社会貢献」に対する私の見解を述べたい。

3．大学の社会貢献パターン

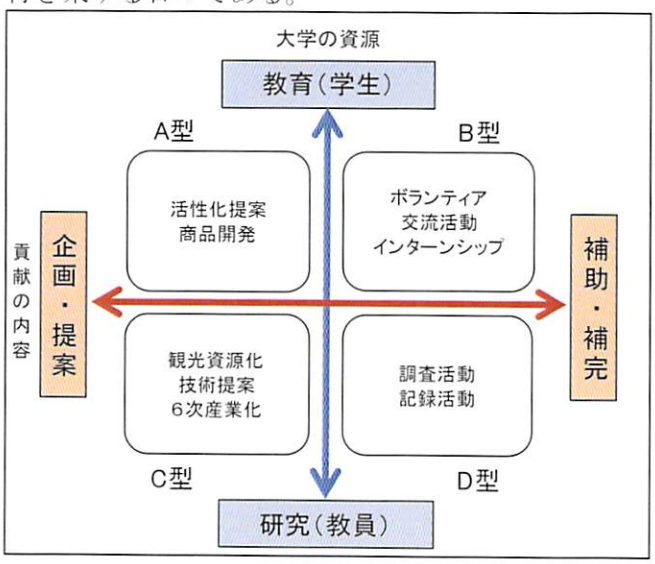
大学の教育研究を基礎とした「社会貢献」は、平成 18 年の教育基本法の改正により明文化された。平成 25 年度から文部科学省は「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」を全国の大学から公募選定し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援することで、地域課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることとしている。地域のニーズを踏まえた教育研究を行い社会の発展に貢献し、戦後日本が辿ってきた成長モデルの転換を図るイノベーションの創出を大学に求めている。ここで述べられているイノベーションは「技術革新」ではなく、「社会的に意義のある新しい価値創造による自発的な社会変革」を意味すると解釈される。大学の教育研究がイノベーションの源泉であることは疑う余地はない。

右図は、大学の社会貢献のパターンを分類したものである。イノベーションが最も起きやすいと考えられるのは研究に基づくアイデアを企画提案する C 型であり、次いで教育の過程で企画提案される A 型であると考えられる。また、意図的なイノベーションが起きることは期待出来ないが、少子高齢化により疲弊した地域における労働力・サービス・機能を補助補完する B 型、D 型も重要な社会貢献であるといえる。

大学が社会貢献のために、地域へ入っていく場合には地域のニーズを把握し、適切なマッチングを行う必要がある。そのためには、大学側はどの社会貢献パターンで事業を行おうとしているのかを認識し、大学を受け入れる地域に対し、イノベーションを起こすことを意図しているのか、又は学生の学びを目的としているのかを十分に説明する必要がある。中山間地域の限界集落においては、若年人口の減少により不足している労働力の補助・補完を大学に望む傾向が見られることから、補助補完 B 型が良いといえる。山口大学剣道部と山口県阿武町宇生賀との草引き交流事業は、典型的な B 型事業である。このような地域では、イノベーションを起こそうとする大学よりも、ボランティアや交流活動を中心とする大学との相性が良いことから、大きな矛盾もなく何年間も事業が継続する可能性がある。

ここで様々な疑問が浮かんでくる。地域がニーズを明示しないからといって限界集落にイノベーションが必要ないのであろうか？学生による労働力の補助補完が大学の本来的な役割なのであろうか？何年間も事業を継続している間に限界集落が消滅してしまうのではないだろうか？

できることなら、社会的に意義のある新しい価値観を企画提案し、大学がイノベーション創出の中心となってほしいと感じるのは私だけではないはずである。大学から提案された新しい価値観に基づくアクションを地域住民や自治体が起こし、閉塞感を打破する仕組みづくりが必要である。そのようなことを考えながら、大学と自治体の間を行き来する日々である。



図「大学の社会貢献パターン」 出所（著者作成）

＜参考文献＞

文部科学省、2013、『平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業」パンフレット』事業概要
高知大学、2014、『高知大学 KICS ホームページ』COC 事業の概要、http://www.kochi-coc.jp/
黒川清、2008、『イノベーション思考法（PHP 新書）』
山内祐平・森玲奈・安斎勇樹、2013、『ワークショップデザイン論－創ることで学ぶ（慶應義塾大学出版会）』
山崎亮、2012、『コミュニティデザインの時代－自分たちで「まち」をつくる（中公新書）』

第３部　地域の活性プログラム

南丹市美山町知井地区の（有）村おこしセンター知井の里　ショップ２１

集落点検を踏まえた女性の活動－文化伝承を目的とした紙芝居づくり－

Women's Activities through Participatory Rural Appraisal in Ubuka, Abu-cho, Yamaguchi Prefecture, Japan - With Emphasis on the Preservation of Local Folk Tales

辰己　佳寿子（福岡大学経済学部）
西村　美和（山口県萩農林事務所）
Kazuko Tatsumi (Fukuoka University, Faculty of Economics)
Miwa Nishimura (Yamaguchi Prefecture, Hagi Agriculture & Forestry Office)

Abstract

The Agricultural Cooperation (Umoregi-no-sato) in Ubuka community in the north western area of Yamaguchi was established in February, 1997 for the sustainable rural development of the community. With the establishment of the Umoregi-no-Sato, production is moving forward. However, there still exists issues related to the creation of a strong community. To address these issues, the Yotsuba circle was established in August, 1997 to combine the strength and refined touch of women in the area to promote the formation of a strong community.

This women's group could identify some problems and make their action plan to improve their livelihood through the Participatory Rural Appraisal in 1998. They held a mutual exchange of appreciation program between themselves and their buyers from 1999 to 2009. They tried starting to make Tofu with their own beans from 2001 and sell it in the market from 2005. The mutual exchange program with students of the Kendo Club in Yamaguchi University was started from 2012. Now they are taking up a new challenge for the preservation of local legends through storytelling and with the aid of picture boards.

1．はじめに

「稲刈の　夫に手渡す　握り飯」

この俳句は、阿武町宇生賀・農事組合法人うもれ木の郷の女性グループ・四つ葉サークルの語り部の大倉淑子さんが詠んだものである（2002年度NHK全国俳句大会入選作品）。

この光景が目に浮かぶだろうか。その日の作業を考えて握り飯が食べやすいと判断し、塩味を加減しながら食べやすいサイズに握り、夫の疲れ具合やお腹のすき具合を作業のタイミングを見計らって、つれあいに声かけ、手をのばして渡そうとしているのである。

この俳句に描かれているように、阿武町宇生賀の女性たちは、特別に目立つ活動を行うというよりも、その場の状況で自身の役割を認識し、老若男女問わず助け合うことを基軸として、地道な活動を行ってきた。地道な活動を積み重ねていくなかで、信頼を築き、絆を深め、地域を陰ながら支えてきた。

阿武町では、2011年8月1日から3日、「文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議」が開催された。二日目の「宇生賀から『むら』を考える」というテーマのセッションにおいて、四つ葉サークルは、「四つ葉サークルの15年」という報告を行った。

あれから3年、四つ葉サークルに新しい動きがみられた。環境美化運動、米の消費者との交流事業、地産池消の豆腐づくりという経済活動を経た女性たちが次に挑戦したのは、地域の文化を伝承するための紙芝居づくりであった。

2．四つ葉サークルの集落点検を踏まえた活動

1997年2月、阿武町宇生賀に、山口県初の特定農業法人「うもれ木の郷」が設立した。法人の設立で営農面が安定し、大型機械化により余剰労力が見られるようなったため、女性たちには何かしなくてはという思いが芽生え始めた。そこで、女性集会を開き、女性の細やかな感性を活かし、地域づくりをしていこう、そのためにまずグループをつくろうという意見があがり、同年8月に「四つ葉サークル」を結成した。活動の柱は「生産」、「加工」、「環境」、「交流」であった。

最初に四つ葉サークルが着手したのは集落点検である。集落点検とは、集落の現況と、集落をこのまま放置しておいたら10年後にはどうなるかという予測を、各世帯の聞き取りをもとに作成し、そのうえで集落が10年後どうありたいかという構想を立てる活動である（農文協 1999）。この点検から得られた情報は、暮らしを熟知している女性たちの経験知や暗黙知が含まれている。つまり、生きた空間として集落を捉えることができるという特徴をもっている。

1998年度から3年間、山口県農山漁村快適環境創造活動促進事業を通して、宇生賀では、四つ葉サークルを中心に「くらしの創造委員会」が組織され、地域住民による、住みよい魅力ある地域づくりに関する話し合いが行われた。そして、宇生賀の全世帯の女性が参加し、男性や地区外の人も参加して、宇生賀のよさを見直す目的で、自然や人材、農産物、伝承文化、安全性などを点検した。

この点検結果が「お宝マップ」である。ここには、花づくり名人、漬物名人、わら細工名人等が

描かれており、宇生賀に伝わる「宇生賀の七不思議」が改めて認識され、語り部の素材となった。

この点検結果を踏まえて、将来の夢を地図に描く「夢マップ」が作成された。具体的な課題を図式化することで活動の焦点が絞られた。法人の「うもれ木の郷」と協力して集落の中心に公園が設置された。行政の協力を得て、街灯や上下水道も完備された。宇生賀に古くから祀られている多くの神様や仏様の大掃除を行い、かつて行われていた「五社詣」を復活させた。

女性たちが「宇生賀を住みよい地域にしたい」という小さな活動を続けていくうちに、「ひとつひとつの夢をかなえていく際の感動はひとしお」という声がでてくるようになり、賛同する人が、徐々に増えていった。

たとえば、環境美化活動として、花いっぱい運動を始めた頃、一部の男性からは「花は儲からん」「花をやりよったら仕事にならん」と理解されないこともあったが、視察などで外部から訪れた人々からの評価を受けたり、花いっぱい運動山口県知事特別賞を受賞（2005年）したりして、徐々に男性が手伝うようになったのである。現在は、阿武町モデル花壇や山口県花いっぱい運動モデル団体に指定されている。

3．四つ葉サークルの新しい文化活動

宇生賀の女性と男性、行政等が協力し合いながら、「夢マップ」の課題は、ほぼ9割が達成された。

このようななかでも、四つ葉サークル代表の原スミ子さんには、どうしても気になることがひとつあった。それは、「宇生賀の七不思議」である。

語り部の大倉淑子さんは、地区外からの訪問者に宇生賀の特徴として「宇生賀の七不思議」を説明する役を担っている。2010年10月に宇生賀で開催された山口大学公開講座においても、大倉さんが「宇生賀の七不思議」を受講生に説明した。

山口大学公開講座で宇生賀の七不思議を説明（2010年10日）

原さんは、今後、語り部の役をどう引き継いでいくのか、宇生賀の昔のことをどのように伝えていくのかが、具体的な活動として実行できていないことを以前から懸念していた。

この課題が大きく浮上したのは、2013年2月23日の総会であった。四つ葉サークルでは、基盤整備される前の苦労が多かった昔の農作業も記録に残して伝承したいがどのようにすればよいのか、語り部として実際に語っていただく様子を録画するなど何か残す方法はないだろうか、宇生賀の七不思議という昔話を伝えるだけでなく、昔の田作業がどんなに大変であったか、それをみんなが協力し、支え合って、今のような美田にしたかを次の世代に知ってもらうためにどのようにすればよいのか、という意見がでたのである。山口県萩農林事務所から、「紙芝居」という提案を受けたことを契機に、四つ葉サークルはすぐに実行に移した。原スミ子さんは「紙芝居という方法は思いつきませんでした。農林事務所からの提案を受けて、これだ！と思いました」と述べている。

紙芝居を紙芝居で終わらせるのではなく地域の文化活動として位置付けよう、やるのであれば本格的にやろう、との意気込みで、紙芝居の絵は、山口市在住の萩野デザインルーム代表の萩野孝次先生にお願いすることとなった。萩野先生は、「ほのぼの絵手紙」などで有名で、研修会の講師等を担当されることもある。やまぐち農山漁村女性起業統一ブランド認定品(愛称:やまみちゃん)のレベルアップ研修会では、「手書きだから個性が光る！販売用のポップづくりと売り場での魅力的な展示

方法」という研修会の講師も務めたこともあった。

8 月には、四つ葉サークル代表の原スミ子さんと副代表の西村静江さんが萩野デザインルームに出向き、紙芝居の原稿と絵の打ち合わせを行った。萩野先生の紹介で、山口市の紙芝居のボランティアグループ「じゃがいもの会」とのつながりが生まれ、紙芝居の演じ方、演出、紙芝居を通じた交流活動のお話しを聞いたり、四つ葉サークルの数名が実際の紙芝居公演を見に行ったりして、紙芝居の準備は着々と進んでいった。

萩野孝次先生が描いた紙芝居

萩野先生は、紙芝居の絵を仕上げるのにかなりの勢力をかけて取り組まれ渾身の作を完成させた。四つ葉サークルに手渡した時には「嫁に出したようで寂しい」と言われるほどであった。

萩野先生の思いが四つ葉サークルにも伝わり、準備には拍車がかかった。拍子木やハッピなどの小道具を準備したり、BGM や効果音等を組み入れたり、紙芝居の観客に理解してもらえるように読み方や演出を工夫したりした。演者たちは、本番に向けて、仕事を終えた後の夜の時間帯に何度も何度も練習を行った。

2014 年の米価格低下の影響もあり、農事組合法人「うもれ木の郷」は経済的には厳しい状況に追い込まれた。しかしながら、田中敏雄事務局長は、「法人の経営環境が厳しくなるばかりだが、そういう状況下だからこそ、地域づくりの活動や文化活動がとても重要だ。だから、紙芝居の作成費は法人から出す」との述べたのである。この背景には、見向きもされなくても、地道に活動をし、地域内外に評価をされるようになった女性たちのこれまでの実績がある。長年の女性たちの地道な活動から、男性たちは女性たちに強い信頼をもつようになり、そして今は大きな期待となっている。

宇生賀では、男性と女性がともに手を取り合って、農業を守り、地域を守ってきた。そして、今、文化を守ろうとしている。紙芝居の初披露の機会は各集会で開催することもできたが、四つ葉サークルは、「うもれ木の郷」の総会が初披露の場とするとして、断固として譲らなかった。「応援してくれた宇生賀の方々に最初に見せたい、宇生賀は家族みたいなものだから」と友廣多賀枝さんはいう。

そして、2015 年 2 月 15 日、「うもれ木の郷」の総会が開催された。最初に、原スミ子さんが、宇生賀の七不思議の紙芝居を作成した経緯、地域の高齢者から昔の農作業について基盤整備する前の苦労話を聞き取って今回の紙芝居の中に生かしたことなどの説明があった。

説明の後、拍子木が鳴って、緑のおそろいのハッピを来た若手の 4 名が登場した。4 人が演者となって、七不思議の話が展開していった。会場には、「うもれ木の郷」の関係者はもとより、中村秀明町長、萩野先生も出席され、参加者みんなが、紙芝居に見入って、初舞台は成功裏に終わった。このときのことを、萩野先生は「目頭が熱くなりました」と言っている。

「うもれ木の郷」通常総会(2015 年 2 月 15 日)

初披露された紙芝居の様子(2015 年 2 月 15 日)

萩野孝次先生（右から3番目）（2015年2月15日）

おわりに

「地域活性化」や「農村開発」には、多くの場合、経済開発が中心に位置づけられる。儲け優先の経済活動が促進され、その延長線上に「地域活性化」や「農村開発」が達成されると認識される傾向がある。費用対効果の観点から、お金にならないことは割愛されていく傾向にもある。

「うもれ木の郷」が設立した当初、多くの男性たちも経済優先の考え方であった。「儲けにならんことをしてどうするのか」という声もあったが、今では、経済的に厳しいからこそ、地域づくりの活動や文化活動が重要という認識が存在している。「稲刈の　夫に手渡す　握り飯」という言葉に表れているように、常に相手をみながら役割を縁の下の力持ちの役割を果たしてきた女性たちが、紙芝居づくりを通して一歩踏み出た時、今度は男性たちが「握り飯」を手渡す役にまわっている。

四つ葉サークルの紙芝居は、ただの紙芝居では終わらない。宇生賀の七不思議の紙芝居には、時空をこえた優しさとユーモアがある。紙芝居をつくっていく過程で、当事者たちが、昔の宇生賀の暮らしと農作業を知り、これまで以上に宇生賀が好きになり、宇生賀の将来を考えるようになった。

四つ葉サークルを立ち上げた当時に行った集落点検やお宝マップや夢マップもずいぶん年数が経りほとんどが実現している。紙芝居づくりをきっかけに、次の夢マップを描く段階にきている。

次の課題は、高齢者対策と次の担い手世代の活躍の舞台をつくることである。四つ葉サークルでは、月に2回、高齢者に豆腐を届けており、その際に、体調が悪い人はいないか、困っていることはないかなどの見守りも行っている。要介護、要支援にならないための活動を地域で取り組むために、正しい理解と対応を行うための勉強会にも参加している。

また、2015年2月15日の総会において、四つ葉サークルでは、代表1名、副代表2名の体制をとり、副代表に中原智恵子さん、友廣多賀枝さんが抜擢された。中原さんはお勤め先から退職して1年が経過したところで、友廣さんはまだお勤めをしている。これまでは、退職後や心身ともに余裕ができたメンバーが中心に活動し、お勤めをしている人は補助的な立場になる傾向があった。しかしながら、この体制では世代間のギャップが強くなる可能性が高い。今回の紙芝居づくりを通して、次の世代が早い段階から中心的に活躍できる場をつくっていく必要があるとの認識に至り、若手の副代表が誕生したのである。

「秋の空　ど真ん中です　にぎり飯」

原スミ子さんの詠んだこの俳句にあるように、老若男女が誰もが躊躇せず、宇生賀のど真ん中で、にぎり飯をほおばる光景が現実になろうとしている（2009年度NHK全国俳句大会入選作品）。

＜付記＞

本報告執筆にあたっては、原スミ子さん、西村静江さん、中原智恵子さん、友廣多賀枝さん、黒川慶子さんをはじめ、宇生賀のみなさまにご協力いただきました。改めて御礼申し上げます。なお、本報告は、JSPS科研費(26301028)の研究成果の一部であります。

＜参考文献＞

阿武町教育委員会・社会科副読本編集委員会、『わたしたちのふるさと　阿武』（小学校社会科副読本）。

農文協、1999、『むらの10年後を育てる「集落点検活動」』（農村文化運動第154号）、農山漁村文化協会。

原スミ子・西村静江・池田悦子、2012、「四つ葉サークルの15年」『第2回文化と歴史そして生態を重視したもうひとつの草の根の農村開発に関する国際会議報告書』、高知大学自然科学系農学部門「中山間」プロジェクト・京都大学東南アジア研究所実践型地域研究室、pp.60-62。

山村集落の現状と課題～高知県大豊町怒田集落から～

Actual condition and issues in mountain villages: An example from Nuta Village in Otoyo

氏原　学（大豊町農家）
Manabu Ujihara (Farmer of Otoyo Town)

Abstract

In rural area in Kochi prefecture, severe depopulation and aging are observed. For example, in Nuta village the majority group of age generation is people of the 80's, and then the 70's. Looking at villages distributed around Nuta, the conditions are even severer than those of Nuta. There is a village whose resident is only one old person. It is quite difficult to maintain villages, if focusing level of each village. Community management should be considered in level of former primary school area, consisting of 13 villages or sub watershed level, such as Minamiko River watershed where 7 villages exist.

『第6回　文化と歴史そして生態を重視した
もうひとつの
草の根の農村開発に関する国際会議in美
山町』

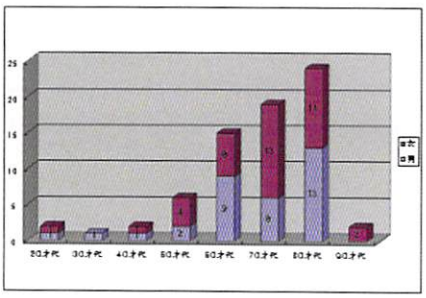
山村集落の現状と
課題

一高知県大豊町怒田集落から一

報告者　ぬたたの会代表　氏原　学（2014年11月16日）

怒田集落内居住者年代別状況

（2014年10月1日現在、住民基本台帳でなく怒田で生活をしている者71人）



2014年怒田集落における水稲栽培実績から

怒田集落の水田所有者（管理者）及び所有枚数状況

怒田住民	怒田外住民	計
27人	12人	39人
175枚	35枚	210枚

怒田集落の水田耕作者及び耕作枚数状況

怒田住民	怒田外住民	計
26人	8人	34人
178枚	32枚	210枚

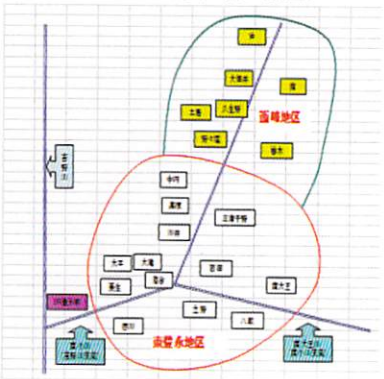
怒田集落の水田耕作者別耕作水田所有者状況

所有者	怒田住民			怒田外住民			計		
	自己	怒田内	怒田外	自己	怒田内	怒田外	自己	怒田内	怒田外
	24人	5人	4人	5人	3人	1人	29人	8人	5人

怒田住民の水田耕作者および耕作枚数状況

年代	50代	60代	70代	80代	90代	計
人数	1人	7人	8人	9人	1人	26人
枚数	7枚	62枚	58枚	47枚	4枚	178枚

南小川流域概略図



高齢化率（平成19年10月31日現在）

東豊永地区　[%]

区分	怒田	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
高齢化率	60.95	47.06	64.29	47.06	62.67	75.00	90.91	76.47	66.67	48.45	56.52	63.16	48.00
後期高齢化率	38.10	17.65	39.29	27.06	38.67	33.33	63.64	44.12	42.86	23.71	34.78	39.47	28.00

西峰地区　[%]

区分	A	B	C	D	E	F	G
高齢化率	54.76	72.41	77.27	66.67	86.67	58.06	66.18
後期高齢化率	33.33	62.07	38.64	46.03	53.33	32.26	41.18

[%]

区分	西峰地区計
高齢化率	51.48
後期高齢化率	30.28

東豊永地区集落別住民数および世帯数別

（ ）は世帯数を

区分	怒田	大平	大滝	落合	川井	高原	中内	三津子	南大王	八敷	立野	西川	妻生
1960年（昭和35年）	322（74）	123（33）	155（34）	243（66）	361（86）	60（16）	110（30）	162（33）	134（30）	273（54）	94（22）	161（34）	229（49）
1989年（平成元年）	173（62）	79（25）	48（20）	151（54）	124（53）	18（9）	24（14）	76（27）	53（15）	154（49）	46（19）	60（25）	97（36）
2014年（平成26年）	78（37）	33	20（11）	60（34）	58（34）	11（8）	7（6）	24（18）	21（12）	77（33）	13（9）	29（18）	34（20）

東豊永地区総計

区分	1960年	1989年	2014年
住民数(a)	2,427	1,103	465
世帯数(b)	563	408	267
a/b	4.32	2.70	1.74

西峰地区集落別住民数および世帯数別

（ ）は世帯数を示す

区分	A	B	C	D	E	F	G
1960年（昭和35年）	226（51）	193（40）	240（54）	257（54）	54（10）	124（26）	349（76）
1989年（平成元年）	57（23）	51（21）	105（51）	113（43）	27（9）	51（21）	141（51）
2014年（平成26年）	28（17）	19（12）	46（29）	41（28）	11（7）	25（13）	57（34）

西峰地区総計

区分	1960年	1989年	2014年
住民数(a)	1,443	545	227
世帯数(b)	311	219	140
a/b	4.63	2.48	1.62

旧来の枠組みを変える発想が必要

多様な人材の確保

多様な資源の活用

多様な活動の展開

集落から学校区へ学校区から流域へ

学生が創作した怒田のイメージキャラクター「ぬたた」です。今も学生達によって進化し続けています。
任意団体「ぬたたの会」、商品「ぬたたの恵み」はここから始まりました。

怒田集落全景

ご清聴ありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。

すいたん農園に集う人々～農業体験塾がつくる農のある暮らし～

People coming together in Suitan Farm -Living with farming-

大西信弘（京都学園大学）
Nobuhiro Ohnishi (Kyoto Gakuen University)

Abstract

Suitan Farming school was organized in Hozu Cho, Kameoka Cityfrom, Kyoto Prefecture, Japan, from 2011. The professional farmer teaches to cultivate a variety of crops to the participants of the farming school. In 2014, farming school starts two types of the school program. Here, these courses and the recent change were reported.

京都府亀岡市保津町では、2011年秋から「クルベジ農業体験塾」として、地域の農家の方に指導いただくことで、プロに土いじりを教わりながらちょっと自給できる「農」のある暮らしを提供しいる（大西、2014b）。私自身、スタッフとして、また、塾生として2011年から継続的に参加してきた。今回は、2014年の動向について報告したい。

表1は2012年度から2014年度にかけての農業塾の申し込み件数を示したものである。

表1 2012年度～2014年度の農業塾の申し込み状況

	2012年度	2013年度	2014年度	
個人申し込み	16区画	15区画	しっかりコース	13区画
			のんびりコース	5区画
企業の参加	14区画	10区画＊		
	30区画	30区画相当		
年度毎の収入	120万円	120万円		66万円

＊：畑のメンテナンス費用として50%増の価格とした

2012年度と2013年度には、企業の顧客向けサービスとしての参加があり、収入の約半数を占めていた。この企業の顧客向けサービスの区画は、年4回（春の植え付けと収穫・秋の植え付けと収穫）のイベントに使われるのみなので、それ以外の期間は、スタッフで管理をし続ける必要がある。それに対して、個人の区画は、月1回の塾日に参加できない塾生も若干はいるが、その他の日に世話をしに来たり、頻繁に通う塾生は毎日のように水やりなどの世話に通って自分の区画の守りをしている。2012年度に申し込みがあった時には、この差がどれほど大きな手間を生むのかをきちんと把握していなかった。しかし、実際に運営してみると、個人塾生が各自の区画をきちんとメンテナンスしているのと、植え付けと収穫だけに参加してもらえるのとでは、手間のかかり具合が大きく違う。また、日々、接している塾生達とはちがって、植え付け・収穫、そのたびごとに違う方が参加している。畑に通って土いじりをしていると次第に畑のルールも共有されていくのだが、一斉に収穫ということで大人数が畑に入ると、畝を踏む人もでてきてしまい、畑の管理もなかなかむずかしい。個々人で畑に来る「もぎ農園」などとは、また違った雰囲気で、土いじりをすることを共有しているものが少ないように感じられた。

図1 2014年度塾生募集チラシ裏面

こうした経緯を経て、2014年度からは農業塾の塾生は個人（家族・友人グループも可）申し込みを中心に運営していくこととした。また、せっかく参加された塾生の中には、頻繁に畑に来るのが難しいという人もいる。そこで、従来の区画割りを「しっかりコース」として、週に1～2回畑にこられる人向きとし、それほど頻繁に来られない人には、月1～2回畑にこられる人向きとして、あまり手間のかからない、収穫期もそれほど頻繁に取らなくてもすむ作物を中心に、区画面積を2/3

に縮小した「のんびりコース」を設定した（図１）。

栽培品種の増加

2014年度は、コース分けに伴い、作付け品種の見直しが行われた。しっかりコースとのんびりコースに共通の品種として：トウモロコシ、キャベツ、ジャガイモ、サツマイモ、枝豆、大根、ネギ、白菜、ブロッコリーが、作付けられた。しっかりコースは、これらに加えて：ナス、トマト、ミニトマト、チンゲンサイ、小松菜、ほうれん草、菜花、アブラナ、オクラ、レタス、小カブ、キュウリ、春菊、白菜、ネギ、甘長などの、収穫期に頻繁に収穫することが必要な品種などを加えることになった。

畑の課題：
根こぶ病、ハムシ、トマトの割れ、レタスの収穫タイミング、苗作り（秋のキャベツ苗が全滅）
相変わらず、個人塾生だけでは区画が埋まらないという状況が解消されない。大阪府では、淀川河川敷の貸農園などが抽選でないと当たらないとか、抽選があるために同じ農園で続けることが難しいなどの課題があるにもかかわらず、すいたん農園では、店員が埋まらない。

チラシを作成し（図２）、近隣自治会の回覧板で告知してもらったり、地元スーパーのクルベジ野菜のコーナーにちらしをおかせてもらったりした他、市の広報誌や、新聞の折り込みなどの媒体を通じた告知を行ってはいるが、塾生の獲得にはつながらない現状がある。また、継続で参加してくれる塾生もいるが、諸事情はあるのだろうが塾生に継続的に参加してもらえる工夫は今後の課題である。

2013年度に参加した塾生の感想（京都　土いじりより引用、2015.03.13）を、農業塾ブログより以下に引用する。塾生の皆さんが農のある暮らしを楽しんでいる様がよく伝わるのではないだろうか。
「今日は時間がないことがわかっていたので、昨日ハツカダイコンの収穫にきた。去年は辛みがあるように感じたが、今年のは甘くておいしい。皆さんもぜひ収穫して味わってほしい。」

図２　2014年度塾生募集チラシ

「去年はナスを345個、今年は410個収穫した。来年はもっと収穫できるようがんばりたい。」
「この農業塾では「仲間」ができる。すばらしいことだと思う。」
「冬場のビニルハウス設置などはむずかしいことも多いが、最近では「野菜を作るのがたいへん」というたのしみができたように思う。」
「スーパーで買う野菜が減ったように思う。」
「去年と今年では、自分の区画の場所がちがっていて、そのためなのか去年と今年では野菜によって育ち方にちがいがあった。台風で白菜が水につかり、その後スプレーなどつかってきれいに洗ったら、良い感じで成長した。しかしその後は全滅してしまった。丁寧に見てやればよかったと反省した。」
「あっという間の一年だった。やっていたことが良かったのか、わるかったのか、今でもわからない。一番勉強になったのは、ほかの皆さんの畑を見ながら「こうすればいいのかな」と思いながら作業をしたこと。」
「春のレタスはいい形にできたのだが、中はぐちゃぐちゃだった。大きくなれと思って置いておいたのがよくなかったのか、欲を出さないようにということなのか。トウモロコシは、こんなにおいしくて甘いものかと、生まれてはじめて体験した。

来年は今年以上によいものをつくりたい。
ちょくちょく電車できて、水やりなどしている。収穫するのが役割だ。
親より子によい体験をさせてやれたと思う。自分もやっているうちにたのしいと感じるようになった。」
「期待していた以上に、夫がよくやってくれて、夫婦になってはじめて見た一面だった、体験してみたよかった。子どもたちは、期待していたよりは農作業はしなかったが、収穫するのはたのしかったようだ。」
「母親が百姓をしていたのを見ていたが、自分でやるのは初めてだった。収穫できるようになると、興味がわいてきて、毎日畑へくるようになった。夏野菜はよくできたが、冬野菜はいまいちだった。とくに葉物は、人が食べるより先に虫が全部たべてしまった。ナスやジャガイモ、トウモロコシはかなりできたので、喜んでいる。今年のことを教訓にして来年もがんばりたい。
野菜を育てるのはむずかしいと感じた。鍋物にと期待していた白菜は、一生懸命やったつもりだが、外側がまっくろになるくらい虫がついていた。でもその外側をとって芯だけ食べると、買ってきたものよりも、すごくおいしかった。新しいものはおいしいなと実感した。来年もいいものをとれるようがんばりたい。」
「とれる野菜はみなおいしいと感じた。今までスーパーで買っていた野菜は、さわっても折れたりしないが、畑でとれた野菜は収穫するときに外側がばりばりっと折れる。ブロッコリーや枝豆も甘くておいしい。とれたての野菜のおいしさを感じることができた。夫婦二人で畑へきて、太陽を浴びて、風を感じて、土にふれて、いいことだなあと感じた。」

畑の守：サポートとして４月から１１月まで、Hさんに協力をいただいた。宮城で有機農業をしていたが、続けることができなくなって、被災者の雇用補助がついていた間は、他の有機農業をしているところで雇用されていたが、補助金が切れ、雇用もなくなり農業をできる場所を探していたところ、縁あって農業塾の守をしてもらいつつ、空き区画で栽培をしていただいていた。H さんは、12 月以降、他の地域に移られたので、次年度、再び、人材探しをする必要がある。こうした、人的資源の不足、特に、新たなスタッフが増えないという現状も、この取り組みの抱える大きな課題の一つである。

NPO 法人ふるさと保津のその他の取り組み
あいのあるまちづくり

亀岡在住の藍染め作家の吉川さん（あとりえトド：http://www.a-todo.com）が主導して、保津、亀岡を「あいのあるまち」にという活動を展開している。すでに、保津川下りのはっぴなど、地元とは交流があった吉川さんだが、NPO 法人に参加するようになって、農業塾を始めるとともに、アユモドキの吹き流しを作ったりして、交流が深まっていった。

地元で、栽培した藍を使った藍染をすることで、「あいのあるまちづくり」、「あいのあふれる亀岡・保津」をめざしている。2013 年から藍の原料となるタデの栽培試験を実施、泥藍の制作をはじめ、2014 年には三ノ坪に住宅を借り、藍染めの工場として立ち上げを準備：地域力再生に応募し、藍染教室などを開催して、多くの参加者で賑わいはじめている。３月には、藍染の展覧会も開始を予定している。

じゃこ田の学校（２）「そば体験シリーズ」

じゃこ田とは：保津では、大雨の後に川から魚が入ってくる水田を「じゃこ田」と呼び、水田漁労の場でもあった（大西・吉田、2014）。これを地域のシンボルとして、地域の歴史・文化・自然に学ぶ学校をじゃこ田の学校と名付け、じゃこ田の学校（１）は、2013 年 12 月に開催したバードウォッチング教室として開催された。

2014 年 9～11 月：亀岡市の広報誌で告知、募集をおこなった。すでに栽培してあったそばの収穫体験や、そば打ち体験を行った。農業塾の塾生のそば屋さんがマイスターとなって、そば打ち体験教室が実現された。

じゃこ田の学校（３）保津川でバードウォッチング

2014 年 12 月 13 日：亀岡市の広報誌で告知して、参加者を募った。

地元のバードウォッチヤーに講師を依頼して、身近な保津川の川沿いでバードウォッチングをした。これは、2013 年度に引き続き、２回目の催し。バードウォッチングはネイチャーウォッチングの中でも、比較的多くの人の参加があるようだ。たとえば、日本野鳥の会の会員は、全国で４万人にものぼる（日本野鳥の会、2015.03.13）。このことは、日本全国、どの地域でも探鳥のマイスターがいる可能性が高いということを意味し、同様のネイチャーウォッチングの取り組みが可能であると考えられる。また、鳥類は、日本の身近な生態系である農地生態系では生態系の中の高次に位置するものが含まれる。また、コウノトリやトキ、または、猛禽類のようなインパクトの大きい生物が多いのではないだろうか。

農業塾のスタンスも、農家＝地元の農業マイスターに教えを請うというものだった。専門家から学ぶことは楽しく面白いということが、このバードウォッチングについてもいえるのではないだろうか。探鳥会の当日は、講師をお願いした方々も、普段、これほどまとまっていろいろな鳥を見ることはないというくらいに鳥を見ることができた。ハイタカが２羽でじゃれていたり、ミサゴが４羽現れ、１羽は保津川にダイブしてコイを獲るところをじっくり見させてもらった。ミサゴは、魚食いのタカとして知られ、海岸沿いから内陸の水辺まで水のあるところでは広く見られるタカですが、京都府では準絶滅危惧種に指定されているような鳥です。保津川べりをちょっと散策するだけで、ハイタカやミサゴをみることができ、参加者のみならず、お願いした講師を含め、スタッフも皆楽しんでいた。

おわりに

すいたん農園の取り組みは、細々とではあるが、着実に、さまざまな実績を積み重ねている。今回挙げたさまざまな課題、特に、塾生の参加者をどう増やしていくかという課題が、外向けの大きな課題であろう（図３）。

図３　2015 年度農業塾塾生募集

この他に、このとりくみが、地元保津の方々にどこまで浸透しているのかという、内向きの課題も抱えている。この取り組みが、もともと、保津町自治会内の保津町まちづくりビジョン推進会議の発展として展開してはいる（大西、2014a）が、多くの活動が抱えるように、スターティングメンバーから、どのように人の輪を広げていくのかという課題に、今後も取り組んでいかねばならない。

文献

大西信弘、2014a、亀岡の農業と自然（１１）すいたん農園プラン、ざいちのち、61、3
大西信弘、2014b、保津町（京都府亀岡市）がとりくむ、生きもの共生で町おこし、すいたん農園　～いくつかの実践事例の紹介～、第５回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議報告書
大西信弘・吉田実、2014、亀岡の農業と自然（１２）～保津川の川魚漁と魚食文化（１）～、ざいちのち、62、2
京都・保津で土いじり、２月の農業塾、http://nougyoujuku.seesaa.net/archives/20140203-1.html、2015.03.13
日本野鳥の会、名称・目的など、http://www.wbsj.org/about-us/summary/about/、2015.03.13

美山町知井1 有限会社　かやぶきの里

Chii, Miyama town 1, The historic village of thatched roof house

勝山　直（有限会社　かやぶきの里）
Tadashi Katsuyama (Kayabuki-no-sato Ltd.)

有限会社かやぶきの里の勝山と申します。私自身はこんなところで報告するような立派なことは何もできていませんので、大変恐縮ですが日頃の活動の一端などを報告 させていただきます。

私の住んでいる美山町北集落は、重伝建の保存地区に選定されていることが一つの特徴であると思いますし、もう一つはその中で住民出資の有限会社を設立し運営していることが特徴であると思います。 当然、保存地区としいう前提がなければ有限会社の設立もなかったわけですが、今日は地域振興の取り組みということですので、保存地区になった経過はごく簡単に報告させていただきたいと思っています。

さて、有限会社かやぶきの里ですが、この会社は村おこし地域おこしのために集落の住民が出資して設立した法人です。平成 12 年 4 月 3 日に設立しています。資本金は 330 万円、すべて村の住民の出資です。事業内容は、主に次の 6 点です。現現在の従業員数は資料のとおりです。平均年齢は約 53 歳です。設立当初は パート従業員を中心に村の人の割合が高かったのですが、今では全体の 1/3 となっており、他の集落や地域から来ていただいている従業員の方には大変助けられていますが、空洞化といいますか、村の後継者の受け皿となるべき会社の実態としては、これで良いのかという疑問も感じざるを得ません。

保存地区選定の経過につきましては、漠然とした表現ですが、大きな時代の流れみたいなものを感じます。このような景観が評価される時代になったといいうことだと思います。文化財保護法が改正され個々の物件だけでなく複数の建造物や周辺環境も保全の対象となったこと、また私自身は昭和 57 年 に帰ってきましたが本当に何もない田舎の村でした。確かに集務部分のかやぶき民家の数は今と大きな差はないと思いますが、それでも何もない村でした。そんな所へ、カメラマンやスケッチなどをされる方が大勢来られるようになります。昭和から平成にかけての頃です。幅の狭い村の道路に三脚を立てて平気な顔をしている方、でんと椅子に腰かけて絵を描いている方、当時は申し訳ありませんが本当に邪魔な存在でした。しかしそんな皆さんが色んなコンクールなどに作品を出品されたことが美山町や北集落の大きな ＰＲ になったということを少し後で理解していくことになります。そんな自発的ではない、この村の景観が評価される時代になったということではないかと思います。

そんな時代の流れの中で平成 5 年伝建地区としての選定を受けました。当時全国で 36 番目の選定で す。美山町の他の集落も候補地区になっていましたし、その中で北集落だけが選定を受けたことなど色々経過はありますが、省略をさせていただきます。 また当時の美山町も都市交流に力を入れておられ、何もなかった村に来訪者を迎える施設の整備を行っていただきました。現在の会社は施設 としては市の施設 4 棟を管理運営しております。

選定当時村への来訪者数は年間数千人と言われており、レストランや民宿など大きな施設を預かつても、事業として成功するのかどうか大きな不安の中でのスタートでしたが、来訪者数は年々増加し、管理を任された施設の運営は順調に経過しました。そして平成 11 年頃から行政からの法人を設立すべきではないかとの指導もあり、村としても後継者の受け皿としての法人の設立に前向きに取り組んでいきました。そして 12 年の設立です。すでにそれぞれ確かな歩みをしていた事業所を統合する形で設立しました。

みんな平等にということから当初は農事組合法人の設立を目指しましたが事業の要件を満たせず、最 終的には有限会社を設立しました。これも特定の誰かが大きな権利を持つということがないよう出資口数を一人 2 口までに制限し文字通りみんなの会社、村の会社との精神で設立しました。

会社設立以降も右肩上がりに業績は上向きました。事業実績は表のとおりです。今ほどの危機感もなくただ忙しい毎日を過ごしておりました。ところが伝建地区だけでみても今では 100 を超えていますし、他の町も観光面に力を入れられ道の駅なども整備が進みました。平成 15、16 年をピークに来訪者数、売上高ともに減少してきております。競合する他の事業所との競争の激化、またそんな中でニーズに十分に対応できていないこともあると思いますが、入手が不足していることも大きな原因ではないかと感じています。ある部門では当然営業すべき休日に人の手配ができず休まなくてはならないことがあったり、手間のかかるメニューの一部をカットして営業したり、来訪者との対応も十分でない部分があったりという状況が起きてきています。限られた人員の中でできるだけ部門間の交流を図り、日常的に助け合うことを意識してきましたが、それも限界に近い所まで来てい

ます。できれば村に住んで安い賃金ですが、会社で働いていただける方があれば大変助かります。安定的な運営はもちろんですが、できれば無理のない範囲で規換を拡大し、複数の若者に安心して働いてもらえる環境を作りたいと思っていますが、中々大変です。今は、とにかく来ていただいた来訪者にどれだけ満足、納得して帰っていただけるか、そのことに気を配りながら運営しています。

農地も景観を構成する重要な要素の一つです。約8haの農地のうち約4割を会社が借りて作付しています。主な作物はもち米を含む水稲、そば、きびです。より良い景観づくりを意識しながら、レンゲを巻いたり、そばの花を楽しんでいただいたり、もちろん収穫物は餅や団子に加工したり、手打ちそばとして食べていただいたり、お米もレストランや民宿で提供しています。何とか会社の設立の目的である後継者の受け皿としての機能を発揮できるように一層工夫していく必 要があると思っています。保存地区選定後 21 年目、会社を設立 して 15 年目ですが、人口の減少に対応するため新しい仕組みを考えなければ先細りは明らかです。皆様の知恵も参考にさせていただければと思っています。自らが自立することと合わせて美山町内の他の事業所とも連携を図り、美山ブランド、発信力をもっと高めることも大事なことだと感じています。

有限会社かやぶきの里　資料

●有限会社　かやぶきの里は、村（地域）おこしのために住民が出資して設立した法人

・設　　立　平成１２年４月３日

・資 本 金　３３０万円　（５万円×６６口）

・事業内容　　①レストラン　（お食事処 きたむら）

②農産物の加工販売　（北村きび工房）

③宿泊施設　（民宿またべ）

④特産品販売　（お土産処かやの里）

⑤喫茶　（カフェ・ギャラリ 彩花）

⑥農産物の生産

⑦その他

●従業員数①正従業員　　６名

②パート従業員　１５名

③アルバイト　　１０名

●設立の経過

○文化財保護法の改正により、個々の建造物などだけでなく、いわゆる景観も保護の対象とすることになった。

○カメラマンやスケッチなどをする人が村の中で見受けられるようになる。

○平成5年12月8日、国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受ける（当時36番目）⇒「保存会」

●北村かやぶきの里憲章

・私たちは、祖先から受け継いだ伝統的建造物群と美しい自然景観を誇り、そして、それを守り、活力あるものとして後世へ引き継ぐためにこの憲章を定めます。

・私たちは、茅葺き民家が散在する、日本の農村の原風景である集落景観の維持保全に努めます。

・私たちは、静けさ、秩序ある落ち着き、善良な風俗を守ります。

・私たちは 、集落の歴史や文化を理解し、教養を高め、自らの資質向上をはかります。 私たちは、一人ひとりが気持ちを一つにして、訪れる人に村の心を伝えます。

を設立し、景観保存に関することについて内部的にも対外的にも責任を負うこととした。

○ 行政　（美山町）　の重要な柱の一つ　「都市との交流」

⇒京都府とも連携をしながら、来訪者受入れのための施設の整備が行われる。

・レストラン（お食事処き たむら）平成6 年

・宿泊施設　（民宿またべ）平成7 年

・特産品販売所　（お土産処かやの皇）　平成12 年　※農産加工部門も併設

・喫茶　（カフェ・ギャラリ 彩花）平成 13 年

○ 比較的順調に運営してきた中での行政指導

○先行して運営していた 5つの事業所を一つにする形で有限会社を設立　（後に民俗資料 館は保存会直営となり、有限会社からは分離）

○ 出資金額にかかわらず閉じ権利を持つ農事組合法人を目指したが一部の事業内容が 要件を満たさず、有限会社として設立した。しかし出資口数は2 口までに制限し、誰もができるだけ平等な権利を有するよう配慮した。

●現状と課題

少子高齢化 によるマンパワーの不足。

美山ブランドの再構築

・私たちは、集落の特性を活かし 、私たち自身の手で集落の発及向上をはかります。

●保全優先の基本理念

一、『売らない』集込の土地や家などを売ったり、無秩序に貸したりしない。

二、『汚さない』家の周り、畑など集落全体を 汚さない。

三、『乱さない』集落の道路、山、家などの美観や集込の風紀を苦しさ ない。

四、『壊さない』 重要伝統的建造物群に選定された集落景観や美しい自然を壊さない。

五、『守る』店が立ち並ぶ観光地にせず、集落景観を現状のままで守る。

●有限会社かやぶきの里綱領

一、先人が残してくれた遺産に感謝しよう。

二、『日本の農村の原風景』 北村は日本の宝であり、美山町のシンボルであることに誇りを持とう。

三、北村の伝統である共同の力を発揮しよう。

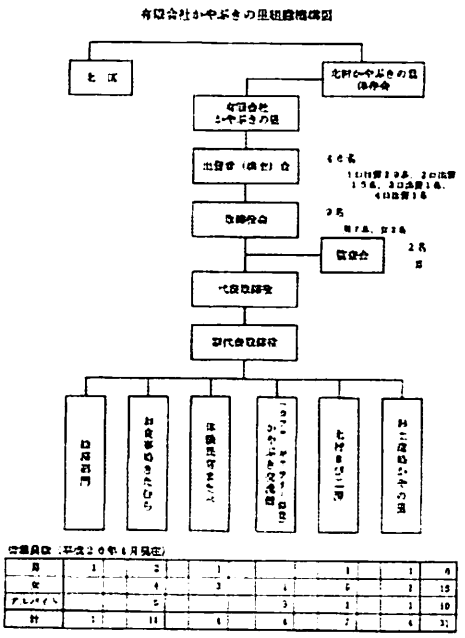
四、訪れる人とともに喜び合おう。

五、訪れる人たちにもてなしの心を持とう。

●有限会社かやぶきの里事業実績他（単位：円、人）

期別	年度	売上高	損益	人件費	入込客数
1	12	96,300,789	4,082,872	40,359,859	125,000
2	13	122,685,314	3,419,465	47,198,240	150,000
3	14	144,475,125	4,590,293	53,376,923	200,000
4	15	164,154,404	5,628,955	55,777,028	235,000
5	16	150,900,462	2,971,019	57,692,151	290,321
6	17	148,119,157	4,695,643	57,457,619	286,419
7	18	140,182,366	1,484,738	55,603,738	265,166
8	19	145,105,731	4,524,594	56,414,706	263,858
9	20	137,060,499	1,314,476	55,050,635	258,820
10	21	138,120,597	2,153,584	55,561,177	264,627
11	22	124,691,864	825,805	51,692,389	235,467
12	23	133,792,613	1,958,637	55,029,336	245,278
13	24	119,893,581	337,506	48,625,604	215,229
14	25	123,427,627	-15,786	53,595,542	217,193

●有限会社かやぶきの里 組織機構図



美山町知井 2 有限会社　芦生の里
Chii Miyama town 2, Asiu no sato

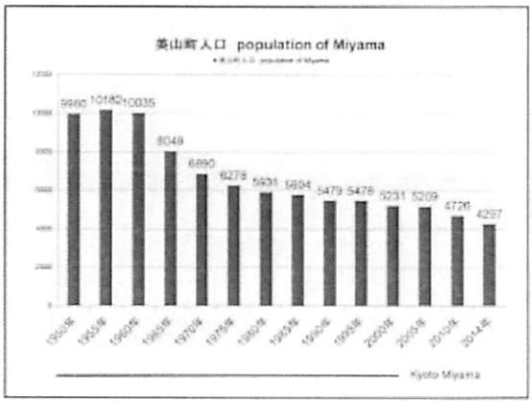
今井　崇（有限会社　芦生の里）
Takashi Imai (Asiu no sato)

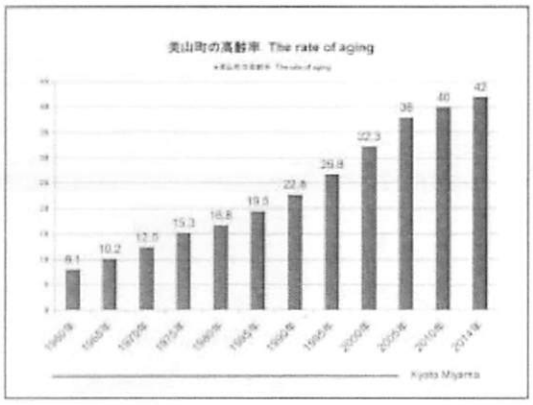
1989 年　木材加工施設整備
（新農構―旧芦生分校取得改造・木工機械一式・木材倉庫）
1990 年　京都府ベストデザイン賞「銀賞」受賞（木工部）
1991 年　全自動堅型真空包装機導入（農業協同組合専属利用リース）
1992 年　組合員住宅建築（木造 1 部 2 階建）
1993 年　京都府食品衛生協会 5 周年記念表彰受賞
1994 年　自動攪拌蒸気三重釜導入
ホイストジョイストン設置（木工部）
マイクロバス導入（中古 29 人乗）
1996 年　自動ガス充填「パック・シール機」導入（京都府ふるさと振興）
マイクロバス入替（美山町教育委員会）
1998 年　ふるさと産直ネット京都店開店（京都農民会館内直販店再開）
体験実習木炭製造窯築造
木炭　竹炭及び亀甲竹炭工芸品製炭・販売開始
1999 年　亀甲竹炭工芸品製炭技法・加工技法特許権出願
2000 年　亀甲竹炭工芸品製炭技法・加工技法特許権取得
2001 年　芦生山の家新築（地域資源活用総合交流施設）
2006 年　マイクロバス入替
有限会社に組織改変
2008 年　原料倉庫建築
日本食品衛生協会優良施設表彰
2011 年　工場増改築

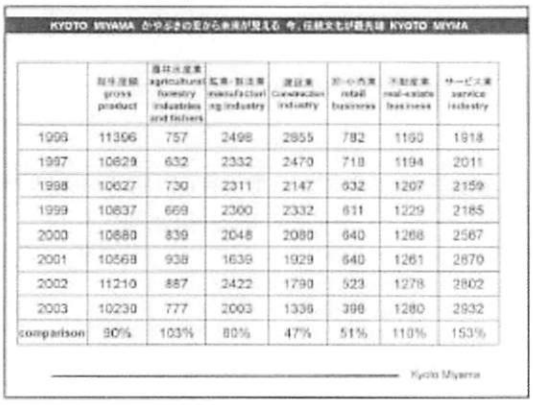
美山町知井３　エコツーリズムによる地域振興

Ghii, Miyama town 3 Community development by eco-tourism

高御堂　厚（美山ふるさと株式会社）
Atsushi Takamido(Community development by eco-tourism)



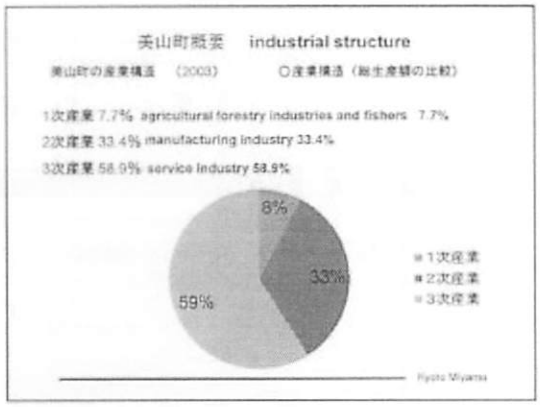




KYOTO MIYAMA かやぶきの里から未来が見える 今、伝統文化が最先端 KYOTO MIYAMA

	総生産額 gross product	農林水産業 agriculture forestry industries and fishers	鉱業・製造業 manufacturing industry	建設業 construction industry	卸・小売業 retail business	不動産業 real-estate business	サービス業 service industry
1996	11396	757	2498	2855	782	1160	1918
1997	10629	632	2332	2470	718	1194	2011
1998	10627	730	2311	2147	632	1207	2159
1999	10637	669	2300	2332	611	1229	2185
2000	10680	839	2048	2080	640	1268	2567
2001	10568	938	1639	1929	640	1261	2870
2002	11210	887	2422	1790	523	1278	2802
2003	10239	777	2003	1336	398	1280	2932
comparison	90%	103%	80%	47%	51%	110%	153%

Kyoto Miyama



KYOTO MIYAMA かやぶきの里から未来が見える 今、伝統文化が最先端 KYOTO MIYAMA

2.活性化の基本

① 流入人口 (population flow)

② 物　流　(distribution)

③ 金　　(money)

④ 地域貢献 (Measure regional contribution)

Our goal & aim
経済の活性化　vitalization of the economy
定住促進　promotion of the settlement of people

How can we get our main aim? That is ecotour.

Kyoto Miyama

KYOTO MIYAMA かやぶきの里から未来が見える 今、伝統文化が最先端 KYOTO MIYAMA

アフリカの野生のライオンの値段は？
How much is wild a lion

① $1,325

② $8,500

③ $515,000

The right answer？　$OO

Kyoto Miyama

KYOTO MIYAMA かやぶきの里から未来が見える 今、伝統文化が最先端 KYOTO MIYAMA

ケニアのアンボセリナショナルパークのサファリツアーの場合。
Safari tour in Amboseli National Park Kenya

エコツアーの収入
income of Eco-tour
➡ 牛の放牧収入×182頭（1972年）
incom of cattle to pasture×182

ライオンの価値
The value of lion
➡ 観光対象として515,000ドル
For torism $515,000
狩猟対象として8,500ドル（1981年）
For hunting $8,500

ケニアは野生動物は狩猟などよりもエコツーリズム
（宿泊施設、食事、サファリ、土産物等々）
のほうが高い経済的利益を生み出す政策を行っています。

Which do you choose? Ecotour or hunting?

Kyoto Miyama

KYOTO MIYAMA かやぶきの里から未来が見える 今、伝統文化が最先端 KYOTO MIYAMA

あなたは何を誰に売るのか売りにするのか？
What is your sales point?
Who do you sell the tourist attractions to?
What will you take for the tourist attractions ?

ここだけにしかないもの
That is in no other place than here.

Kyoto Miyama

KYOTO MIYAMA かやぶきの里から未来が見える 今、伝統文化が最先端 KYOTO MIYAMA

エコツーリズムの定義とは
What is definition of ecoturosm?

①自然環境への配慮と伝統文化の継承
protect the environment
succeed the traditional culture that is rooted in Japan

②地域振興（地域に対する活性効果）
cheer up people in the worst-affected areas

③観光振興への寄与（観光業に対する経済効果）
Economic effects to local areas

④環境教育への活用 Educational environment

Kyoto Miyama

KYOTO MIYAMA かやぶきの里から未来が見える 今、伝統文化が最先端 KYOTO MIYAMA

私たちが推進するもの
We promote ecoturosm.

①エコツアー　eco-tour

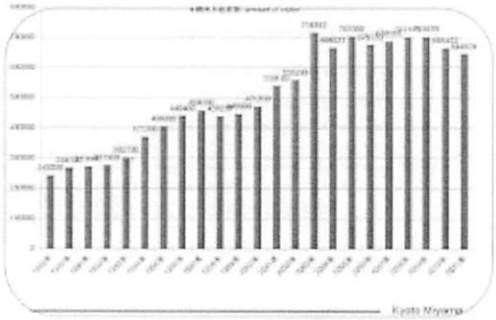
②教育旅行　educational-tour

③インバウンド（海外からの外客誘客）
accepts many tourists from overseas

Kyoto Miyama

KYOTO MIYAMA かやぶきの里から未来が見える 今、伝統文化が最先端 KYOTO MIYAMA

観光入込客数 amount of visiter



Kyoto Miyama

KYOTO MIYAMA かやぶきの里から未来が見える 今、伝統文化が最先端 KYOTO MIYAMA

どうしてエコツーリズムなのか？Why we choos ecotourism?

多くの分野が関わることができる（相乗効果）
synergistic effect

- 地域住民 The local citizens
- 都市交流 Exchange between Urban Areas and Rural Areas
- 伝統文化 技術の指導者 instructor
- ガイド業 guide and interpreter
- 旅客運送業 the Passenger Vehicle Transportation Business
- 旅行業 travel agents
- 土産物販売業 souvenir shops
- 農業 林業 水産業 agricultural forestry industries and fishers
- 宿泊業 accommodation industry
- 飲食業 Restaurants and other food-service businesses
- その他の関連事業 others

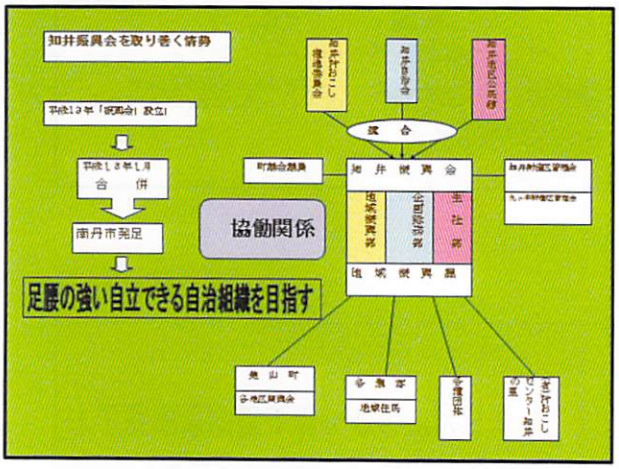
知井振興会の地域活性における役割

Role of Chii promotion association in regional revitalization

河野賢司（知井振興会）
Kenji Kono(Chii promotion association)

知井地区のデータ

- 平成25年4月1日
  325世帯　727人
- 65歳以上306人
- 高齢化率　42.09%
- 限界集落　5集落



地域の課題

1. 高齢化対策（高齢者見守活動・防犯防火）
2. 少子化・定住対策（平成２０年度小学校入学予定１名）
3. 獣害対策（里山事業）
4. 地域安全対策・防災対策
   （子ども見守り隊・防災マニュアル）
5. 女性の社会参画（女性プロジェクト）
6. 農業・農地対策（農業プロジェクト）
7. 将来を見据えた地域構想（将来構想）
8. 特産品の振興と加工所の活用
9. 環境・景観保全対策（美しい里づくり）

各種会議

総　会：役員・振興委員・区長・市会議員・各種団体長（計46名）
推進委員会：役員・振興委員・区長・市会議員（計32名）
常任委員会：役員・振興委員（計20名）
役員会：役員（計10名）
部会：各部員（各9名）

定期総会のようす →

鳥獣被害をどう対処するか？

◎毎年集落要望として、鳥獣被害対策をどうにかしてほしいという要望が１０集落中９集落に及んでででていた状況。

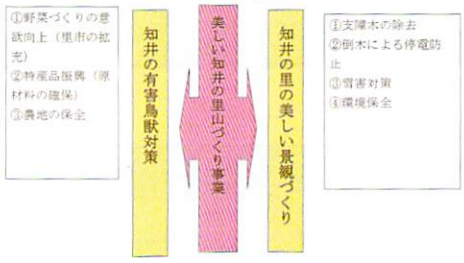
◎行政・振興会とも打つ手がなく、永年の地域課題として先送り状態。
　対策：①猟友会での捕獲駆除
　　②電柵等による自己防衛手段

鳥獣被害をどう対処するか？

◎ある年寄りの言葉がヒントに！！
「昔はこんなにサルや鹿が里にこなかったのにな。昔は、こんなに木が家まで迫ってなっかたし、もっとみんなが裏山に牛のエサの柴刈りにいったり、炭をつくるために山に入っていたけどな。」

◎そこで
昔の里山にもう一度、戻すことは出来ないか？
と発想を転換！

「美しい知井の里山事業」への取組み



里山のイメージ

実施箇所　（江和地内）

１７～１９年度の３ヵ年で里山事業完了！

（知井の全集落で伐採が終わる）

↓ 美しい里づくりへ更に前進！

里山事業から「美しい里づくり」へ
そこで地域の女性のチカラを！借りよう。

ある新聞記事が目に留まる

◎それはドイツの地域興しの記事

ドイツでは３年に一度「わが村は美しくコンクール」が開かれており、５０年以上の歴史がある中で２度も金賞を取った小さな村がある。

クラインメッケルゼン村。人口９３０人の村は、茶色のレンガ造りの家が並び、緑の並木と溶け込む。

そして、村づくりの原動力は女性だ。男性は都市部へ通勤するため、昼間は女性が家を守る。「家族が住む村は、美しくありたい」。そう願う女性は、家の周りを花で飾り、村中の道や庭に木を３００本植えた。

このことは村に２度の金賞の名誉だけでなく、大きな財産を残した。受賞後５年間で、村民が６０人増えた。

つまり、美しい村づくりに魅せられたことによる効果だった。

女性プロジェクト誕生までの経緯

平成16年度女性副会長誕生

↓

女性委員会準備委員会を開催

↓

平成17年度女性委員会委員会を設立

↓

女性委員会設立の集落説明会を実施し、女性の地域社会への参画を呼びかけ

↓

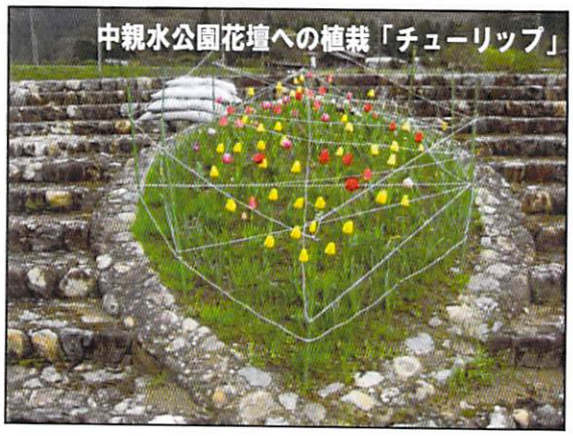
平成18年度女性プロジェクト誕生

女性参画プロジェクト

女性の地域社会への参画について、積極的に地域全体で取り組んでいます。花いっぱい運動は特に女性が中心となりすすめていて、振興会活動の中心的な存在になっています！

花いっぱい運動と景観保全活動

京都府の補助事業を受け、地域全体で花いっぱい運動を女性が中心となりすすめている。もみじロード、あじさいロード、いちょうロード、寒桜ロードなど集落ごと・四季ごとの見所を作り、地域全体へ足を運んでもらえる活動を展開中！

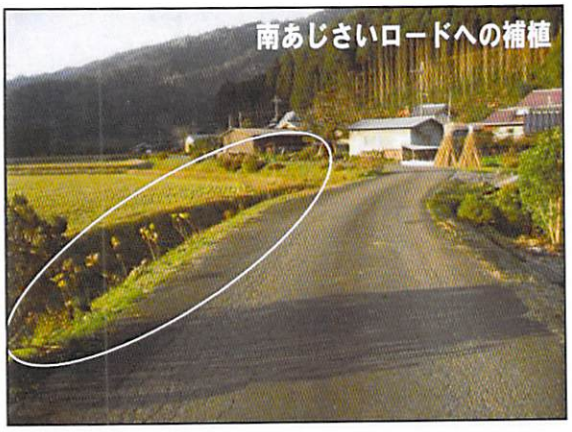


平成１９年度
京都府地域力再生プロジェクト支援事業

採択

↓

地域の女性が中心となり、
集落ごとに「花」による四季の見所づくりを展開！



南あじさいロード

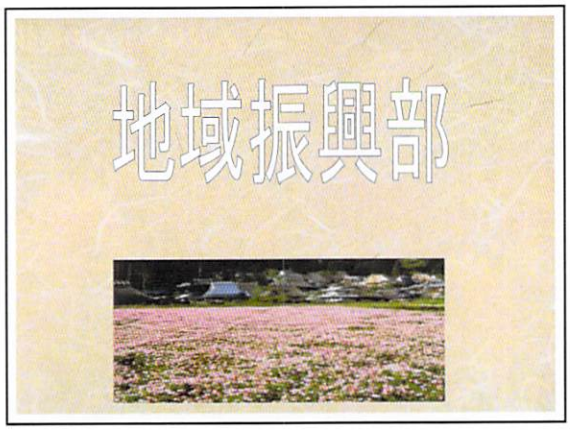
田歌もみじロードへの植栽
ちしおもみじ

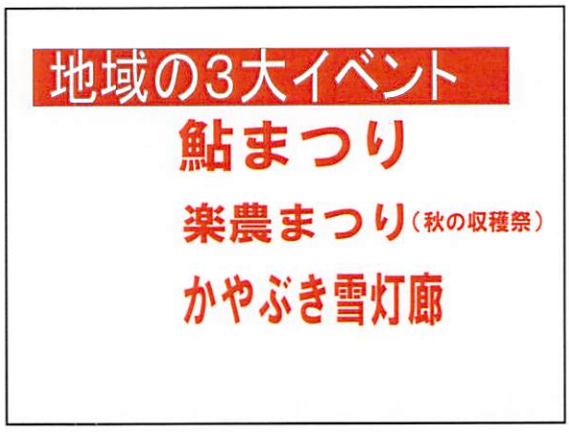
田歌もみじロードへの植栽
寒桜も植樹

田歌もみじロード

年に一度の研修会の様子
2011.4.25チューリップ祭り会場

山村留学制度の導入
平成１０年スタート。
平成１２年センター
「四季の里」設置。


地域振興部


地域の3大イベント
鮎まつり
楽農まつり（秋の収穫祭）
かやぶき雪灯廊

都市交流による
定住促進
鮎まつり

都市交流による定住促進
楽農まつり
（秋の収穫祭）
平成19年11月23日（祝）

都市交流による定住促進
かやぶき雪灯廊
各交流事業で定住相談窓口を設置
平成20年2月2日～9日
幻想的な1,000個の灯り↑

知見「正法寺」いちょう/もみじ
名所めぐり
七面大明神

スタンプラリー

「冬場の集客」対策として宿泊版スタンプラリーを実施↑
季節を通じて知井の宿に宿泊された方に特産品プレゼント
旅の宿組織も立ち上げ

美術館・ギャラリーマップ作成

美山へ来られた方に翌日紹介できる場所が必要

北村から更に地域全体へ紹介できる「地域めぐりスタンプラリー」を今後検討！

知井の魅力を全国に発信！田舎暮らし応援

知井振興会ホームページ開設

② 暮らし部門
◆働く場所の紹介、空き家の把握と紹介
③ 広報部門
◆Ｉターン・Ｕターン募集、ホームページでの情報発信
◆知井振興会ホームページ（田舎暮らし応援）
chii@able.ocn.ne.jp

生涯学習社会教育部

世代間交流スポーツの祭典

秋の一大イベントとして、すっかり定着した「世代間交流スポーツの祭典」↑

文化の集い

地域唯一の文化の発表の場として期待されている
「文化の集い」↑

様々な地域イベントにも共催！

子供スポーツ大会　　新春グラウンドゴルフ大会

地域の行事イベントにも積極的に参加し、共催しています。

学習会の開催

人権学習会・映画　エコ学習会

その他の取り組み

振興会の新たな取組み

少子高齢化社会にどう対応するのか？

少子化対策！　　高齢化対策！

子ども・地域見守り活動

高齢者宅訪問

知井地区のデータ

- 平成19年4月1日
  340世帯　848人
- 65歳以上　324人
- 高齢化率　38．21%
- 限界集落　3集落
- 美山町人口
  5，035人

5年後

- 平成24年4月1日
  320世帯　736人
- 65歳以上　300人
- 高齢化率　40．76%
- 限界集落　4集落
- 美山町人口
  4，508人

Ｉターン・Uターンの取り組み

定住促進対策委員会

取り組み状況

◆専門部体制
- ・少子化・教育部門
  【山国委員長・企画総務部副部長・小学校長・地域振興部副部長・見守り隊隊長】
- ・暮らし部門
  【振興会長・保護者会会長・スポ少団長・生社部部長】
- ・広報部門
  【PTA会長・子育ての会会長・振興会事務局】

① 少子化・教育部門
◆子どもや地域の安全対策
・・・見守り隊を結成。18年9月1日から活動。

子ども・地域見守り活動

◆小学校今のままなら平成20年度の入学生は1名となる

↑知井独自で新らしい制度を検討！

定住促進対策委員会

具体的な定住対策の取り組み

新入学祝い金制度
◆来年度の新入学生と共に知井に定住された方（Ｉターン・Uターン者）に対して、祝金制度と家賃の半額助成を設ける。
（最低2年以上定住されることが条件。持ち家のある方は家賃の助成はしない。）

家賃半額助成制度
◆来年度中に保育園児及び小学生（新入生以外）と共に知井に定住された方（Ｉターン・Uターン者）に対して、家賃の半額助成を設ける。

結婚につながる都市交流事業（20年度若者交流倶楽部）
◆地元の独身者を対象に、将来結婚につながるような出会いの場をもうける。
季節ごとの知井のイベント（鮎まつり・楽農まつり・雪灯廊）のスタッフを募集して1年間を通じてフレッシュマンクラブと企画立案段階から共に参加してもらう。
・田舎暮らしや自然が好きな方で出会いを求めておられる若者を広く募集する。

平成20年度　Ｉターン者（新入学祝金支給）

地域独自で、新規定住者に対して祝金20万円を支給！
地域の様々な方が入って、定住促進対策委員会で随時、検討。

定期的に委員会を開催し、地域のＩターン情報や空き家情報などを情報交換。

東京都から美山町へ定住。祝金20万円を委員長から交付した。

平成20年度　若者交流企画（夏）

鮎まつり

知井の3大イベントを通じて都市の若者と交流

鮎まつりに皆んなで屋台出店

河原で鮎のつかみどりを体験

鮎まつり終了後、懇談会

翌日は河原でバーベキュー

平成20年度　若者交流企画（秋）

楽農まつり

知井の3大イベントを通じて都市の若者と交流

皆んなで初めての布絵づくり体験

集合写真

「たこ焼き」、「おでん」を販売！

秋の味覚「焼き芋」を堪能！

平成20年度　若者交流企画（夏）

かやぶき雪灯廊

知井の3大イベントを通じて都市の若者と交流

幻想的な冬のイベント「雪灯廊」

ここでも屋台出店！　1日目はあいにくの雨となった。翌日はソーセージづくり体験に一緒に参加して楽しく交流を図った。

地域福祉実現に向けて！

より住みやすい安全安心の地域づくりの提案！

住みよい安全安心のまちづくり委員会発足！

H23. 10. 2
南丹市総合防災訓練に併せ、
高齢者宅の見守りを実施

高齢者宅訪問

ゆれタンちゃん無料配布
独居老人・高齢者宅５７戸

地震・停電になると
ブザーでお知らせ！
素早く手元を点灯！

知井老人クラブより緊急提案！！

衝撃！

「独居老人の引きこもりを
どうにかしたい」

提案！

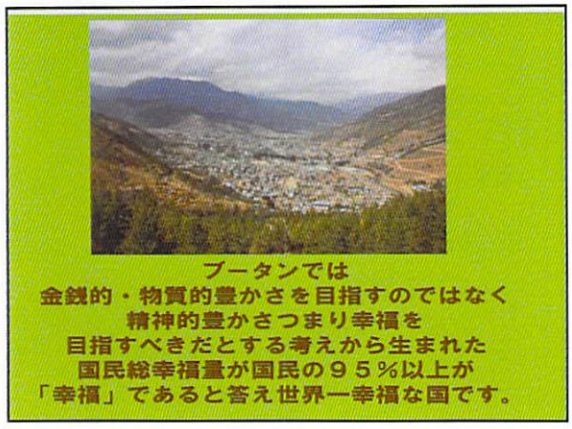
お互いの顔が見える関係や
声が聞こえる環境を
もう一度取り戻す必要がある。
各集落へサロン設置を提案！

平成24年度の取り組み

各集落のふれあい委員と
民生委員と安全安心のまちづくり委員会が
連携し、9集落でサロンが立ち上げられた

突然ですが(^)o(^)

ブータンのワンチュク国王が来日！


ブータンでは
金銭的・物質的豊かさを目指すのではなく
精神的豊かさつまり幸福を
目指すべきだとする考えから生まれた
国民総幸福量が国民の９５％以上が
「幸福」であると答え世界一幸福な国です。

「幸せって？」なんなのかと考える時、
経済成長こそが幸せだと考え、その尺度・国内総生産（GDP）で
表す経済大国ニッポンが、後進国（GDP世界１４５位）である
ブータンから学ぶべきことは沢山あるようです。

ブータン王立大学学長一行が知井振興会へ視察研修（H24．9．27）！

Ｈ２５年７月から1ヶ月佐々里区で
ブータンから4名が調査目的で滞在
住んで良かった！と思える
地域づくり実現に向けて！

少子化対策！　高齢化対策！

振興会へ更なる課題が・・・

増えていく限界集落をどう支援していくのか？

ここ数年で加速する限界集落！

平成23年　→　3集落
知見・河内谷・佐々里

平成24年　→　4集落
知見・河内谷・佐々里
北

平成25年　→　5集落
知見・河内谷・佐々里
北・南

知井地区＝へき地＝高齢者社会＝限界集落(3/10)

- 合併により住民サービスが低下
- 隅々まで行き届く「気配りある行政」は期待できない。
- 自分達の出来ることは自分達で行うことが自己防衛に繋がっていく。

どのような地域課題や声があったか？
“限界集落”では・・・

集落で共同作業ができない・・・

集落内で支えあうことが難しい・・・

将来の展望が持てない・・・　etc.

住民の声

- 「日役に出られる人が限られている／日役ができない。」
- 「区長が2～3年に一度まわってくる。」
- 「田んぼが荒廃している。持ち主は都会へ出て、管理を一切しない。」

- 「様々な補助金があるが、補助がついても作業自体ができない。」
- 「冬の雪かきが高齢者にとって大きな生活課題／雪かきさえなければ何とか暮らせる？」

課題解決をどう図る・・・？
→ 集落内だけで考えていても
解決策がなかなか
見つからない・・・。

「外からの力」の活用

「外からの力」を地域が受け入れ、活用・協働するつながりづくり、しくみづくりができないか・・・

"支援集落"対策

～知井振興会（地元自治組織）

外部からのサポートにより集落機能の維持を図りたい・・・

社協から協働実践への提案

・名賀先生代表「京都ボランティア学習実践研究会」を紹介

淡路阪神大震災の事務局として
活躍！名賀先生との出会い！

京都ボランティア学習実践研究会代表（華頂短期大学社会福祉学科準教授）

ワークキャンプ実践構想

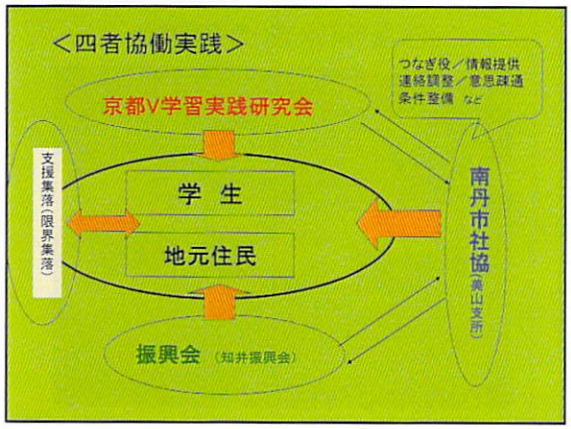
～京都ボランティア学習実践研究会

＜ワークキャンプ概要＞

・自ら主体的に参加してくる学生らが、ともに合宿をしながら、地域の課題、そこに暮らす人たちの生活課題の解決を応援するボランティア活動

・活動を通じて多様な気づき・学び・変化を期待（福祉教育・ボランティア学習実践として）

＜四者協働実践＞



限界集落への支援・援助

2008/9/4（H20年）からスタート

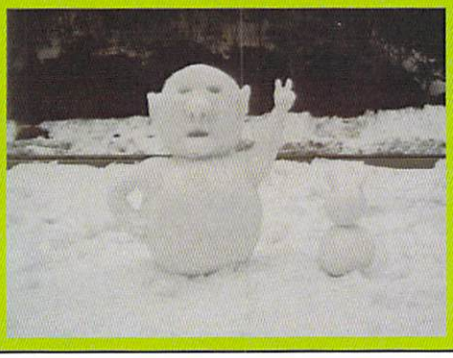
外部のちから・学生ボランティア！

ワークキャンプでのスケジュール・・・

この知井会館でみんなで共同生活！

ちゃんと当番制で自分達で自炊をします！

ワークキャンプ実践のようす・・・



作業開始前の円陣！

作業開始はこんなに大草…！
旧中学校グラウンドの雑草引き

みんなで協力すれば…

見事に！グラウンドが表れて！

溝そうじ作業

水路の泥上げ

お寺の草引き

支援集落の寺の雪囲い作業

除雪作業

知見集落での除雪作業
家の軒の高さでの雪掻き

雪害による倒木の除去作業

こんな過酷な作業だって・・・

冬の寒のモチつき

きのう(H23．12．10)の南区
における竹伐りの作業

今日（H23．12．11）の佐々里区における作業

今日（H23．12．11）の佐々里区での住民との交流もちつき

京都府地域力再生プロジェクト
支援事業への取り組み

旧八ヶ峰グラウンド及び裏山整備に活用

自然を活かした交流拠点整備事業
（森林浴と交流広場）

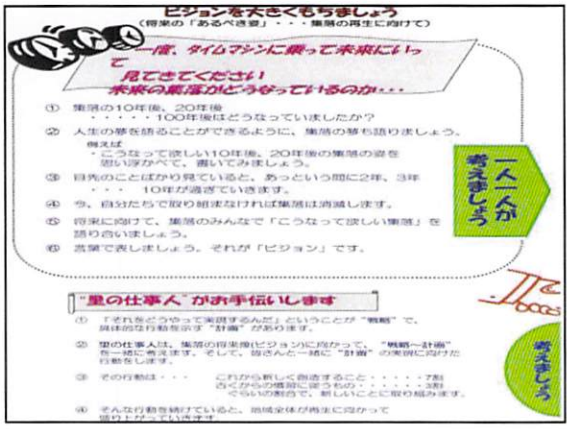
北村を拠点とした地域活性化への活用

北多目的交流拠点施設整備事業
（地域めぐり）

地域防災・地域見守りへの活用
京都府地域力再生活動
安全安心のまちづくり事業

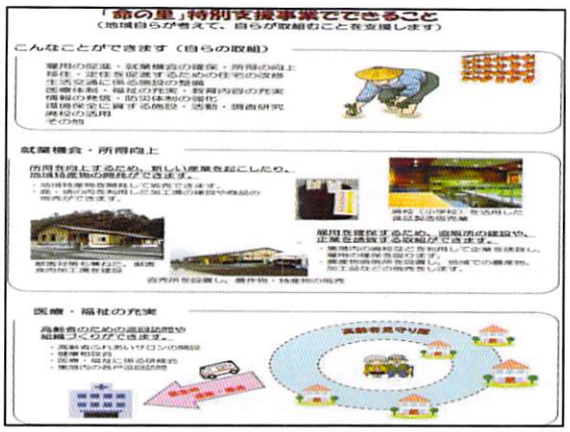
共に育む「命の里」とは
里の基礎づくり
里の人づくり
活動組織づくり
地域の課題解決
人材サポート
事業の主体となる地域連携組織は
美山の地域振興会をモデルとしています。
平成22年度より、京都府の目玉事業
「命の里事業」に取り組む！

命の里の再生をめざして
農村ではむかしから、田畑で米や野菜をつくり、豊かな自然によるおいしい空気や水に恵まれ、昔ながらの伝統行事が行われてきました。
また、豊かな森や田畑は自然災害を防ぐなどの役割を果たしてきました。
今、農村では、若い人が少なく、高齢者が多くなり、人と人どうしのつながりも少なくなってきています。
猿・鹿・猪などの獣害の激増により田畑を耕すのをやめたり、手入れのしない森は荒廃していくばかりです。
さらに、生活のなかでは不便さを感じ、このままでは集落がなくなってしまいます。
そのために、今できることを考えませんか。


ビジョンを大きくもちましょう
（将来の「あるべき姿」・・・集落の再生に向けて）
一度、タイムマシンに乗って未来にいって
見てきてください
未来の集落がどうなっているのか・・・
① 集落の10年後、20年後
・・・・・100年後はどうなっていましたか？
② 人生の夢を語ることができるように、集落の夢も語りましょう。
例えば
・こうなって欲しい10年後、20年後の集落の姿を思い浮かべて、書いてみましょう。
③ 目先のことばかり見ていると、あっという間に2年、3年
・・・・10年が過ぎていきます。
④ 今、自分たちで取り組まなければ集落は消滅します。
⑤ 将来に向けて、集落のみんなで「こうなって欲しい集落」を語り合いましょう。
⑥ 言葉で表しましょう。それが「ビジョン」です。
一人一人が考えましょう
"里の仕事人"がお手伝いします
考えましょう

里力再生事業でできること
（地域で考えたことを計画づくりに・・・）

共に育む「命の里」事業でできること
（地域を住みやすくしましょう）
生活環境基盤
農業生産基盤
就農基盤


「命の里」特別支援事業でできること
（地域自らが考えて、自らが取組むことを支援します）
こんなことができます（自らの取組）
就業機会・所得向上
医療・福祉の充実

移住・定住の促進
生活交通の確保
廃校の活用

The End
ご清聴ありがとうございました

第 4 部　総括会議

2014 年 11 月 17 日　美山町自然文化村文化ホールでの総括会議

総合討論のまとめ

総合討論は24名が参加した。残念ながら京都ボランティア実践研究会の学生さんたちと教員の名賀さんらは予定があわず参加はかなわなかった。総合討論では、参加者一人一人が今回の国際会議の感想やコメント、問題を指摘する発言を行い、日本語から英語、英語から日本語の通訳を発言時に安藤が行った。通訳の時間がかかることもあり、時間はあっという間になくなり、各自の発言から出た論点を絞り込んで十分な討論時間がとれなかったことが惜しまれる。以下に発言の要点を安藤がとったメモに基づいてまとめた。発言内容の間違いや採録されていいなかったりしたとしたら、その責任は記録をまとめた安藤にある。報告書作成の時間的制限もあり参加者皆さんに本原稿をチェックする時間的余裕がなかった。参加者の皆さんに許しをこいたい。

＜討論記録メモ＞

高知大学の学生たちの意見は、ワークキャンプを一つの例として、学生が地域振興における一定の役割を果たせることが確認できたことと、大豊と美山での高齢化などの社会状況の違いや、地域活性事業では地域のキーパーソン、地域性など考慮することの重要性が指摘された。特に印象にのこった話として、河野賢司さんの発表のなかでの、地域（過疎地）で暮らすことが楽しいということが大切である。この主張はもっともだという意見があり、参加者の賛同を得ていた。過疎地域で暮らすことの大変さばかりを強調することよりも、そこで暮らすことの楽しさをアピールすることが大切なのではという重要な意見が若い人からあったことは大変有意義だった。

美山町と四国の中山間地域とは違いが顕著であることは他の参加者からも指摘されている。美山町は四国にくらべて明るくて広い、外国人にとっては美山町が村ではないという感想もうなずける。地域活性には若い人たちによるワーキングキャンプは有効だがワーキングキャンプの受け入れなどの障壁が気になる。

次に、Ｉターン、Ｕターンの話題がでて、地域の活性化には新しい人たちがパートナーとなって地域力を高めていくことが必要で、外国人や地域活性事業に外からかかわる人は重要な役割をになっている点、Ｉターン者が地域に馴染むまでには時間がかかり、それと同様に地域活性にも時間をかけることが必要であるという意見が述べられた。相互啓発が重要であって、ことさら地域貢献を強調すべきではないということも指摘された。Ｉターン、Ｕターンについては発言者自身の経験から、選択された情報、雑多の情報があるがＩターン、Ｕターンを増やしていくためには、Ｉターン、Ｕターンしたいという気もちを人々いだかせることが大切となる。例えば、同世代の若者との遊びの思い出であり、こうした共有される地域での思いで出などの情報をうまくつくっていくことがＩターン、Ｕターンを増加させるためには不可欠である。

地域活性には農業とのコンビネーションが基本である。現在、日本人は身近なまわりの生き物（例えば小魚）をとって食べないが、本来はとって食べた方がよく、こうした農業生産や食の調達の問題が地域活性の基本的な問題であることを再確認しておくことがよいという提案があった。

ミャンマーの方の発言であるが、過疎や離農の問題は人間がつくった問題であるから解決もかならず人間ができる、という力強いコメントがあった。また、ブータン方は今回の参加と日本でのスタディー・ツアーは、文化変容がご自身に起きているという感想があった。インドのアッサムの方からは過疎、離農の海外の現状は日本ほど深刻ではないが、日本のような状況を他山の石として考えていくことが重要であるというコメントがあった。またラオスの方は、幸福感は地域によって異なり、ラオスでは農家の幸せは米倉に十分の米が入っていて、十分な教育を受けれるようになることで、幸福感の違いにも注目する必要があることが指摘された。

草の根の農村開発に関する国際会議の特徴はやはり外国人がいることであるという発言の一方で、せっかく、日本の各地の実践者が集まっているので、各地域を比較できるように、基本的な統計を基礎資料として事前に準備しておくことや、英語から日本語への通訳を入れるとどうして発表の時間がかかってしまうので、できれば海外の人の発表は事前にこちらも日本語訳が資料として配布されているとよいという提案があった。

今回の会議には若い人が来ていたので、今後が楽しみ。Ｉターンは孤立しやすいので、タテ、ヨコのつながりができ、大きな輪ができていったらよい。そして、海外の人の意見がきけることが望まれるという知井へのＩターンの若者の意見があった。

また、現在、知井振興会はブータン国の GNH

を一つの開発の理念にしていることから、会長の高野さんは、幸福感をしっかりと自覚し、みせかけの幸福と本物の幸福をしかり区別、理解することが重要である趣旨の発言があった。

河野さんから、準備不足の指摘を受けたことなどに対して、もっとしっかりと準備をできていれば、もっと有効な国際会議とすることができたかもしれない。もったいなかったという謝罪があった。とくに都市と農村の関係から学生の活動をについて会議ではもっと掘り下げて議論できればよかったという発言があった。

最後に安藤が総括した。今回の国際会議は学生交流がしっかり組み込まれた会議となって、高知大学の学生たちにも他の地域を知る良い機会を提供できたことは大変有意義であった。また、準備については、確かに、事前に英語から日本語翻訳できたらよいのであるが、今回の準備も河野さんを中心に京大東南アジア研究所の実践型地域研究推進室がそれを支援した。経費を使えば翻訳の問題は解決するかもしれないが、海外と日本国内の招へい旅費を工面するだけでも大変なので、今後、この会議を継続していくとしたら、当分は、現在のようにその場での通訳という形式をとらざるを得ないことを理解してもらいたい。この国際会議も今回で一巡したことになり、今回をもって休止という選択肢もあった。しかし、総合討論でもこの海外の事情や海外の方の意見を聞ける国際会議の意義を特に若い学生、I ターンの若者が認めてくれているので、また、来年度も実施したいという気持ちを強くした。来年度は二巡目となり、亀岡での開催となる。受入事務局は大西さんに担当してもらうことになる。大西さんの了解が得られたので、来年も亀岡で開催するという方向で準備をすすめていきたい。(記録のとりまとめは安藤が行った。2015 年 3 月 28 日記)

The 6th International Conference on Another Grassroots Rural Development Focusing on Culture, History and Ecology in Miyama-cho, 15 to 17, Nov. 2014.

Table of Contents

Welcome Address (Masahiro Yuge: Deputy Representative, Miyama Sub-Office, Nantan City-Cooporation)
Key Note Speech "Self-Awareness through Mutual Enlightenment" (Kazuo Ando: CSEAS, Kyoto Univ.)

Session 1: Case Studies from Overseas

Migration and Rural-Depopulation in Eastern Bhutan and Its Effect on Farming Activities: A Case Study of Radhi Gewog,,Trashigang. (Sonam Phuntsho : Sherubtse College, Royal University of Bhutan) • • • • • • • • • • • • • • • 1
Impact of Urbanization in Myanmar.
(Win Myat Aung : SEAMEO Regional Center for History and Traditional, Myanmar) • • • • • • • • • • • • 6
Some Aspects of Eco-friendly Agricultural Practices in the Apatani Valley , Arunachal Pradesh, India.
(A.K. Bhagabati : Department of Geography, Gauhati University, India) • • • • • • • • • • • • • • • • • • 12
Depopulation Scenario of Indigenous Peoples in the Chittagong Hill Tracts, Bangladesh
(Chakma Shishir Swapan : FAO, Kazuo Ando : CSEAS, Kyoto University, Lushai Thanzuala : FAO) • • • • • 15
Story of Village Settlement and Development with Concerning on Livelihood Activities in Thachampa Village, Lao PDR.
(Lampheuy Kaensombath : National University of Laos, Somboun Phomsouvane :Village Chief, Thachampa Village, Xaythany district, Vientiane Capital, Lao PDR) • 25
Practice on Conservation of Traditional Culture and History in Rural Laos
(Kichiji Yajima : CSEAS, Kyoto University) • 29

Session 2: Student Volunteer Activities and Learning

Activities in Rural Communities by Students of Kochi University(Masahiro Ichikawa : Kochi University) • • • • • • 33
Kochi University Student Activities and Issues in Otoyo, Nuta (Kazuhiro Takahashi : Kochi University) • • • • • • 39
Chii and Student Volunteers in Kyoto Society of Practical Volunteer Education (Toru Naga : Kacho College) • • • • • 43
Activities in Chii, Miyama town and Its Problems (Kyoto society of Practical Volunteer Education) • • • • • • • • • 45
Role of the Student Volunteer in the Local Promotion : Based on an Example of the Exchange Activity in Abu-cho, Yamaguchi Prefecture, Japan (Tamon Tsuji :Yamaguchi University) • 50
A University's Contribution to Its Local Society (Amano Gen:Yamaguchi University) • • • • • • • • • • • • • • • 58

Session 3: Programs of Regional Revitalization

Women's Activities through Participatory Rural Appraisal in Ubuka, Abu-cho, Yamaguchi Prefecture, Japan-With Emphasis on the Preservation of Local Folk Tales (Kazuko Tatsumi : Fukuoka University, Miwa Nishimura : Yamaguchi Prefecture) • 61
Actual Condition and Issues in Mountain Villages: An Example from Nuta Village in Otoyo (Manabu Ujihara : Farmer of Otoyo Town) • 65
People Coming together in Suitan Farm -Living with Farming- (Nobuhiro Ohnishi : Kyoto Gakuen University) • • • • 67
Chii, Miyama town 1. The Historic Village of Thatched Roof House (Tadashi Katsuyama : Kayabuki-no-sato Ltd.) • • 71
Chii, Miyama town 2. Ashu-no-sato (Takashi Imai : Ashu-no-sato Ltd.) • 74
Chii, Miyama town 3. Community Development by Eco-tourism (Atsushi Takamido : Miyama-Furusato Co., Ltd.) • • 75
Role of Chii Promotion Association in Regional Revitalization (Kenji Kono : Chii Promotion Association Secritariat) • 77

Session 4: General Meeting

General Discussion • 97
Table of Contents in English • 99
Editior's Note • 100

編集後記

美山町知井地区に私がはじめて訪問したのは1992年頃だったと記憶しています。私の大学院時代の恩師である渡部忠世先生が代表となった京都府の委託事業で都市と農村の共生関係の確立に関する調査研究プロジェクトのメンバーとしてでした。当時京北町にあった京都府の農業普及センターに、草の根の農村開発に関する国際会議でも活躍していただいた中村均司さんが農業改良普及員として勤務されていました。その関係で京都府の委託調査研究プロジェクトの最初の訪問地が美山町の自然文化村になったのでした。北村がかやぶきの里として保存認定を受ける直前で、北村ではホットな議論が沸き起こっていたときです。観光カリスマの元美山町助役の小馬勝美さんが美山町立自然文化村館長であったと記憶しています。美山町、中でも、知井地区は私にとっては日本の中山間地の実態をはじめて知らされた土地です。

あれから20年以上が経過しました。いまでは美山町はかやぶき屋根の里である北村や他のグリーンツーリズ事業、地域再生事業が振興会制度と組み合わさって展開されるに至っています。20数年前に播かれた種がしっかりと育っているという印象を私はもっています。知井振興会においては、事務局長の河野賢司さんがエンジンとなって知井振興会の様々な事業を引っ張っておられます。河野さんご自身は島根県からのＩターンの酪農家です。だからこそ熱く河野さんはいつも語ってくれます。河野さんの言葉と行動に感化を受けながら知井で学ばせてもらっているというのが私の現状です。河野さんが今回の事務局を引き受けることは大変重荷だったとことでしょう。酪農家としての日常の多忙の中、「第6回草の根の農村開発に関する国際会議」を受け入れていただくことで、私が学んでいるフィールドに皆さんに来ていただくことができました。相当な無理を河野さんに押し付けしてしまったことになり大変申し訳なく思っています。国際会議の全体討論の中で、会議の運営面でのスムーズでなかったことや準備不足等々の問題が指摘されましたが、この責任は河野さんというよりも安藤にあるので、この場をかりて、参加者の皆さん、そして河野さんに再度陳謝致します。本国際会議も第5回からは学生の皆さんの参加をという要望が出て、第6回の今回の会議でも学生の皆さんの発表や、美山町佐々里でのボランティア実践をスタディーツアーとして見学できたことは大変よかったと思います。しかし、参加人数が多くなればそれだけ受け入れの事務量は倍加していくことになります。また、まだ整理できておらずうまく表現できませんが、本国際会議の目的も少しずつですが変わってきていることも感じています。

今回の報告書を作成しつつ、絶えず、私の頭をよぎった考えは、今一度きっちりと目的を再確認して、本国際会議の意義を皆さんと共有していくことが必要ではないか、ということでした。今回の総合討論ではそのことが大変クリアに示されたと思います。第7回の草の根の農村開発に関する国際会議は亀岡で大西さんが受け入れの中心事務局を担当してくれることが決まっていますが、それに向けて、今年度はしっかりと議論をしていきたいと考えています。是非、皆さんご協力ください。

ともあれ、繰り返しになりますが、私が長年通いつづけている美山町知井で草の根の農村開発に関する国際会議を開催できたことは大変ありがたいことだと、今回の受け入れ事務局を担当していただけた知井振興会事務局長の河野賢司さんに感謝します。そして、お忙しいところ本国際会議参加者のスタディーツアーの訪問先として、また、各事業の紹介発表をしていただいた美山町の（有）芦生の里の今井 崇さん、（有限会社）かやぶきの里の勝山 直さん、また、挨拶等をいただいた、美山町支所長の弓削雅裕さん、知井振興会高野会長、美山町のエコツーリズムの高御堂厚さん、また遠路はるばる参加いただいた皆さん、報告書の作成では発表原稿を積極的に寄稿していただいた発表者の皆さん、制作費の助成を受けた高知大学自然科学系「中山間」プロジェクトおよび京都大学　地の拠点事業（ＫＹＯＴＯ未来創造拠点整備事業－社会変革期を担う人材育成）、編集作業に多大のご尽力をいただいた高知大学の小林智子さん、以上の方々に記して感謝の意を表します。ありがとうございました。（安藤和雄　2015年3月27日記）

第6回　文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議―京都市美山町知井 2014 年 11 月 15 日～17 日―報告書
発行日：2015年3月31日
ISBN：978-4-906332-29-8
編集：安藤和夫・市川昌広
発行：
高知大学自然科学系農学部門「中山間」プロジェクト
〒783-8502 高知県南国市物部乙200　TEL：088-864-5173
京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
〒606-8501 京都市左京区下阿達町46 TEL：075-753-7334（安藤研究室気付）、7335（直通）

南丹市美山町知井地区の佐々里川と紅葉

発行：
高知大学自然科学系農学部門「中山間」プロジェクト
〒783-8502 高知県南国市物部乙 200　TEL：088-864-5173
http://chusankan.sub.jp/wp/
京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
〒606-8501 京都市左京区下阿達町 46
http://www.cseas.kyoto.ac.jp/pas/
ISBN: 978-4-906332-29-8